近代スポーツの形成とイギリス競馬

―競馬統括団体ジョッキー・クラブに関する考察を中心に―

文学研究科　鍵谷寛佑

【　要旨　】

本論文は、近代スポーツの祖として位置付けられるイギリス競馬に焦点を当てる。特に、競馬の発展がイギリスの近代化のプロセスと合致している点、また、競馬が各時代に順応する形で、すべての階級にとっての「合理的娯楽」へと変貌を遂げる点に留意し、競馬を通して近代スポーツを考察することで、18、19 世紀のイギリス社会を描写することを目的としている。

イギリス競馬は、元来、王侯貴族が独占した娯楽であったが、時代が下るにつれて、貴族やジェントリを中心とした上流階級の手に委ねられるようになった。その際、自らの社交場で行われる競馬を、ある一定の規則の下で管理しようと試みる団体が出現した。この団体こそ、18 世紀半ばに上流階級の人々によって結成され、イギリス近代スポーツにおける統括団体の先駆的存在となった、ジョッキー・クラブ（the Jockey Club）である。本論文では、このジョッキー・クラブが、18 世紀半ばから 19 世紀末までの約 1 世紀間に、全国的な統括団体へと成長を遂げるとともに、競馬を上流階級の排他的スポーツから全階級にとっての国民的スポーツへと昇華させた過程について考察する。

本論文は、序章で問題提起および研究史の整理を行なった後、本編を三部構成とし、「おわりに」をまとめの終章とした。以下、本編の章立てを述べることにしたい。

第一部は、「近代スポーツとしての競馬の成立」と題して、18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけて、すなわちジョッキー・クラブの揺籃期および初期発展期にあたる時期を扱う。

まず第一章では、ジョッキー・クラブの設立とその背景について概観するとともに、クラブの公式機関誌としての役割を果たすことになる『競馬年鑑』（*Racing Calendar*）の創刊について考察する。1773 年初版の『競馬年鑑』には、競走予定や競走結果はもちろん、購読者リスト、クラブの独自規則、馬主のリストや種牡馬広告など多岐にわたる情報が掲載されていたが、版を重ねるごとに広範囲で購読者を抱えるようになり、地方で競馬を楽しんだカントリー・ジェントルマンたちにも愛読されるようになった。

続く第二章では、ジョッキー・クラブの幹事で、「ディクテイターズ・オヴ・ザ・ターフ（Dictators of the Turf）」の一人に数えられるチャールズ・バンベリー卿（Sir Charles Bunbury, 1740-1821）の競馬改革を扱う。その際、彼の時代に実施された統括団体内部の組織化および競走改革が、近代スポーツの一要因であることに留意する。また、1793 年初版の『血統登録書』（*General Stud Book*）によって規定されたサラブレッド（Thoroughbred）と呼ばれる競走馬が、馬主に対して強い血統意識を創出させた点についても論じる。

第三章では、第二章の改革を受けて、ジョッキー・クラブを中心とした競馬の組織化がさらに進み、18 世紀末から 19 世紀前半にかけて、競馬が一大娯楽の様相を呈し始めた点に着目する。特に、18 世紀末から創設され始めた、三歳馬限定戦であるクラシック・レース（Classic Races）は、時代に合う形での規則改定が度々なされたことで、やがて大きな人気を博した。それに付随して、クラシック・レースの勝ち馬が良血として多くの馬主に重宝されることになった点を指摘したい。また、ジョッキー・クラブの幹事が、クラシック・レースの最高峰とされるダービー（Derby）とオークス（Oaks）を開催したエプソム（Epsom）競馬場の幹事職を兼ねることで、競馬統括団体としての成熟度を高めた点にも合わせて留意したい。

第二部「競馬によるネットワークの進展」では、19 世紀中頃から後半にかけてジョッキー・クラブ幹事を務めた二人の競馬改革者を中心に、クラブのネットワークが中央から地方へ拡大されていく点、競馬が全階級的スポーツに成熟する過程について論じる。

第四章では、19 世紀中頃のジョッキー・クラブ幹事として、観客のための「魅せる」競馬改革を中心に、様々な改革を行ったジョージ・ベンティンク卿（Lord William George Frederick Cavendish-Scott-Bentinck, 1802-1848）について、また、彼が管理したグッドウッド（Goodwood）競馬場の開設と進展に見られる、ジョッキー・クラブの地方への競馬ネットワークの拡大について論じる。

続く第五章では、19 世紀後半のジョッキー・クラブ幹事ヘンリ・ジョン・ラウス（Admiral Henry John Rous, 1795-1877）の、競馬を全階級的スポーツとして捉えるという、より深化した改革およびジョッキー・クラブのメンバーシップの変化を中心に論じる。その際、ジョッキー・クラブのネットワークが、イギリス本国にとどまらず、近隣諸外国へ拡大されていく点にも注意したい。

第三部「競馬に見る階級性と賭け」では、競馬の副次的要素として必要不可欠な「賭け」について考察する。その際、上流階級の「賭け（betting）」意識と労働者階級の「賭け（gambling）」の実態に関する分析から、それぞれの階級における賭けの相違を示したい。加えて、上流階級と労働者階級の間に位置する中産階級が、彼らの社会的成熟に応じて上流階級に接近する一方、彼らの一部が、19 世紀中頃から 19 世紀末にかけて深刻な社会問題となる労働者階級の賭けを、社会改良の観点から批判するようになるという二面性を持つ事実も指摘せねばならない。

そこで第六章では、上流階級の賭けが、彼らの社交空間であるクラブや競馬場内に設け

られたベッティング・リング（Betting Ring）などの特権的空間で行われた一方、労働者階級の賭けが、競馬場の内外に数多く存在したブックメーカー（bookmaker）と呼ばれる賭けを請け負う業者を通じて、彼ら独自の空間で行われた事実を示すことで、空間的分離があったことを指摘したい。

最後の第七章では、19 世紀中頃から始まる労働者階級の賭けに対する規制を受けて、19 世紀末に設立された全国反賭博連盟（National Anti-Gambling League, NAGL）について論じる。その際、全国反賭博連盟結成の背景が、中産階級の社会改良の一環であった点、また同連盟が 20 世紀初頭にかけて積極的に活動し、一定の成果を上げた点について確認する。

近代スポーツの形成とイギリス競馬
―競馬統括団体ジョッキー・クラブに関する考察を中心に―

【　目次　】

序章 …… 1
はじめに …… 1
本論文の構成 …… 5
研究史の整理 …… 8

第一部　近代スポーツとしての競馬の成立 …… 22

第一章　ジョッキー・クラブの揺籃期 …… 23
第一節　ジョッキー・クラブの設立と初期の活動 …… 23
第二節　クラブの公式機関誌『競馬年鑑』（*Racing Calendar*）の創刊 …… 28

第二章　ジョッキー・クラブの初期発展期 …… 37
第一節　サー・チャールズ・バンベリーの改革 …… 37
第二節　血統意識の高まり―『血統登録書』（*General Stud Book*）の成立― … 42

第三章　18 世紀末から 19 世紀前半にかけての競馬の変化 …… 51
第一節　競走形態の変化とクラシック・レースの成立 …… 51
第二節　規則の改定と馬主の血統意識の変化 …… 55
第三節　エプソム競馬場の掌握とニューマーケットの「聖地化」 …… 60

第二部　競馬によるネットワークの進展 …… 67

第四章　ジョッキー・クラブの後期発展期 …… 68
第一節　グッドウッド競馬場の開設と進展に見る
地方への競馬ネットワークの拡大 …… 68
第二節　クラシック・レースの発展とジョージ・ベンティンク卿の改革 …… 77

第五章　ジョッキー・クラブの確立期 …… 86
第一節　ヘンリ・ジョン・ラウスの改革 …… 86
第二節　クラブ会員の変化と諸外国への競馬ネットワークの拡大 …… 93

第三部　競馬に見る階級性と賭け …… 102

第六章　競馬の「賭け」が有する意義 …… 103
第一節　上流階級の「賭け（betting）」―社交空間としてのクラブ― …… 103
第二節　労働者階級の「賭け（gambling）」と社会問題
―ブックメーカーの登場と発展― …… 108

第七章　近代イギリスにおける「賭け」とその規制 …… 114
第一節　全国反賭博連盟（National Anti-Gambling League）の設立とその背景
…… 114
第二節　全国反賭博連盟の具体的活動と
世紀転換期における全国反賭博連盟の運動の高まり …… 118

終章 …… 123

参考文献表 …… 127

序章

はじめに

イギリスでは、18 世紀中頃以降 19 世紀を通じて、数多くの近代スポーツが誕生した。しかし、一言で近代スポーツと言っても、それは長い歴史の中で複合的に発展してきたものであり、例えば 18 世紀中頃に成立するクラブ（Club）と 19 世紀中頃に登場するアソシエーション（Association）は、ともに「ある特定のスポーツを統括する団体」という意味合いを持つが、組織化のタイムラグは実に約 100 年にも及んでいる。前者のクラブは、元来上流階級中心の社交クラブとしての性格が色濃く、統括団体としての成熟には一定の時間を要したが、その階級性と歴史性から、後に確固たる地位を築いていった。その証拠に、後者のアソシエーションは、特定のスポーツを統括することを主たる目的として設立されたが、それは言わば、クラブの成熟に倣う形で登場したものであった。

とりわけ、イギリス史の中でスポーツが持つ重要性を無視することはできない。前近代的なものも近代的なものも含めて、スポーツはイギリス社会の中で常に重要な役割を果たしてきたし、様々な側面がある。具体的にいえば、農村における牛追いや熊いじめなどのブラッド・スポーツに代表されるローカルな側面、特にイギリスの支配者層主導によるスポーツや、彼らの子弟が集まるパブリック・スクールで行われるスポーツなどに代表されるナショナルな側面、そして、グレート・ブリテン島を越えて「帝国」に拡大するスポーツに見られるインペリアルな側面である。こうした諸相を持つ様々なスポーツが、時代に適応する形で、多くの人々に娯楽を提供してきたのである。中でも、「ローカル」、「ナショナル」、「インペリアル」な側面を全て含有する稀有なスポーツとして特筆されるのが、競馬である。

競馬は、イギリスにおいて「スポーツ・オヴ・キングス（the Sport of Kings）」と称され、近代スポーツの祖として位置づけられている。この言葉が示しているように、もともと競馬は王侯貴族が独占していたが、時代を経るごとに、中産階級や労働者階級も競馬を享受するようになり、やがて 19 世紀末には全階級的な国民スポーツへと変貌を遂げた。

スポーツの近代的発展には、統括団体の成立が必要不可欠であったが、競馬はこの点を他のスポーツに先駆けていち早く経験した。この競馬統括団体こそ、1750 年ごろに上流階級中心の社交クラブとして設立された、ジョッキー・クラブ（the Jockey Club）である[1]。このジョッキー・クラブの設立をもって、競馬は従来からの上流階級の娯楽としての性格、

すなわち「貴族的」特徴に加えて、「近代的」スポーツとしての特徴を示し始めたと言える。

ここで、イギリスにおけるスポーツ史の権威であるレイ・ヴァンプリュー（Wray Vamplew）の研究に依拠しながら、統括団体としてのジョッキー・クラブの変遷を概観して、時代区分を付すことにしたい。まず、設立から 19 世紀初頭までが第一期で、クラブの揺籃期といえる。この段階では、自らが本拠地とするニューマーケット（Newmarket）の競馬に対していくらかの改良を加え、クラブを発展させる下地を整えているという状況であった。続く 19 世紀初頭から 1860 年ごろまでが第二期で、クラブの発展期にあたる。とりわけ、1830 年代から 1846 年にかけてのジョージ・ベンティンク卿（Lord William George Frederick Cavendish-Scott-Bentinck, 1802-1848）時代が、その中心的役割を担った。そして、1860 年代から 20 世紀の転換期がクラブの確立期で、19 世紀末にジョッキー・クラブが競馬の絶対的権威となったと指摘される。この時代は、1856 年にクラブの財政担当となったヘンリ・ジョン・ラウス（Admiral Henry John Rous, 1795-1877）によって形作られたと言える[2]。

また、イギリス競馬の歴史、ジョッキー・クラブの歴史を研究対象としたロバート・ブラック（Robert Black）は、1891 年の彼の大著において、ジョッキー・クラブのメンバーシップの分析を中心として、クラブを 1750 年から 1773 年までの第一期、1773 年から 1835 年までの第二期、1835 年から出版年である 1891 年までの第三期という三期間に区分している[3]。1773 年は、『競馬年鑑』（*Racing Calendar*）の初版年であり、一方の 1835 年は、ジョッキー・クラブのメンバーリストが初めて『競馬年鑑』上に掲載された年である。ジョッキー・クラブの統括団体としての成熟過程に関して、ブラックの区分に対しても、それぞれにクラブの揺籃期、発展期、確立期という定義ができよう。

こうした先行研究を受けて、筆者は、クラブの設立（1750）から『競馬年鑑』の発行（1773）までをジョッキー・クラブの揺籃期とし、『競馬年鑑』の発行からクラブのメンバーリスト公開（1835）までを初期発展期、1830 年代半ばから 1840 年代半ば、すなわちジョージ・ベンティンク卿がクラブの幹事となった 1836 年から彼が亡くなる 1848 年までを後期発展期、それ以降、特にヘンリ・ジョン・ラウスの時代からジョッキー・クラブの規則が全国的な競馬施行規則になった 1877 年を中心とする、19 世紀末までを確立期と分類している[4]。まずは、これらの区分に従いながら、それぞれの時期におけるジョッキー・クラブと競馬の進展について分析することから始めたい。

第一に、ジョッキー・クラブの揺籃期についてであるが、一般的に言われる 1750 年ご

ろの設立時において、当時の競馬は上流階級の人々による余暇の代表格であり、彼らはアマチュアとして、自分たちが管理する競馬を楽しんだ。18 世紀半ばにおける競馬は、未だ近代という時代に合う形には改良されておらず、長時間にわたって行われた[5]。この時代の競馬は、同じ有閑階級に属する仲間が集まり、それぞれが思い思いに楽しむというスタイルであった。こうした中で、ジョッキー・クラブが成立することになったが、それは 18 世紀における数多くの社交クラブの誕生と無縁ではなく、クラブにおける社交を通じて、競馬の担い手である上流階級の結束を強化するとともに、彼らに社会的エリートとしての自覚を維持させる役割を担っていた。事実、ジョッキー・クラブが本拠地としたニューマーケットは、チャールズ 2 世以降の王族や貴族たちによって権威づけられていた場所であり[6]、クラブはこの地で、本来の「貴族的」な要素を強化すると同時に、競馬統括団体として一般を対象としたスポーツの近代化を図るようになった。

第二は、ジョッキー・クラブの初期発展期に関する検証である。ジョッキー・クラブ主導の下で、やがて競馬が全階級的スポーツとして統括されるにあたって、重要な役割を果たしたのがメディアの利用である。このメディアこそ、クラブの設立から 20 数年を経た 1773 年に発行された『競馬年鑑』に他ならない。この定期刊行物は、イギリス各地の競馬場の開催予定情報および競走結果を掲載するとともに、ジョッキー・クラブの競馬施行規則、命令などを他の競馬場に発信する際の重要な情報媒体となった。加えて、ジョッキー・クラブは、18 世紀末にもう一つの重要な定期刊行物を発行し始めたが、それが 1793 年初版の『血統登録書』（*General Stud Book*）であり、この中で定義されたのが、サラブレッド（Thoroughbred）である。「純血」とされたこの新しい種の競走馬が、「高貴な」クラブメンバーを抱えるジョッキー・クラブによって創り出されたことは、強調されるべき点である。

このサラブレッドの誕生と大きくリンクしているのが、18 世紀末から開催され始めたクラシック・レース（Classic Races）である。19 世紀前半には、クラシック・レースが人気を博し、競馬は上流階級が運営するスペクテイター・スポーツとして、競馬場を訪れる観客にハイレベルな競走を「魅せる」ことで、興奮と感動を味わわせた[7]。これは、従来の少頭数から多頭数への競走形態の変化が呼び起こしたもので、一対一での勝利よりも多数の競走馬の中で勝利を収めることが、より大きな意味を持つようになった。特に、クラシック・レースでの戦績は、その競走馬の血統が馬主たちに重視されるかどうかの鍵を握っており、良血のサラブレッドを後世に遺そうとする動きに拍車をかけた。

19 世紀前半における競馬のこうした傾向と特徴について、歴史家ノルベルト・エリアス（Norbert Elias）は、当時のイギリスで「スポーツ」という言葉が、まさに貴族的な、あるいは「社交界」式の娯楽であったと述べている[8]。また、リンダ・コリー（Linda Colly）は、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて、真に「イギリス」的といえる支配者層が出現し、彼らが結束を強めたことを指摘しているが[9]、社交クラブであるジョッキー・クラブはそうした上流階級の人々が結束する場であっただろう。ジョッキー・クラブの初期発展期における、競馬の「貴族的」、「近代的」スポーツへの変革は、それを通して、上流階級の人々が自らの連帯意識、他の階級への意識をより鮮明にしようとした結果と言える。

第三は、後期発展期についてであるが、この時期を考察することは、19 世紀中頃を代表するジョッキー・クラブ幹事（steward）であるジョージ・ベンティンク卿の改革を考察することでもある。彼は、近代スポーツに必要不可欠な公平性やエンターテイメント性を重視した、競馬を観客に「見せる」と同時に「魅せる」ための競馬改革を行った。その際、彼の競馬改革の嚆矢となったのが、地方競馬場でありながら、ニューマーケットの近代化の実験的競馬場として機能し、地方への影響力拡大のモデルケースと言える存在であったグッドウッド（Goodwood）競馬場である。

ここで、ベンティンク卿の競馬改革が促進された要因として、他の階級の参入について追記しておきたい。19 世紀中頃になると、競馬はもはや上流階級だけの娯楽ではなくなった。上流階級にとっては、19 世紀に入っても、競馬に参加することは、社交の一環であり続け、加えて 19 世紀中頃には、他の階級に自らの威光を見せる機会にもなった。その際、上流階級の人々は、グランド・スタンド（Grand Stand）と呼ばれる特別観覧席に陣取ることで、結束を強化するとともに、他の階級との身分的切り分けを行った。競馬を統括していた上流階級によるジョッキー・クラブは、新しい参加者に合理的な娯楽を与えるために、競馬のスポーツとしての近代化を図る様々な改革を行った。また、それと同時に、中産階級の一部を取り込んで自らの再編を図るとともに、自らと他の階級との差異を明確化するために、競馬が本来持つ「貴族的」要素を強化する試みが推進されたのである。

一方、19 世紀以降富裕化した中産階級にとって、馬主として競馬に参加することは、社会的な上昇を示すステータス・シンボルを求めたものであり、加えて上流階級との交流を企図したものでもあった。19 世紀中頃に馬主登録を行っていた中産階級の具体的な数値に関しては本論で述べるが、馬主登録全体の大部分を占めていたことが明らかになっている。また、同時期の労働者階級は、馬主として競馬に参加することは到底かなわなかったが、

日々の労働の対価であるレクリエーションとして、頻繁に競馬場に足を運ぶようになった。

最後の第四はクラブの確立期に関してだが、競馬にあらゆる階級が参加するようになった 19 世紀後半を代表するジョッキー・クラブ幹事のヘンリ・ジョン・ラウスは、「競馬は公共の利益であり、嗜好の類似を生みだす気晴らしは、等しい割合で友好的感情を呼び起こす」と述べ[10]、競馬がまさに全階級的なスポーツであることを示唆した。加えてラウスは、「私は、人類に対する全体利益および、更なる広範囲の慈善媒体として競馬の伸長を歓迎する」とも述べている[11]。

ラウス時代における競馬の発展に伴い、先に述べたように、1877 年にジョッキー・クラブの競馬施行規則が全国的なものになったが、同時期に競馬の副次的要素である賭けが伸長することになった。事実、ラウスは賭けに対して次のような警鐘を鳴らしている。それは、「私は、常に人々の絶滅の前兆となる敵である過度の賭け（excessive gambling）や、大金が競走に依存している時に明白である不快な傾向を無視しない。大規模な賭け（betting on a great scale）は、しばしば痛ましい結果を生み出し、素晴らしい競走の健全な興奮や競走馬の血統を改良するという愛国心を表す動機が、二次的な考慮になる」という内容であった[12]。競馬における賭けに関しては、一言で賭けといっても、明確な階級社会を有するイギリスにとって、各階級で大きく意味合いが異なるものであった点に留意すべきである。加えて、本論文では、ジョッキー・クラブの確立期と重なる 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、賭けが深刻な社会問題として規制の対象となっていく過程にも注目している。

本論文の構成

まず、本論文の目的は、近代スポーツの祖である競馬の発展がイギリス近代化のプロセスと見事に合致している点、競馬の担い手である上流階級が各時代の社会情勢に対応する形で、やがて競馬を全階級にとっての「合理的娯楽」、すなわち「国民的スポーツ」へと昇華させる点に着目し、競馬を通して近代スポーツを考察することで、18、19 世紀のイギリス社会を描写することを目的としている。序章では、この「本論文の構成」を含めて、「はじめに」でイギリス史における競馬を含めたスポーツの重要性、筆者によるジョッキー・クラブの時代区分について言及し、合わせて「研究史の整理」を行う。本論文は、序章、本編三部七章、終章という構成になっている。以下、本編三部の各章について述べていきたい。

第一部は、「近代スポーツとしての競馬の成立」である。ここでは、18 世紀後半から 19 世紀前半にかけて、すなわちジョッキー・クラブの揺籃期および初期発展期にあたる時期を中心に扱う。

まず第一章では、ジョッキー・クラブの設立と初期の活動について概観するとともに、クラブの公式機関誌としての役割を果たすことになる『競馬年鑑』の創刊について論じる。クラブの揺籃期において、ジョッキー・クラブは、競馬好きの上流階級が集まる一流の社交場として、ニューマーケットをよりよく運営しようという意識を芽生えさせた。こうした意識変化を、いくつかの改革や指示から読み取ることができる。

彼らが、揺籃期からイギリス全土の競馬場を纏め上げるような統括団体像を描いていたかどうかは定かでないが、『競馬年鑑』の創刊によって、ジョッキー・クラブが明確にその影響力をニューマーケット以外の地へ伸ばそうと企図していることが明らかになった。1773 年初版の『競馬年鑑』には、競走予定や競走結果はもちろん、購読者リスト、クラブの独自規則、馬主のリストや種牡馬広告など多岐にわたる情報が掲載されていたが、版を重ねるごとに広範囲で購読者を抱えるようになり、地方で競馬を楽しんだカントリー・ジェントルマンたちにも愛読されるようになった。特に第一章第二節では、ジョッキー・クラブが、この『競馬年鑑』を通して、彼らの競馬施行規則はもちろんのこと、購読者リストおよびメンバーリストに見られるリスペクタブルな団体像など、クラブの様々な情報伝達を行い、全国的な競馬統括団体にふさわしい組織作りを進めていったことを指摘する。

続く第二章では、まずジョッキー・クラブの幹事で、「ディクテイターズ・オヴ・ザ・ターフ（Dictators of the Turf)」の一人に数えられるサー・チャールズ・バンベリー（Sir Charles Bunbury, 1740-1821）の競馬改革を扱う。その際、彼の時代に実施された統括団体内部の組織化および競走改革が、近代スポーツの一要因であることに留意する。特にサー・バンベリーの３つの功績は、ジョッキー・クラブが緩やかではあるものの、その権威をニューマーケット以外の場所に伸ばし、全国的な競馬統括団体へ向けての意識を深化させていったことを示す好例である。これらの事例から、揺籃期とは明らかに一線を画している初期発展期のクラブ像を明確にしたい。

また、第二章第二節では、ジョッキー・クラブの『血統登録書』（1793 年初版）によって規定されたサラブレッドと呼ばれる競走馬が、馬主に対して強い血統意識を創出させた点について論じる。特に 19 世紀に入ると、社会的上昇を望む中産階級にとって、高貴さの象徴とみなされていたサラブレッドを所有することが格好の手段となり、ジョッキー・

クラブの後期発展期において、馬主登録数の激増が見られたことを指摘する。

第三章では、サー・バンベリーの改革を受けて、ジョッキー・クラブを中心とした競馬の組織化がさらに進み、18 世紀末から 19 世紀前半にかけて、競馬が一大娯楽の様相を呈し始めた点、19 世紀中頃になり、競馬がより一層洗練され、「貴族的」要素と「近代的」要素が完全なまでに融合することで特有の形態を生み出した点に着目する。

特に、18 世紀末から創設され始めた、3 歳馬限定戦であるクラシック・レースは、時代に合う形での規則改定が度々なされたことで、やがて大きな人気を博した。それに付随して、クラシック・レースの勝ち馬が良血として多くの馬主に重宝されることになった点を指摘したい。また、19 世紀前半には、ジョッキー・クラブの幹事が、クラシック・レースの最高峰とされるダービー（Derby）とオークス（Oaks）を開催したエプソム（Epsom）競馬場の幹事職を兼ねることで、競馬統括団体としての成熟度を高めた点にも合わせて留意したい。

第二部「競馬によるネットワークの進展」では、19 世紀中頃から後半にかけてジョッキー・クラブ幹事を務めた二人の競馬改革者を中心に、クラブのネットワークが中央から地方へ拡大されていく点、競馬が全階級的スポーツに成熟する過程について論じる。

第四章で主題となるのが、19 世紀中頃のジョッキー・クラブ幹事として、様々な改革を行ったジョージ・ベンティンク卿である。彼は、公平性やエンターテイメント性を重視した、競馬を観客に「見せる」と同時に「魅せる」ための競馬改革を行ったが、その改革はまずグッドウッド競馬場で行われた。このグッドウッド競馬場は、地方競馬場でありながら、ニューマーケットの近代化の実験的競馬場として機能した。そのため、グッドウッド競馬場は、ジョッキー・クラブがその影響力を地方へ拡大させる際のモデルケースであったと言えるし、ニューマーケットと地方競馬場のネットワークを描き出すことにもなる。

第五章では、19 世紀後半のジョッキー・クラブ幹事ヘンリ・ジョン・ラウスによって、競馬が全階級的なスポーツとして確立されると同時に、競馬統括団体としてのジョッキー・クラブが、名実ともに全国的な団体へ成長する過程を、彼の改革およびジョッキー・クラブのメンバーシップの変化から論じる。その際、ジョッキー・クラブのネットワークが、イギリス本国にとどまらず、近隣諸外国へ拡大されていく点にも注意したい。

第三部「競馬に見る階級性と賭け」では、競馬の副次的要素として必要不可欠な「賭け」について考察する。その際、上流階級の「賭け（betting）」意識と労働者階級の「賭け（gambling）」の実態に関する分析から、それぞれの階級における賭けの相違を示したい。

加えて、上流階級と労働者階級の間に位置する中産階級が、彼らの社会的成熟に応じて上流階級に接近する一方、彼らの一部が、19 世紀中頃から 19 世紀末にかけて深刻な社会問題となる労働者階級の賭けを、社会改良の観点から批判するようになるという二面性を持つ事実も指摘せねばならない。

そこで第六章では、上流階級の賭けが、彼らの社交空間であるクラブや競馬場内に設けられたベッティング・リング（Betting Ring）などの特権的空間で行われた一方、労働者階級の賭けが、競馬場の内外に数多く存在したブックメーカー（bookmaker）と呼ばれる賭けを請け負う業者を通じて、彼ら独自の空間で行われた事実を示すことで、空間的分離があったことを指摘したい。

そして第七章では、19 世紀中頃から始まる労働者階級の賭けに対する規制を受けて、19 世紀末に設立された全国反賭博連盟（National Anti-Gambling League, NAGL）について論じる。その際、全国反賭博連盟結成の背景が、中産階級の社会改良の一環であった点、また同連盟が 20 世紀初頭にかけて積極的に活動し、一定の成果を上げた点について確認する。

最後の終章では、全体のまとめを行うが、18 世紀中頃におけるジョッキー・クラブの設立以降、イギリス競馬が時代とともにいかにして発展を遂げたか、イギリス社会といかに深く結びついているのか、再度確認したい。

研究史の整理

近年の歴史学において、スポーツに関する研究は増加傾向にある。『西洋史学』に掲載されたイギリスのスポーツ史に関する池田恵子氏の研究動向の紹介が示すように[13]、近代スポーツ発祥の地とされるイギリスのスポーツ史への関心は顕著である。競馬も例外ではなく、池田氏は、スポーツ史家マイク・ハギンズ（Mike Huggins）の主張する「上層階級」、「中流階級」、「労働者階級」という三つの階級が交差する競馬の特徴を興味深いものと捉えている[14]。競馬の中で、こうした階級交差の傾向が顕著になるのは、19 世紀中頃以降である。しかし、本論文の特に第三章で扱う、18 世紀末から 19 世紀前半の時代においても、階級交差の問題は考察に値する。この時代は、競馬の主流は上流階級にあったものの、中産階級による馬主としての参加が顕著になった時代で、ダービーやオークスなどの一般に人気のあったクラシック・レースには、労働者階級も観客として参加していた。19 世紀前半は、競馬が、従来の上流階級のアマチュアリズムに基づくスポーツから、上流階級主体

ではあるが、中産階級や労働者階級も取り込む、プロフェッショナルなスポーツへと転換していく時代と言える。

こうしたスポーツとしての競馬の近代化を担ったのが、ジョッキー・クラブである。ジョッキー・クラブ創設以降の競馬の有り様を検証する際、アレン・グットマン（Allen Guttmann）のいう、近代スポーツの 7 つの特徴、すなわち、「世俗性（Secularism）」、「平等性（Equality）」、「官僚化（Bureaucratization）」、「専門化（Specialization）」、「合理化（Rationalization）」、「数量化（Quantification）」、「記録への固執（the Obsession with Records）」に照らし合せることで、競馬の「近代的」な部分を説明できよう[15]。これに、競馬本来の「貴族的」スポーツとしての性格を加え、三段階に区分しておくことが生産的である。競馬における「貴族的」な性格とは、特に、競馬の担い手である上流階級による競馬の庇護や、中世騎士の決闘のように、一対一で馬主の威信や彼らの所有馬の「高貴さ」を示すものとして行われるマッチ・レース（Match Race）のような競走形態を指している。また、競馬の「近代的」な部分とは、特に、クラシック・レースの成立と発展によって促された、時代に合う形での多頭数への競走形態の変化や詳細な規則の制定を中心とする競馬の諸条件の整備を指している。

ジョッキー・クラブの設立から 18 世紀末までにおける競馬を、「スポーツ化」における第一段階とすると、この時代には、「貴族的」かつ「近代的」なスポーツへの変化が現れ始め、クラブの設立はそれに対応する目的があったと指摘できる。グットマンの近代スポーツ論を当てはめてみても、すべて萌芽的ではあるものの、それぞれの特徴が見え始めている。また、競馬を筆頭に、ゴルフやクリケットといった極めて「貴族的」要素の強い娯楽が、真っ先に近代スポーツの要素を備えた社交クラブの設立を経験していることは、近代スポーツの歴史を考える上で、特筆すべきである[16]。

次の第二段階が、18 世紀末から 19 世紀中頃までである。この時期は、競馬がアマチュアのスポーツからプロフェッショナルなスポーツへと変貌を遂げていく際に、クラブが中心的役割を担った時代で、クラブの統括団体としての勢力も拡大し、権力を掌握するようになった時代である。すなわち、「貴族的」で「近代的」なスポーツが完成されていく段階で、クラシック・レースの開催こそが、競馬の「貴族的」な要素と「近代的」な要素、二つの要素の融合を目指していたと言える。クラシック・レースでは、競走形態が整えられ、公正さのために規則が定められ、開催が厳正に取り仕切られることになるが、ジョッキー・クラブは、ダービーとオークスが開催されるエプソム競馬場を掌握し、自らの本拠地であ

るニューマーケットでの独自のクラシック・レースも発展させていた。

最後の第三段階は、19 世紀後半以降で、「近代的」スポーツ像が確立され、「貴族的」要素が減退してゆく時期である。それは、一般の人々の競馬参加が圧倒的になったことを反映している。

さて、ここでジョッキー・クラブを構成していた会員についても触れておかねばならない。会員の詳細が初めて公表されるのは 1835 年のことで、その詳細な分析は本論でも行うが、クラブ会員は貴族の子弟である「Lord」層を中心として、上流階級で占められていた[17]。デヴィッド・キャナダイン（David Cannadine）は、不確実ながらも「人からジェントルマンとして扱われるかどうか」を、ジェントルマンかどうかを知る唯一の方法としているが[18]、社会的な認知を必要とするジェントルマン層にとって、ジョッキー・クラブのような上流階級クラブに加入することは、重要な意味を持っていた。

しかし、同時に 19 世紀前半は、次第に台頭してきた中産階級の人々が馬主として、また観客として競馬に取り込まれた時期でもある。こうした状況の中で、上流階級の人々は、中産階級と自らを切り分けるために、競馬の担い手としての本来の「貴族らしさ」を尊重した。これによって、19 世紀前半に、競馬を「貴族的」かつ更なる「近代的」スポーツへ昇華させ、特に 19 世紀中頃には、二つの要素を完全なまでに融合させた時期を生み出したのである。

ジョッキー・クラブの歴史およびクラシック・レースに関して、史料的な面で２点注目しているのが、1773 年から毎年発行された『競馬年鑑』と 1793 年初版の『血統登録書』である。前者は、競走予定や競走結果はもちろん、購読者リスト、クラブの独自規則、馬主のリストや種牡馬広告などの情報が掲載されていた年鑑で、版を重ねるごとに広い範囲で購読者を抱えるようになり、地方で競馬を楽しんだカントリー・ジェントルマンたちにも愛読されるようになった。後者は、サラブレッドと呼ばれる競走馬の枠組みを規定し、血統が、強力かつ「純血」であるか否か、「高貴な」会員を抱えたジョッキー・クラブによって常に見直された。これらの史料は、クラブの発展と大きな関係性を持っているため、第一章第二節と第二章第二節でそれぞれ分析する。

次に、ジョッキー・クラブ研究の現状について述べたいが、イギリス競馬を主たる研究対象とし、なおかつジョッキー・クラブにも焦点を当てた著作となると、その数は限られていると言わざるを得ない。先に挙げたロバート・ブラックの 1891 年における主著 *The Jockey Club and Its Founders: In Three Periods* は、その中の一つである。ブラックのこ

の著作で特筆すべき点は、1835 年を迎えるまで、メンバーリストという形で実在していなかったクラブのメンバーについて言及していることである。ブラックによれば、1753 年から 1773 年までの間、つまり成立からほどない時期に、100 名以上のメンバーが存在したとされている[19]。これは、主として、当時ジョッキー・クラブのメンバーしか参加できなかったジョッキー・クラブ・プレート競走の参加者から割り出した数字と推測されるが、彼のメンバー区分から、ジョッキー・クラブは、貴族とジェントリ、すなわち上流階級のみで構成されていたことがわかる。ブラックの他に、ジョッキー・クラブを題材とした著作を発表している研究者には、ロジャー・モーティマー（Roger Mortimer）や[20]、ジョン・ティレル（John Tyrrel）がいる[21]。上述の研究者たちには、ばらつきがあるものの、概ねジョッキー・クラブの設立を起点として、長いスパンでのクラブ像を提供しているといえる。

こうした中で、ジョッキー・クラブ研究の二大潮流をなしているのが、特に 1840 年代における鉄道の発展が見るスポーツとしての競馬人気を高めたと強調するレイ・ヴァンプリューと、スポーツの「商業化」のプロセスを捉えたマイク・ハギンズの研究であろう。両者とも、19 世紀の競馬の発展について解き明かそうとした研究者である。

ヴァンプリューは、ジョッキー・クラブの影響力が 19 世紀初頭に増大したことの根拠として、ダービーなど他の競馬場のクラシック・レースに匹敵するものとして、ニューマーケット競馬場でも新たなクラシック・レースが創設されたことを挙げている[22]。つまり、ヴァンプリューは、クラブがクラシック・レースを増設することで、競馬に「近代的」スポーツとしての枠組みを付与することに積極的な姿勢をとっていたという見解を示している[23]。同時に、ヴァンプリューは、ジョッキー・クラブが 19 世紀に入って統括団体としての権力を求めようとしたと指摘し、地方競馬場を巻き込みながら、19 世紀中頃になっても攻勢を続けたと主張しているため[24]、クラブを肯定的に捉えている部分がある。

これに対する否定的な見解として、例えば、ハギンズは、ジョッキー・クラブ会員の消極性を挙げ、多くの会員が能力不足で、かつ競馬への関心不足だったと指摘し、「賭け」、「２歳馬の競走」、「騎手の統制」、「競走馬のドーピング」という競馬における４つの重要な問題への無関心を、その根拠に挙げている[25]。しかし、このハギンズの指摘は、現代におけるある種の完全性が求められるスポーツ統括団体としての姿を、当時のジョッキー・クラブにそのまま求めている感があり、クラブの脆弱性が強調され過ぎているという問題点がある。

むしろ、ジョッキー・クラブが、18 世紀末というスポーツの全国的統括団体がほとんど存在しない時代から、『競馬年鑑』や『血統登録書』といった独自の出版物を抱え、それらをクラシック・レースの発展に利用し、また、地方の競馬場へ影響力を伸ばすために使用した点、極めて排他的な入会システムが存在し、身分の高い一部の人々しか入会できなかった点などを重視すべきである。これにより、ジョッキー・クラブは強い発信力を持ったリスペクタブルな団体であり、競馬の「貴族的」かつ「近代的」なスポーツ化に積極的に取り組んだのではないかというヴァンプリューの研究の方に整合性を見出すことができる。もっとも、「19 世紀の最後の数十年間までにクラブは明白な権威を持った」という主張や、幹事を含めた会員の評価などについては再考が必要なため、留意しておかねばならない[26]。

特に、地方競馬への影響という点では、ジョッキー・クラブの統括団体としての権威が、いつイギリス全土に行きわたったかについての検討が必要であろうが、その時期を 19 世紀中頃もしくは 19 世紀後半と定めている研究が多い。つまり、ベンティンク卿時代あるいはラウス時代ということになるが、アマチュアリズム研究で知られるリチャード・ホルト（Richard Holt）は、曖昧ではあるが、「ジョッキー・クラブは、ヴィクトリア朝時代に全国的運営団体になった」と主張している[27]。また、イングランドの上流階級を扱ったジョン・ベケット（John Beckett）は、「ジョッキー・クラブが、最終的に競馬公認運営団体として全国的に浸透した時期は 1840 年代である」と述べている[28]。これらの主張は、19 世紀中頃、すなわちベンティンク卿時代の改革を肯定的に捉えるもので、上流階級による「貴族的」かつ「近代的」なスポーツとしての競馬の完成時期をこの時期に求める筆者の見解と重なる部分がある。

一方で、19 世紀後半に重きを置く研究者として、ニール・トランター（Neil Tranter）は、社会秩序を堅固にせしめんとするエリートのもくろみの結果として、ヴィクトリア時代とエドワード時代にスポーツ革命があったことを指摘している[29]。また、ピーター・マッキントッシュ（Peter McIntosh）は、19 世紀後半の特徴として、スポーツの大増殖、有力な統括団体での組織化があったとし、その際にジョッキー・クラブが貴族の社交の集いから、ルールの起草や執行の権限を持つ組織になったと位置づけている[30]。

地方への影響力という点での 19 世紀中頃か後半かの論争を述べてきたが、ここで取り上げたホルト、ベケット、トランター、そしてマッキントッシュの研究をさらに吟味してみると、ベンティンク卿時代かラウス時代かというよりも、地方への影響力に関して、19 世紀に重要な変化が二段階あったと理解した方がよい。本論文の第四章および第五章で扱

うベンティンク卿時代とラウス時代は、地方への影響力を広げる中でともに重要な時代であったが、その重要性の違いが問われるであろう。また、それに先立つ第三章では、ジョッキー・クラブが競馬の「貴族的」かつ「近代的」スポーツ化に積極的に取り組んだという先のヴァンプリューの主張を認めた上で、18 世紀末から 19 世紀前半におけるジョッキー・クラブの勢力拡大のプロセスを、クラシック・レースの成立と発展を中心に改めて見直すことになる。

さて、特にベンティンク卿時代の背景について、彼が生きた 19 世紀のイギリスは、まさに「改良の時代」であった。政治的な出来事では、1832 年における第 1 回選挙法改正や 1834 年の改正救貧法の制定、またチャーティズムの敗北などを経験するとともに、1846 年には、自由貿易の確立に向けた穀物法廃止が実施された。

この改良の時代において、社会的に娯楽の必要性が声高に叫ばれていたが、この点については、ピーター・ベイリー（Peter Bailey）や川島昭夫氏の「合理的娯楽」（rational recreation）論が注目される。ベイリーは、1840 年代から 1850 年代にかけて、貴族的な統括団体であるジョッキー・クラブが自らの行いを正すことによって、競馬開催は愛国的要求および高い地位を持つ団体という点を利用した、貴族の後援およびライフスタイルの拠点であり続け、労働者階級の競馬への参加が増加したとしている[31]。これは、ベンティンク卿が、自らの時代において、上流階級を重視しながらも中産階級や労働者階級の娯楽を無視できなかったことを示している。また、川島昭夫氏は、フットボールを禁止されたダービーの労働者階級に対して、伝統的農村競技、鉄道遊覧旅行、競馬という 3 つの代用の娯楽が提案され、そのうち競馬のみが実現をみたとし、競馬が「引き離し―引き寄せる」式のカウンター・アトラクションとして機能したことを指摘している[32]。

「合理的娯楽」に関しては、産業革命期のレジャーの研究で知られるヒュー・カニンガム（Hugh Cunningham）も着目している[33]。このことは、産業革命によって台頭した中産階級を、19 世紀前半から中頃にかけて創立と発展を経験した公的美術館であるナショナル・ギャラリーを通して扱っている松本佐保氏の研究でも指摘されている[34]。時期的に、ベンティンク卿時代の余暇を説明するもので、「貴族的」かつ「近代的」な要素を融合させたベンティンク卿が、自らの改革で他の階級に合理的な娯楽を与えることを重視していた事実を示すのに役立つ。

次に、地方競馬の雄であるグッドウッド競馬場についてであるが、これまで多くの研究者に好意的に捉えられてきた。例えば、アレン・グットマンは、19 世紀において、グッド

ウッド競馬場がアスコット（Ascot）やエプソムなどの有力競馬場にならび、他の大部分の競馬場よりも女性を多く惹きつけたとし、上流階級の社交における女性の競馬参加について述べた[35]。また、ジョン・ピンフォールド（John Pinfold）は、グッドウッド競馬場およびリヴァプール（Liverpool）競馬場を、本質的な貴族の後援を通じて確立された競馬場と位置づけ、19 世紀の地方競馬場について論じている[36]。加えて、グッドウッドを芸術、建築、スポーツ、リッチモンド一族の観点から捉えた研究者に、ローズマリー・ベアード（Rosemary Baird）がいる[37]。この研究の中で提示される様々な芸術作品は、有力貴族の持つ富の大きさを改めて確認させてくれるとともに、当時のカントリー・ジェントルマンたちの社交場であった競馬場の風景を伝えてくれるものでもある。

ベンティンク卿改革については、グッドウッドの厩舎調教師であったジョン・ケント（John Kent）の手による 1892 年出版の *Racing Life of Lord George Cavendish Bentinck, M. P. and Other Reminiscences* がある[38]。当該競馬場関係者によるこの著作は先行研究でもあるが、史料的価値も高く、本論文で取り上げるジョージ・ベンティンク卿の改革についての詳細な記述がある。また、ベンティンク卿は保護貿易論者として活躍したが、彼の死後、その生涯と政治的活動について著した人物として、かのベンジャミン・ディズレーリ（Benjamin Disraeli）が挙げられる。ベンティンク卿の盟友であったディズレーリが執筆した *Lord George Bentinck: A Political Biography* の巻頭には「彼は英雄の遺産を遺した、それは偉大な名と模範としての示唆である」と書かれており[39]、ベンティンク卿の政治的活動を理解する上で、重要な書物であることを指摘しておきたい。

では次に、競馬に付随し、競馬と密接な関係を持っていた「賭け」に関する研究動向を整理したい。イギリスにおいて、賭けは古くから多くの人々の興味を引き付けるものであった。イギリスの民衆娯楽について研究したロバート・W・マーカムソン（Robert W. Malcolmson）は、工業化以前の時代について、民衆の日々の憩いや安らぎが一日の労働のあいまに得られるものであり、彼らの居酒屋でのささやかな賭けごと（petty gambling）が日常の娯楽として、仕事の単調さや疲労をやわらげる効果を持っていたと指摘している[40]。また、マーカムソンは、伝統的な民衆スポーツのいくつかがジェントルマンたちによって後援され、それが彼らの楽しみのためであり、彼らがもし結果に賭ける（bet）ことができないのなら、民衆の遊びごとを熱心に後援しようという気になるものではなかったと述べている[41]。すなわち、イギリスにおいては、賭けが特に娯楽やスポーツと密接な関係を持っており、上流階級と労働者階級、それぞれの生活に強く結びついていたと言えよう。

そうした密接な関係が特に際立っていたのが、競馬であった。競馬研究者のヴァンプリューは、「もし、競馬がその支持を保ち続けようとするならば、馬主と賭け手（gamblers）は、オッズが勝ち目を公正に反映しており、競走馬が実力によって勝つということを納得させられる必要があった」とし[42]、競馬開催の評判維持と公正な賭けが不可分であったことを指摘している。さらに、ヴァンプリューは、ハンディキャップ競走の重要性を強調する。ハンディキャップ競走とは、各競走馬が異なる重量を負担するものであり、出走各馬に等しく勝機を与える目的で設けられた[43]。彼は、この競走が競馬の賭け（gambling）を促進し、馬主による競走馬の所有意欲を増大させたと述べている。これは、競走における公平なハンディキャップが、より多くの競走馬の参加を促し、それによる際どい決着が観客の興味を引き付けたからである。加えて、賭け市場（betting market）における勝ち馬予想が困難になったことも、競馬への関心を駆り立てた[44]。

これらのヴァンプリューの指摘から、賭けが競馬の本質であり、競馬の担い手である上流階級、また彼らに加えて賭けに参加する労働者階級にとって、賭けが、娯楽、スポーツの一大イベントとして競馬を楽しむために必要不可欠な要素であったことがわかる。

同じく競馬史家のハギンズも、競馬と賭けの深い関係性を認めている。ハギンズは、都市の大衆文化における重要部分としての競馬と賭け（betting）について、以下の三点を強調している。第一に、労働者階級による賭け（betting）と観覧という二つの参加形態が、彼らの欲望を反映し、少なくとも競馬というレジャー分野において、部分的には自立空間を達成していたことである[45]。第二に、競馬と賭け（betting）が、階級間の闘争や切り分けの可能性を相殺し、ゴシップ記事や会話において重要な役割を果たすことで、各階級内および階級間における地域の社会的結合を強化したことである[46]。そして第三に、労働者階級のコミュニティにおいて重要な産業であった馬券業（bookmaking）が、彼らの日常の文化を支配したことである[47]。ハギンズのこれらの指摘は、特に 19 世紀後半という時期に、労働者階級の生活様式と価値観の変化が起き、彼らにとって競馬がそれだけ大きな存在になったことを示している。

さて、これまでの議論を踏まえ、ここで改めて強調しておきたいことは、賭けには大きく分けて二種類あるということである。先ほど、「はじめに」で、ラウスの賭けに対する警鐘について述べたが、そこで彼は「betting」と「gambling」という語句を区別している。ラウスは、「大規模な賭け」を「betting on a great scale」と表現し、競馬の興奮と愛国心を示す競走馬の血統改良が二次的になると危惧したが、ここでの、「betting」は、上流階

級の賭けを指している。なぜなら、イギリスにおいて競走馬の血統改良を担っていたのは、上流階級の人々が所有する厩舎であったからである。彼は他方で、「過度の賭け」を「excessive gambling」と表現し、常に人間の絶滅の前兆となる敵と捉えたが、ここでの「gambling」は、労働者階級の賭けを指している。彼らの資金力は乏しく、「過度の賭け」は身を滅ぼす危険性を秘めていた。

「betting」と「gambling」の区別に関して、例えば、1890 年頃に誕生したとされる全国反賭博連盟の『会報』（*The Bulletin*）に掲載された「連盟の目的」は、「betting」と「gambling」のすべての形式に、精力的かつ断固とした反対を示し、すべての階級に主題についての有用な情報を普及することであった[48]。ここでは、「betting」と「gambling」の両方が批判の対象となっているが、全国反賭博連盟の創設者フレデリック・アンソニー・アトキンス（Frederick Anthony Atkins）は、特に「gambling」を危険視している。彼は自身の著作の中で、人生における戦いで失敗、絶望に追い込まれる例として、信仰心の欠如（lack of faith）、不健康（ill health）と並んで賭け（gambling）を挙げた[49]。アトキンスは、「どんなに輝かしく、前途有望な生涯も、賭け（gambling）によって台無しにさせられる」と述べ[50]、当時大きな社会問題になっていた労働者階級の賭けを嘆いた。先のラウスやアトキンスの主張を踏まえると、同時代人にとっては、「betting」と「gambling」は明確に区別すべきものであり、それぞれが上流階級と労働者階級の賭けに対応していると言えるだろう。では次に、歴史家たちが、「betting」と「gambling」をどのように扱ってきたのかについて見て行きたい。

結論から言えば、「betting」と「gambling」の混同も見られるが、これら二つの用語は歴史家にとって概ね区別されている。1898 年に *The History of Gambling in England* を出版したジョン・アシュトン（John Ashton）は、その序文において、「gambling」が地道な勤勉を続けるよりも速く富へ至る近道と捉えられているとし、皆が勝つという希望を抱いて、証券取引や競馬での賭け（Betting on Horse Racing）などに没頭させられているとした[51]。アシュトンは、競馬における賭けの一般的な表現である大文字の「Betting on Horse Racing」を用いているが、労働者階級の賭けに関しては、「gambling」という語を使用している。事実、彼は同書の第 11 章で「Wagers and Betting」と題し、賭け（betting）が、より正確には「物質的誓約のある賭け（wager）」の特定の形式であるとしている。この「wager」の範疇に含まれる「betting」は、『旧約聖書』の士師記（Judges）にまで遡るものであり[52]、極めて古い歴史的背景を持っている。

また、アシュトンは、18 世紀における上流階級の賭けの具体的事例として、二人の貴族の間で取り決められた 1,000 ギニーの賭け（wager）を挙げている。これは 1765 年 6 月 30 日に行われたもので、賭け手の一人が時速 25 マイルでボートを動かす機械を作り、それが可能かテムズ川周辺で挑戦が行われたものの、装置の故障により賭け金（bet）が失われたという内容であった[53]。自身の作った機械が意図したとおりに動くか否か、大金を賭けて争うことは、自らの威信を賭けることと同義であり、命を賭して戦った中世の騎士を彷彿とさせる。

民衆の賭けとイギリス社会については、マーク・クラプソン（Mark Clapson）が詳しい。彼はアシュトン同様、賭けに関連する語句の歴史的背景を説明している。彼は、特に「gambling」に関して、1755 年出版のサミュエル・ジョンソンの『英語辞典』に「Gambler」という「隠語」があり、それは本来賭博師（gamester）を意味するもので、貧者の間で使用されていたとする[54]。またクラプソンは、ジョンソンの時代のイングランドにおいて、「gambling」が詐欺を働き、無節制である下層階級と結びつけられていて、それはより新しい軽蔑的な語であったと主張する[55]。このことから、「gambling」が労働者階級の賭けを示していることは明らかである。

もっとも、クラプソンには、民衆の賭けを意識するあまり、「gambling」の枠組みの中に上流階級の賭けを含めて、混同してしまっているという問題点もある。彼は、「スポーツおよびレクリエーション活動に対する金銭上の付属物としての賭け（gambling）は、18 世紀イングランドのレジャー文化において固有のものであった」という主張に続けて、「それは、庶民と名門、すなわち下層階級と貴族のレクリエーションの極めて重要な特徴であった」と述べている[56]。このように、先行研究の中でも、時として「betting」と「gambling」の定義が曖昧になりがちであるという問題点があるが、「betting」と「gambling」という賭けの対比が、上流階級と労働者階級という二項対立的構造を表しているということは、再度確認しておきたい。

ところで、労働者階級の賭けは、大きな社会問題を引き起こした経緯から、先行研究において否定的な見解がなされることもあるが、その一方で彼らの賭けに一定の評価を与えている研究もある。19 世紀末から 20 世紀中頃における労働者階級の賭けを扱ったロス・マッキビン（Ross Mckibbin）は、労働者階級の賭けが、彼らのコミュニティを拡大させるきっかけとなり、ある種の知的なゲームとして浸透したことを指摘している[57]。彼は、19 世紀中頃、ダービーに代表される 5 つのクラシック・レースが、シティの人々と郊外居

住者を一斉に引き付け、すでに重大な賭けの催し物（heavy betting events）となっていたと述べている[58]。

競馬が、19 世紀中頃にイギリス社会にとって極めて大きな存在となったことについては、デヴィッド・C・イツコウィッツ（David C. Itzkowitz）が、ヴィクトリア期のブックメーカーとその顧客との関係から説明している。彼は、ヴィクトリア期に賭け（gambling）が新しい産業として成立し、それがほとんど排他的に競馬と結びついており、賭けを請け負うブックメーカーの成長が、競馬の繁栄と連動するものであった事実を明らかにしている[59]。このブックメーカーの詳細については、第六章で扱う。

また、イギリスとアメリカにおける賭け（gambling）の社会経済史を扱った研究者にロジャー・マンティング（Roger Munting）がいる。彼は、イギリス競馬に関して、賭け（betting）がまさに競馬の目的であったこと、のちにジョッキー・クラブの本拠地となるニューマーケットがステュアート朝時代以降に成長し、多くのジェントルマンの観客を引きつけたことなどを指摘している[60]。また彼は、初期のアメリカ植民地における賭け（American colonies gambling）を説明する際に、アメリカ競馬を取り上げ、ニューイングランドの移住者たちが限られた空間を利用し、クォーターホースによる競馬を行っていたと述べており[61]、イギリスとアメリカにおいて競馬の果たした社会的役割の大きさが強調されている。

これらの点を、先のピーター・ベイリー、ヒュー・カニンガム、川島昭夫氏らが主張する「合理的娯楽」論と照らし合わせて考えるならば、以下のことが言えるであろう。それは、19 世紀のイギリスにおいて、娯楽の必要性が声高に叫ばれる中で、競馬があらゆる階級の人々を魅了し、競馬運営の担い手である上流階級、馬主として競馬に参加するようになった中産階級、加えて、賭けに興じる労働者階級それぞれの思惑を満たす、まさに「合理的娯楽」であったことである。

【註】

---

[1] ジョッキー・クラブの設立年に関しては諸説あるが、1751 年のジョン・ポンドによる *Sporting Kalendar* に掲載された一文が初出とされている。John Pond, *The Sporting Kalendar: Containing A distinct Account of what Plates and Matches have been run for in 1751, An Article for making a Newmarket Match, A Description of a Post and Handy-Cap Match, A Table shewing what Weight Horses are to carry for the Give and Take Plates; and of what Matches have been Run for at Newmarket, from October the 1st, 1718, to October 1751, &c.* (London, 1751), p.225. また、ジョッキ

ー・クラブの「ジョッキー」とは、馬主かつアマチュアの乗り手であった上流階級の人々を指している。設立当時の競馬に参加した上流階級の人々は、自らの所有馬に自ら騎乗していたため、「馬主兼乗り手」といった意味での「ジョッキー」である。

[2] Wray Vamplew, *The Turf: A Social and Economic History of Horse Racing* (London, 1976), pp.77-109.

[3] Robert Black, *The Jockey Club and Its Founders: In Three Periods* (London, 1891).

[4] 「ジョッキー・クラブの競馬施行規則」（Rules of Racing Made by the Jockey Club at Newmarket）の全国的な伝播に関しては、以下を参照のこと。*Racing Calendar (Races Past)*, Vol.104, 1876, p.xxix.

[5] 例えば、以下の史料には、二人の紳士が約 11 時間半をかけてそれぞれの所有馬を競わせたという記録がある。その競走内容は、片方の馬が 100 マイルの距離を走るまでに、もう片方の馬が 80 マイルを走ることができるか否か、というものであった。*The Gentleman's Magazine*, Vol.20, 1750, p.376.

[6] Peter Edwards, *Horse and Man in Early Modern England* (London, 2007), p.114.

[7] 特に、クラシック・レースの最高峰と言われるダービーの開催日には、10 万人の観客が集まったと言われている。Dennis Brailsford, 'Sporting Days in Eighteenth Century England', *Journal of Sport History*, Vol.9, No.3, 1982, p.44.

[8] ノルベルト・エリアス、エリック・ダニング（大平章訳）『スポーツと文明化―興奮の探求―』法政大学出版局、1995 年、183 頁。

[9] リンダ・コリー（川北稔監訳）『イギリス国民の誕生』名古屋大学出版会、2000 年、173 頁。

[10] Henry John Rous, *On the Laws and Practice of Horse Racing, etc.* (London, 1866), pp.xi-xii.

[11] *Ibid.*, p.xii.

[12] *Ibid.*

[13] 池田恵子「英国スポーツ史研究の潮流―30 年の歩み―」『西洋史学』第 235 号、2009 年、58–69 頁。

[14] 同上論文、67 頁。

[15] Allen Guttmann, *Games & Sports; Modern Sports and Cultural Imperiarism* (New York, 1994), pp.2-3. 邦訳は、アレン・グットマン（谷川稔、石井昌幸、池田恵子、石井芳枝訳）『スポーツと帝国―近代スポーツと文化帝国主義』昭和堂、1997 年、3–4 頁。

[16] 18 世紀中に成立したスポーツの統括団体は、ジョッキー・クラブの他に、ゴルフのロイヤル・アンド・エンシェント・クラブ（the Royal and Ancient Club）（1754）、クリケットのメリルボン・クリケット・クラブ（the Marylebone Cricket Club）（1788）などわずかである。

[17] 例えば、拙稿「19 世紀中頃におけるイギリス上流階級の社交空間―ジョッキー・クラブに見る競馬のスポーツ化を中心に―」『関学西洋史論集』第 34 号、2011 年、54–58 頁。

[18] デヴィッド・キャナダイン（平田雅博、吉田正弘訳）『イギリスの階級社会』日本経済評論社、2008 年、145 頁。

[19] Robert Black, *op. cit.*, pp.11-12.

[20] Roger Mortimer, *The Jockey Club* (London, 1958).

[21] John Tyrrel, *Running Racing: The Jockey Club Years Since 1750* (London, 1997).

[22] Wray Vamplew, *op. cit.*, p.81.

[23] *Ibid.*, pp.80-81.

[24] *Ibid.*, pp.77-109.

[25] Mike Huggins, *Flat Racing and British Society, 1790-1914: A Social and Economic History* (London, 2000), p.185. ハギンズの研究には、商業化を中心として 18 世紀末か

ら 20 世紀初頭の競馬を扱ったこの研究の他に、19 世紀における競馬と中産階級を、文化や階級、リスペクタビリティから検証したものや、モラル・リフォームについて論じた研究がある。例えば、以下を参照のこと。Mike Huggins, 'Lord Bentinck, the Jockey Club and Racing Morality in Mid-Nineteenth Century England: The 'Running Rein' Derby Revisited', *The International Journal of the History of Sport*, Vol.13, No.3, 1996, pp.432-444; Mike Huggins, 'Culture, Class and Respectability: Racing and the English Middle Class in the Nineteenth Century', in J. A. Mangan (ed.), *A Sport-Loving Society Victorian and Edwardian Middle-Class England at Play* (Abingdon, 2006), pp.219-238.

[26] Wray Vamplew, *op. cit.*, pp.99-100.

[27] Richard Holt, *Sports and the British: A Modern History* (Oxford, 1989), p.29.

[28] John V. Beckett, *The Aristocracy in England, 1660-1914* (Oxford, 1986), p.359.

[29] Neil Tranter, *Sport, Economy and Society in Britain, 1750-1914* (Cambridge, 1998).

[30] Peter McIntosh, *Sport in Society* (Toronto, 1987).

[31] Peter Bailey, *Leisure and Class in Victorian England: Rational Recreation and the Contest for Control, 1830-1885*(London, 1978), p.23.

[32] 川島昭夫「十九世紀イギリスの都市と「合理的娯楽」」、中村賢二郎編『都市の社会史』ミネルヴァ書房、1983 年、304–305 頁。

[33] Hugh Cunningham, *Leisure in the Industrial Revolution* (London, 1980).

[34] 松本佐保「「上品な」公共圏―ロンドン・ナショナル・ギャラリーにおけるイタリア・ルネサンス絵画コレクションを中心に―」、大野誠編『近代イギリスと公共圏』昭和堂、2009 年、194 頁。

[35] Allen Guttmann, 'English Sports Spectators: The Restoration to the Early Nineteenth Century', *Journal of Sport History*, Vol.12, No.2, 1985, p.111.

[36] John Pinfold, 'Horse Racing and the Upper Classes in the Nineteenth Century', *Sport in History*, Vol.28, No.3, 2008, p.415.

[37] Rosemary Baird, *Goodwood: Art and Architecture, Sport and Family* (London, 2007).

[38] John Kent, *Racing Life of Lord George Cavendish Bentinck, M. P. and Other Reminiscences* (London, 1892).

[39] Benjamin Disraeli, *Lord George Bentinck:A Political Biography*(London, 1852).

[40] Robert W. Malcolmson, *Popular Recreations in English Society 1700-1850* (Cambridge, 1973), p.15. ロバート・W・マーカムソン（川島昭夫、沢辺浩一、中房敏朗、松井良明訳）『英国社会の民衆娯楽』平凡社、1993 年、40 頁。

[41] Robert W. Malcolmson, *op. cit.*, p.57. ロバート・W・マーカムソン、前掲書、128–129 頁。

[42] Wray Vamplew, *op. cit.*, p.111.

[43] 具体的な判断材料となるのは、直近の競走成績や調子などであり、加えて、馬の能力や性別に応じて、負担する重量（斤量）を増減させるものである。

[44] Wray Vamplew, *op. cit.*, pp.118-119, 123-124.

[45] Mike Huggins, *op. cit.*, p.88.

[46] *Ibid.*

[47] *Ibid.*

[48] *The Bulletin*, Vol.2, No.17, 1898, p.108.

[49] Frederick Anthony Atkins, *Moral Muscle, and How to Use it: A Brotherly Chat with Young Men* (New York, 1890), pp.59-62.

[50] *Ibid.*, p.62.

[51] John Ashton, *The History of Gambling in England* (London, 1898), p.2. アシュトンは、「gambling」という語が考案されるまで、喜び（joy）や気晴らし（sports）を意味

するサクソン語の「Gamen」に由来する「gaming」という語が使用されていたとし、「gambling」と「gaming」とを区別している。*Ibid.*, pp.1-2.

[52] *Ibid.*, p.150. ここでは、サムソン（Samson）の独特な賭け（a distinct bet）が紹介されている。

[53] *Ibid.*, p.158.

[54] Mark Clapson, *A Bit of a Flutter: Popular Gambling and English Society, C. 1823-1961* (Manchester, 1992), p.1.

[55] *Ibid.* クラプソンは「betting」に関して、18 世紀に賭けるという２つの動詞、「to bet」と「to wager」が同じ事柄を意味していたとし、それは新しい動詞である「to gamble」よりも評判の悪くないものであったとしている。加えて、「to wager」に関しては、これが賭けることを意味するゲルマン語の「waegen」に由来すると述べている。

[56] *Ibid.*, p.16.

[57] Ross Mckibbin, 'Working-Class Gambling in Brirtain 1880-1939', *Past and Present*, No.82, 1979, pp.147-178.

[58] Ibid., p.148.

[59] David C. Itzkowitz, 'Victorian Bookmakers and Their Customers', *Victorian Studies*, Vol.32, No.1, 1988, pp.6-30.

[60] Roger Munting, *An Economic and Social History of Gambling in Britain and the USA* (Manchester, 1996), pp.12-13.

[61] *Ibid.*, p.28.

第一部

近代スポーツとしての競馬の成立

第一章　ジョッキー・クラブの揺籃期

ジョッキー・クラブは、一般的に 18 世紀中頃に設立されたと言われているが、当時の設立趣意書のようなものが現存していないため、正確な旗揚げの年を定めることや、その結成理念を窺い知ることはできない。しかし、当時のイギリスの上流階級に属する人々が加入していた様々なクラブを考慮すれば、このジョッキー・クラブも、競馬好きの貴族、ジェントリが集まる社交クラブという性格を有していたと言える。

本章では、ジョッキー・クラブの揺籃期に関して、クラブの設立と初期の活動およびクラブの公式機関誌である『競馬年鑑』の創刊について分析する。ジョッキー・クラブはその揺籃期において、他者に絶大な影響を及ぼすまでには至っていなかった。しかし、クラブが情報媒体としての機能を持つ『競馬年鑑』を獲得したことで、揺籃期から広範囲に盛名を馳せる初期発展期へと移行していく。

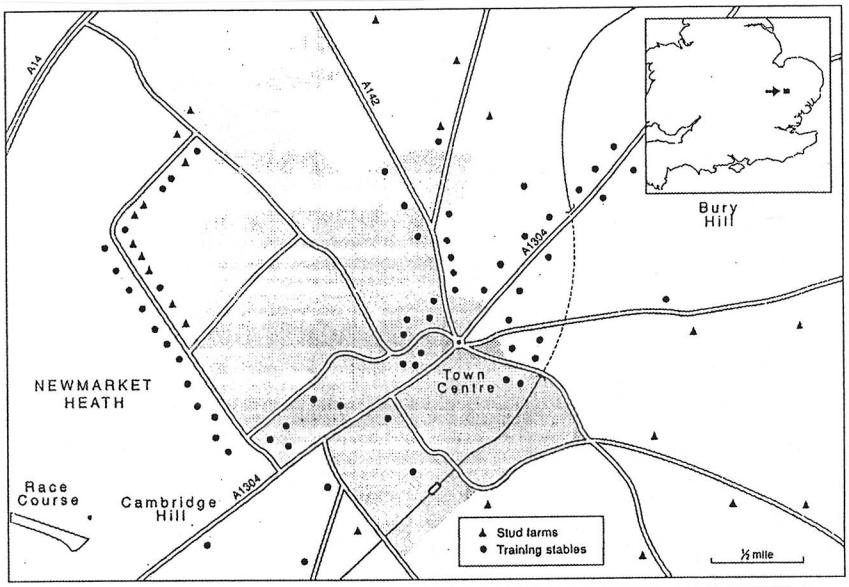
第一節　ジョッキー・クラブの設立と初期の活動

ロバート・ブラックが指摘するところによれば、ジョッキー・クラブの存在が初めて公になったのは、競売人であったジョン・ポンド（John Pond）が 1751 年の終わりもしくは 1752 年の初めに発行した『スポーツ年鑑』（*Sporting Kalendar*）に掲載された記事からであるという[1]。そこには、1752 年４月１日の水曜日に、ニューマーケットにおいて、パル・マル（Pall Mall）にあるスター・アンド・ガーター（Star and Garter）のジョッキー・クラブの貴族、紳士たちが所有する馬によるコントリビューション・フリー・プレート競走が、８ストーン７ポンドの斤量のもと、ラウンド・コースで１ヒート行われると記されている[2]。この史料から、ジョッキー・クラブのおおよその旗揚げ時期として、1750 年という年が示唆されている[3]。

ジョン・ポンドの『スポーツ年鑑』に登場するパル・マルは、ロンドンにある高級地であり、結成当初、ジョッキー・クラブの本拠地はロンドンにあったと推測できる。しかし、その後まもなくの 1752 年にニューマーケットの小区画地を借り受け、一般的にコーヒー・ルーム（Coffee Room）として知られる建物の建設を始めており、コーヒー・ルームが完成するまでは、ニューマーケットのイン「レッド・ライオン（Red Lion）」でジョッキー・クラブの会合が開かれていたとされる[4]。そのため、ジョッキー・クラブは結成後まもなく、本拠地をロンドンからニューマーケットに移したようである。

ポンドの一文にあるように、ジョッキー・クラブは上流階級によって支えられた団体であったが、「スポーツ・オヴ・キングス」とも呼ばれる競馬は、元来イギリスの歴代国王によって支えられ、発展を遂げてきたものであった。「はじめに」でも触れたように、競馬を愛したチャールズ２世の寛大なパトロネージによって、ニューマーケットはイングランド南部の競馬中心地として成長することになった。ニューマーケットは、やがて近代化を遂げていく競馬を支える団体の本拠地として選ばれるに値する由緒ある歴史を有しており、ジョッキー・クラブがこの場所を拠点にしたことは、理にかなっていたと言える。そのニューマーケットは、ロンドンから北へ約 110 キロメートル、大学都市ケンブリッジから東へ約 20 キロメートルの場所にある。現在でも数多くの繁殖場、厩舎が存在しており、2,000 頭以上の競走馬がここで調教されている[5]。

（図１）現在ニューマーケットに存在する繁殖場、厩舎の位置関係



出典：Rebecca Cassidy, *The Sport of Kings: Kinship, Class and Thoroughbred Breeding in Newmarket* (Cambridge, 2002), p.2.

ニューマーケットに移ったジョッキー・クラブは、早速いくつかの改革に着手することになった。その最初の大きな改革は、1756 年のジョッキー・クラブ・プレートにおけるヒート競走の廃止であった[6]。この改革は、競馬をより競り合うものにするために行われた[7]。というのも、18 世紀中頃における競馬は、我々が想像しうる現代の競走形態とは大きく異

なり、長時間かけて行われるのが基本であった。18 世紀の大部分の間、高いレベルでの競馬は、しばしば４マイル以上の距離の複数ヒートで行われ、最初に２回のヒートで勝利した馬が優勝馬になったという[8]。有閑階級である貴族、ジェントリにとって、長時間競馬に携わることは格好の余暇であったが、この時期、瞬発力に優れた競走馬が多数登場したことで彼らの競走概念に変化が生じた。それに伴い、ヒート競走は時代にそぐわないものになり、競走改革の先陣を切った団体がジョッキー・クラブであった。

また、1757 年にはアイルランドのカラ（Curragh）開催で生じた紛争の解決がジョッキー・クラブに委ねられたが、競馬研究者のモーティマーは、この出来事をクラブの管轄区域であるニューマーケットを越えた、影響力の急速な拡大の証拠と捉えている[9]。同じく競馬研究者のヴァンプリューは、ジョッキー・クラブに対するこうした嘆願が競馬の社会的特質に由来すると主張する[10]。特に、パトロンの機嫌を損ねたくない地方競馬の幹事は、難しい決定を避けたいと願っており、競馬の熱心な後援者であったジョッキー・クラブの会員たちが自身の地域で誠実かつ公平な人物であると尊敬されていた場合、クラブへの嘆願が助長されたという[11]。ジョッキー・クラブが、揺籃期から他地域へ勢力を伸ばそうと明確に意図していたかは判断できないが、少なくとも上流階級の集まるリスペクタブルな団体として他者から認識されていたと言える。

1758 年、ジョッキー・クラブ史上初の権威ある指示が発せられたが、それは以下の内容であった[12]。

「ニューマーケットでのプレート競走、スウィープステークス（Sweepstakes）、マッチ・レースに騎乗するすべての人々は、競走後に検量を受けることを義務付けられ、その重量超過は２ポンド（約 0.9kg）以内でそれ以上は禁ずるということが、居合わせた貴族、紳士たちによって承認された。この決議に従わないすべての騎手は、このクラブの指示に対する侮辱という廉がある、そして、いかなる紳士もその騎手も、スタート前に前述の決議によって許容された重量であると公表しない限り、以後ニューマーケットで騎乗する資格を剥奪される。」

これは一般的に「第一の指示（first order）」と呼ばれるもので、競走馬に課される騎手を含めた負担重量である斤量が遵守されているかを確認し、競走の公平性を追求しようとするクラブの意図を読み解くことができる。この指示の発布によって、ジョッキー・クラ

ブが本拠地ニューマーケットの競馬を、本格的に統括、管理し始めたと言えよう。

1762 年には、従来の 10 月開催が２回行われるようになり、加えてクラブの「第二の指示（second order）」において、以下の通り、騎手が着用する服色に関する最初の言及があった[13]。

「競走中の各馬を判別する際の更なる便宜のため、さらに、各騎手によって身に付けられた色を見分けられないことで生じる紛争防止のため、下記の紳士たちは、次に述べる名前に付帯させる色を持つことに同意し、決議に至った、（中略）上記の指示は、1762 年の次の第２回 10 月開催で施行される。それゆえ、幹事たちはジョッキー・クラブの名において、その時までに、上記の紳士たちが相当する服を騎手たちに供給するよう注意することを希望する。」

この「第二の指示」は、「第一の指示」と同様に、競走を公平かつ円滑に行うために設けられたものであるが、「ジョッキー・クラブの名において」とあるように、彼らによってニューマーケット競馬に対する権威付けがなされている。引用における中略箇所には、独自の服色を持つことに同意した馬主の名前が、登録された服色とともに掲載されていた。次ページの表１で、順に示しておく。

「第二の指示」に関して、ジョッキー・クラブ研究者のティレルは、服色のないサー・J・ローザー（Sir J. Lowther）がなぜリストに現れているのか理解に苦しむとしながらも、色の大部分が御者の仕着せに由来し、その仕着せにはシンプルな黒のベルベット帽がつきもので、それは今日でも、狩場やアスコット競馬場におけるロイヤル・プロセッション（Royal Procession）で、女王陛下の御者や乗馬従者たちが身に着けていると指摘している[14]。このクラブの「第二の指示」から、ジョッキー・クラブが緩やかながらも確実に競走改革を実践していたことがわかる。

このように結成から 10 年余りで、ジョッキー・クラブは拠点とするニューマーケットで行われる競馬に対して、革新的とは言えないまでも、スポーツに欠かせない公平性を希求する２つの指示を公布した。しかし、これらの指示の効力は本拠地に限定されており、他地域に影響力を及ぼすまでには至っていなかった。加えて、ジョッキー・クラブの設立以前および以後、長い期間にわたって、「ジョージ２世の治世 13 年に可決された競馬に関する法律」である制定法と、50 項目からなる「一般の競馬に関する規則」である慣習法と

いうまったく異なる２つの部分から成る無比の競馬規則が存在していた[15]。そのため、先の指示を含め、ジョッキー・クラブによる規則がニューマーケット以外の競馬場で受容されるようになるには、長い年月を要したのである。

（表１）1762 年の「第二の指示」における馬主の服色登録一覧

馬主名	服色
カンバーランド公	紫色
グラフトン公	空色
デヴォンシャー公	麦わら色
キングストン公	深紅色
アンカスター公	淡黄褐色
ブリッジウォーター公	ガーターブルー
ロッキンガム侯	緑色
ヴォルドグレイヴ伯	ディープレッド
オーフォード伯	紫色と白色
マーチ伯、ヴァーノン氏	白色
ノーサンバランド伯	ディープイエロー
ガウアー伯	青色と青色帽
ボリングブローク子	黒色
サー・J・ムーア	ダーケストグリーン
グレンヴィル氏	黄色をあしらった茶色
シャフト氏	桃色
グロヴナー卿	オレンジ色
サー・J・ローザー	—

出典：Roger Mortimer, *The Jockey Club* (London, 1958), p.31 より筆者作成。

そもそも、ジョッキー・クラブが、その揺籃期からイギリス全土の競馬場を纏め上げるような統括団体像を描いていたかどうかは定かではない。揺籃期においては、自らが管理するニューマーケットの競馬を、競馬好きの貴族、ジェントリたちが集まる一流の社交場として、よりよく運営していきたいという思いが強かったように思われる。しかし、ある出来事によって、ジョッキー・クラブが明確にその影響力をニューマーケット以外の地へ伸ばそうと企図していることが判明した。その出来事こそ、クラブの公式機関誌としての役割を果たした『競馬年鑑』の創刊である。次節では、この『競馬年鑑』について分析する。

第二節　クラブの公式機関誌『競馬年鑑』（*Racing Calendar*）の創刊

本節では、ジョッキー・クラブについて検証する上で必要不可欠な史料である『競馬年鑑』の分析を行う。筆者のジョッキー・クラブの時代区分で示したように、この『競馬年鑑』の発行開始は、クラブの揺籃期から初期発展期への移行期に該当している。加えて、時代を経た後期発展期および確立期にも、情報量を増やしながら継続して発行され続けた。そのため、本節では、検証の対象となるジョッキー・クラブの時代区分が複数にまたがっていることをあらかじめ断っておきたい。

ジョッキー・クラブの設立から 20 余年を経た 1773 年、『競馬年鑑』が創刊された。マイク・ハギンズは、『競馬年鑑』が発行後すぐに、ジョッキー・クラブの事実上の代弁者となったと指摘している[16]。そのため、『競馬年鑑』の発行開始は、クラブのその後の発展を大きく左右する出来事であったと言える。創刊の背景には、当時のジョッキー・クラブ幹事であったサー・チャールズ・バンベリーの決定的支援があったが、この点については次章の第二章第一節で詳述する。

『競馬年鑑』は、国内各地における競走結果と競馬開催予定の掲載を中心とした、年一回発行の情報媒体である。このような記録集の編纂を、ジョッキー・クラブがいち早く始めたわけではなかった。例えば、ジョッキー・クラブの設立前には、記録集の先駆けと言われる 1727 年のジョン・チェニー（John Cheny）による *An Historical List of All Horse Matches Run, and of All Plates and Prizes Run for in England* が存在したし、ジョッキー・クラブの揺籃期には、B・ウォーカー（B. Walker）の記録集や、ウィリアム・テューティング（William Tuting）とトマス・フォーコナー（Thomas Fawconer）の共著が出版されていた[17]。しかし、ジョッキー・クラブのような一定の権威を持つ団体が、『競馬年鑑』を発行するという事例は初めてのことであった。かくして、『競馬年鑑』という強力なメディアを手中に収めたジョッキー・クラブは、この媒体を通して、彼らの規則や情報などを各地へ伝播させてゆくことになる。

『競馬年鑑』は、創刊当初から高いクオリティを有するものであった。1773 年の初版は、序編 30 ページと本編 411 ページで構成されていたが、序編は「購読者リスト（List of Subscribers）」に始まり、そのリストはカンバーランド公（His Royal Highness the Duke of Cumberland）を筆頭として、一部の例外はあるものの、爵位を持つ貴族からサーの尊称を持つ人物までが順番に整然と列挙されていた[18]。「His Royal Highness」の敬称が使用されているのはカンバーランド公のみであるが、高貴な人々には、「His Grace」、「Right

Honourable」、「The Honourable」といった敬称が付され、定期購読者の中でも特別な扱いを受けており、初版におけるその割合は、定期購読者 522 名のうち 95 名で、約 18.2%を占めていた[19]。また、エスクワイア以下は、ベドフォードシャー（Bedfordshire）からヨークシャー（Yorkshire）まで、アルファベット順に整理されたイングランド内 35 地域と、ウェールズ、アメリカ、アイルランド、スコットランドの枠内で掲載されていた[20]。このように、購読者リストにおいて、上流階級を身分的に切り分けている様は、まさにイギリス社会の縮図であり、競馬を支えているのがジョッキー・クラブ、すなわち上流階級であるという意識の表れとも言えるだろう。

（図２）1773 年の『競馬年鑑』初版における序編の目次

C O N T E N T S.

	Page
LIST of Subſcribers - - - -	i
Extract of the Act relating to horſe races - -	xi
Copy of the King's plate articles - -	xiii
Copy of the Newmarket cup articles - -	xv
Certificate of winning a King's plate - - -	xvi
Articles of a match - - - -	ib.
Affidavit to prove the qualification of a hunter	xvii
Certificate to prove the age of a horſe - -	ib.
Table of weights for Give-and-take plates -	xviii
Rules and orders of the Jockey Club - -	xxi
Colours worn by riders at Newmarket - -	xxix
Explanation of Abreviations - - -	xxx

出典：*Racing Calendar*, Vol.1, 1773.

ここで、『競馬年鑑』の第１巻から第５巻まで、すなわち 1773 年から 1777 年までの５年間における定期購読者数の推移を確認しておく。先に述べたように、1773 年の第１巻の定期購読者数は 522 名であったが、翌 1774 年の第２巻では 782 名となり[21]、260 名の増加が見られた。続く 1775 年の第３巻は 984 名[22]、1776 年の第４巻は 1,106 名[23]、そして、1777 年の第５巻においては 1,305 名となり[24]、『競馬年鑑』の定期購読者数は、わずか５

年で 2.5 倍となった。その後、定期購読者数が必ずしも増加の一途を辿ったわけではなかったが、常に貴族、ジェントリを中心とした購読者層を維持し続け、その伝播も国内に留まらず、フランス、ドイツ、アメリカ、ジャマイカといった海外にも購読者を獲得していた[25]。彼らが『競馬年鑑』に求めた情報は、主として競馬の開催予定と競走結果であったと思われるが、18 世紀においても、入手可能な情報は、ジョッキー・クラブの規則と指示やニューマーケットにおける馬主登録状況など、多岐に渡っていた。また、定期購読が可能であったのは、安定した収入があるリスペクタブルな人々のみであったことを忘れてはならない。

さて、『競馬年鑑』を獲得し、次第に全国的な競馬統括団体へ向けての体制を整えたジョッキー・クラブは、18 世紀から 19 世紀にかけての世紀転換期に、自らの権威を他地域に伸ばすための試みを、『競馬年鑑』を通して実行に移した。その嚆矢と言える出来事が、1797 年における「一般の競馬に関する規則」の掲載開始と、1803 年におけるジョッキー・クラブ自身の競馬規則の掲載開始である[26]。競馬規則には、制定法である「ジョージ 2 世の治世 13 年に可決された競馬に関する法律」と、慣習法である「一般の競馬に関する規則」が存在していたことはすでに述べたが、1797 年まで、『競馬年鑑』には前者しか掲載されていなかった。競馬史を専門とするマイク・ハギンズは、ジョッキー・クラブが「一般の競馬に関する規則」の掲載を始めた点を、「他の場所で長く有効であったより一般的な規則に対して、ジョッキー・クラブの意見を押し付けることに気が進まなかった事実を示唆している」と述べている[27]。しかし、19 世紀を通じて、ジョッキー・クラブが自らの競馬施行規則を一般的な競馬施行規則へ塗り替えていく過程を考慮すれば、この出来事は、彼らが本拠地ニューマーケット以外の地を明確に意識し始めたという証拠であろう。そして、1803 年に初めて競馬施行規則の独自版を作成し、その後、ジョッキー・クラブは頻繁に改定を加え、その内容を『競馬年鑑』上に発表することになった[28]。19 世紀前半の初期発展期において、ジョッキー・クラブは、益々競馬統括団体としての「近代的」側面を自らの競馬施行規則を通して顕示することになるが、この点については、地方競馬場との関係性を中心に、第四章第一節で具体例を提示する。

ジョッキー・クラブが、貴族、ジェントリ、すなわち有閑階級に支えられた社交クラブであり、その性格上、設立当初から閉鎖的な空間を形成していたことはすでに述べてきたとおりである。そのため、団体の正確な規模や具体的なメンバー構成は広く知られていなかったが、クラブの内情が明らかになったのも『競馬年鑑』を通してであった。1835 年版

の『競馬年鑑』上で、ジョッキー・クラブのメンバーが初めて一覧として明らかになったが、当時の会員は総勢 71 名であった[29]。この段階では、様々な権限を持っていた３名の幹事が他の会員と区別されておらず、1838 年版で初めて、メンバーリストの先頭に立つようになった[30]。結成から長い年月を経ているにもかかわらず、1835 年時に会員が 71 名しか存在していなかった背景には、ジョッキー・クラブの極めて厳格な入会システムがあった。この点に関して、ヴァンプリューは、19 世紀を通じて、商工業の代表者が馬主として競馬に新規参入したが、ジョッキー・クラブには入会できなかったと述べている[31]。

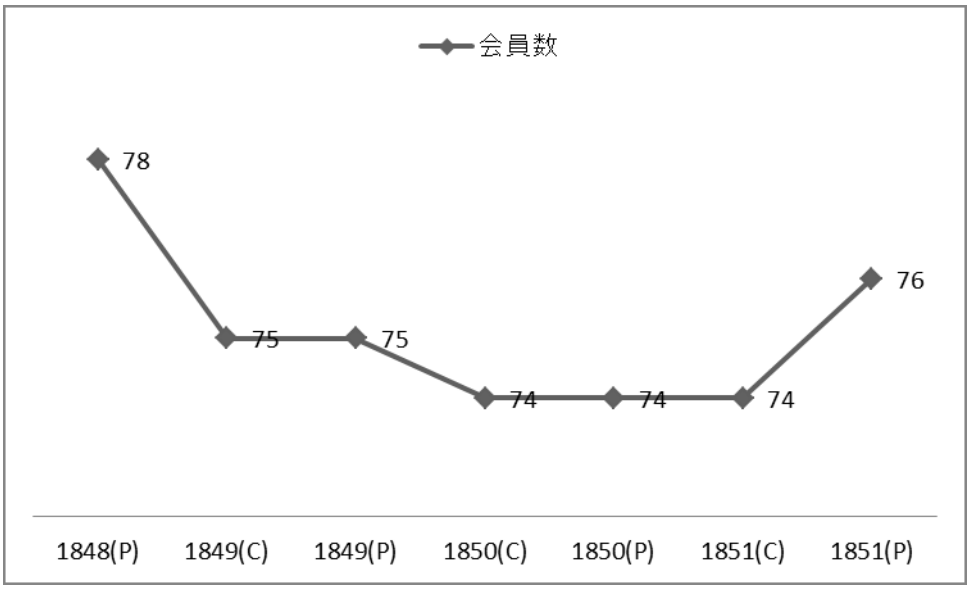
ジョッキー・クラブの新会員の入会に関する独立した項目は、1828 年におけるジョッキー・クラブ規則の大幅な改定によって設けられたが、入会の是非を問う無記名投票は年２回しか行われず、現行会員の推薦が必要で、なおかつ最低限必要な９名の会員の中で２名の反対投票があれば即否決されるという厳しい内容であった[32]。設立から時代を経て、新会員の入会に関する規則が明文化されてもなお、晴れてクラブ会員になるための必要得票数は極めて高く、ジョッキー・クラブは、揺籃期から続くクラブの特徴の一つである閉鎖性を常に保ち続けていたと言える。

メンバーリストの初出に関して、ハギンズは、「一部の上流階級の競馬に対する後援が一時的な衰退を見せていた時期で、ことによると、メンバーの状態に注意を促すため」としているが[33]、当時のジョッキー・クラブ幹事の一人であったスタンレイク・バトソン氏（Stanlake Batson, Esq.）は、ジョッキー・クラブを「名高いクラブ（this celebrated Club）」とした上で、メンバーリストを掲載することに関して、「私たちは、いまや彼らの名前を供給することを可能にさせられ、我々の読者は、ターフがそれほど名高い団体の支配と庇護の下にある間、その利益と名声が安全に保たれるということに賛同する」と発言している[34]。この事実は、ジョッキー・クラブの現体制を明らかにし、その勢力をより拡大させることを前提としたものであり、決して衰退を防止するための打開策として講じられたものではなかった。

ここで、メンバーリスト掲載後、すなわちジョージ・ベンティンク卿時代と重なる後期発展期の会員の推移について触れておこう。1836 年版の『競馬年鑑』におけるメンバー構成は、公爵（Duke）９名、侯爵（Marquis）５名、伯爵（Earl）12 名、卿（Lord）９名、準男爵（Baronet）４名、エスクワイア（Esquire）25 名、陸海軍将校や「Hon.」の称号を持つものが７名の計 71 名であり、国王ウィリアム４世もジョッキー・クラブのパトロンであった[35]。後期発展期末の 1846 年の『競馬年鑑』においても、上流階級中心で構成さ

れるというジョッキー・クラブの本質は一切変わらず、総勢 78 名のうち、公爵６名、侯爵３名、伯爵 17 名、子爵３名、卿５名、準男爵９名、エスクワイア 25 名、陸海軍将校や「Hon.」の称号を持つものが 10 名で、アンソン大佐（Hon. Col. Anson）、ジョージ・ベンティンク卿、イグリントン伯（Earl of Eglinton）が幹事を務めていた[36]。1836 年から 1846 年までのベンティンク卿時代において、下記の表２のように、会員の数が常に一定というわけではなかったが、平均すると毎年約 75 名の会員を抱えていたことがわかる[37]。

（表２）ベンティンク卿時代におけるジョッキー・クラブ会員の推移



出典：*Racing Calendar*, Vol.64, 1837, p.579; *Racing Calendar*, Vol.65, 1838, p.613; *Racing Calendar*, Vol.66, 1839, p.628; *Racing Calendar*, Vol.68, 1841, p.669; *Racing Calendar*, Vol.69, 1842, p.641; *Racing Calendar*, Vol.70, 1843, p.616; *Racing Calendar*, Vol.71, 1844, p.658; *Racing Calendar*, Vol.72, 1845, p.675; *Racing Calendar*, Vol.73, 1846, p.746; *Racing Calendar*, Vol.74, 1846, p.480 より筆者作成。

ここで、1836 年版『競馬年鑑』の掲載内容を分析してみると、競走結果と開催予定を軸としながらも、その内容は多岐にわたり、巻頭の定期購読者リストを皮切りに、キングズ・プレート競走に関する規約やその勝ち馬の証明書、一般の競馬に関する規則、ジョッキー・クラブの規則と指示、判例集、本拠地ニューマーケットの競走において騎手が着用する服色のリストである馬主リスト、闘鶏に関する記事、種牡馬リスト、そして、巻末にはジョッキー・クラブのメンバーリストが掲載されている[38]。

この 1836 年版に関しても、先の定期購読者リストに触れておくことにする。同版の購読者の掲載はウィリアム 4 世（HIS MAJESTY）が筆頭となっていたが、初版と同様、爵位を持つ貴族から順に、基本的にはサーの尊称を持つ人物までが先に名前を挙げられ、エスクワイア以下は、ベドフォードシャーからヨークシャーまで、アルファベット順で並べられたイングランド内 39 地域と、ウェールズ、スコットランド、アイルランドを中心としたイングランド外 13 地域の中で掲載されていた[39]。定期購読以外にも、この時期にはすでにロンドンの『競馬年鑑』事務所、本拠地ニューマーケットのコーヒー・ルームはもちろんのこと、本屋が主であったが、ヨーク（York）、マンチェスター（Manchester）、リヴァプール、バース（Bath）、ウスター（Worcester）、ニューカッスル・アポン・タイン（Newcastle-upon-Tyne）、エディンバラ（Edinburgh）の 7 か所にも『競馬年鑑』を販売する代理人が存在し、当時の価格は 12 シリングであった[40]。ジョッキー・クラブの後期発展期における『競馬年鑑』の購読は、非常に広範囲にわたっており、競馬に関心を持つ人々にとって、それが必要不可欠な情報源となっていた事実を示しているであろう。

さて、当時のジョッキー・クラブの規則を紐解いてゆくと、全 60 項目のうち第 2 項から第 10 項までがクラブの運営を司る幹事に関する規則で、第 11 項から第 16 項までがジョッキー・クラブのメンバーや、各ルームの入場に関する規則であった[41]。この点を考慮すると、この時期においても、設立からの特徴である社交クラブとしての性格を色濃く残していたと指摘できる。この他は、基本的に競馬の運営に直接かかわる項目であり、簡潔に書かれているだけの「一般の競馬に関する規則」とは異なり、極めて具体的かつ近代スポーツに不可欠な公平化を図る内容となっている。これまで、『競馬年鑑』に関して、定期購読者リストとクラブのメンバーシップ、ジョッキー・クラブの規則を中心に取り上げてきたが、その変遷から、各時代におけるクラブの情勢を読み解くことが可能である。

最後に、『競馬年鑑』の分冊について確認しておく。19 世紀も半ば、ジョッキー・クラブの時代区分としては後期発展期の最末期にあたるが、情報網の拡大に伴い、『競馬年鑑』に掲載される情報量も膨大なものになり、もはや一冊ではまとめきれなくなっていた。そのため『競馬年鑑』は、1847 年から、競馬の開催予定が掲載された『競走予定版』（*Races to Come*）と、競走成績が掲載された『競走結果版』（*Races Past*）の二冊が発行されることになった。ジョッキー・クラブは、こうした情報を購読者にいち早く伝えることにも抜け目なく、分冊前年の 1846 年『競馬年鑑』の冒頭には、以下のような告示がある[42]。

告示

『競馬年鑑』購読者の方々は、1847 年および後年の予約購読が、これまでの３月１日に代わり、１月１日に始まるということを丁重に告げられる。

１月１日に登録されたすべての主要な開催を含んだシート・カレンダーの第１巻は、１月の初めに発売され、そのシートは、従来よりも年間を通して頻繁に発行されるだろう。

今後、２冊のブック・カレンダーが発行されるだろう。競馬開催予定を含んだ最初のものは、２月の初めに出版され、同年の仔馬情報や競走成績を含んだもう一方は、競馬シーズンの終了後、出来るだけ早く出版されるだろう。

あらかじめ支払うべき購読料は、

シート・カレンダーと２冊の本で、１ポンド 15 シリング

シート・カレンダーのみで、１ポンド５シリング

である。

この修正は、競馬開催の増加および発行者の作業改良によって与えられたより広い紙幅のため、必然的になされた。

競馬に関する情報量の増加にすばやく対応し、『競馬年鑑』を改良している点を考慮すれば、この時期すでに、ジョッキー・クラブが競馬統括団体として高いクオリティを有しており、文字通りの確立期に移行しようとしていた様子が垣間見える。分冊後の 1847 年時点において、『競馬年鑑』の販売代理人は、1836 年版と比較して、マンチェスターがリストから消滅したものの、ヨーク、リヴァプール、バース、ウスター、ニューカッスル・アポン・タイン、エディンバラに、新たにウォリック（Warwick）、ノーサンプトン（Northampton）の２か所が加わり、計８か所となった[43]。

本節で分析したように、ジョッキー・クラブは、揺籃期から初期発展期への移行期にかけて、『競馬年鑑』の創刊を経験した。この『競馬年鑑』を通して、独自の競馬施行規則はもちろんのこと、購読者リストおよびメンバーリストに見られるリスペクタブルな団体像など、クラブの様々な情報伝達が可能となり、全国的な競馬統括団体にふさわしい組織作りを進めていった。またジョッキー・クラブは、初版以来、『競馬年鑑』の持つ本質を理解し、クラブの後期発展期においても、最大限に活用していたと言えよう。

この『競馬年鑑』の重要性を受けて、次章ではまず、『競馬年鑑』の創刊に貢献したジョッキー・クラブ幹事サー・チャールズ・バンベリーについて分析する。

【註】

---

[1] Robert Black, *op. cit.*, pp.5-6. ロバート・ブラック以前の時代においては、ジョン・ポンドの『スポーツ年鑑』が引用されておらず、クラブの初出は、レジナルド・ヒーバー（Reginald Heber）の手による 1758 年の『競馬年鑑』（*Racing Calendar*）とするものもあった。例えば、Anon., *Horse-Racing: Its History and Early Records of the Principal and Other Race Meetings* (London, 1863), p.278.

[2] John Pond, *op. cit.*, p.225.

[3] Roger Mortimer, *op. cit.*, p.10.

[4] *Ibid.*, p.11.

[5] Rebecca Cassidy, *The Sport of Kings: Kinship, Class and Thoroughbred Breeding in Newmarket* (Cambridge, 2002), p.16.

[6] Wray Vamplew, *op. cit.*, p.79.

[7] John Tyrrel, *op. cit.*, p.17.

[8] Wray Vamplew, Joyce Kay (eds.), *Encyclopedia of British Horseracing* (London, 2005), p.111.

[9] Roger Mortimer, *op. cit.*, p.30.

[10] Wray Vamplew, *op. cit.*, p.79.

[11] *Ibid.*

[12] Roger Mortimer, *op. cit.*, p.30.

[13] *Ibid.*, p.31. この服色は、現代において一般的に「勝負服」と呼ばれており、各馬主独自のものが定められている。色と同様、模様にも様々なバリエーションがある。

[14] John Tyrrel, *op. cit.*, p.18. しかし、ティレルの引用はモーティマーの引用と異なり、デヴォンシャー公（Duke of Devonshire）の麦わら色（*Straw-Colour*）について言及がないという問題点がある。この第 4 代デヴォンシャー公については、ロバート・ブラックが、彼の著作 *The Jockey Club and Its Founders: In Three Periods* の中で、1762 年における服色登録の際のメンバーであり、麦わら色を選んだと指摘している。Robert Black, *op. cit.*, pp.28-29.

[15] *Ibid.*, pp.369-377.

[16] Mike Huggins, *op. cit.*, p.175.

[17] Nicholas Clee, *Eclipse* (London, 2009), p.144.

[18] *Racing Calendar*, Vol.1, 1773. 購読者リストにおける貴族の掲載は、当然のことながら公爵から始まっており、以下侯爵、伯爵、子爵、卿と続いている。それぞれ同じ枠の中では、彼らもアルファベット順に掲載されている。

[19] *Ibid.*, pp.i-iii. 一般的な「サー」の人々には明確な敬称は付されていないが、敬称付きの人々と同枠で掲載されているため、彼らを敬称付きの人々と同質に扱う。

[20] *Ibid.*, pp.iii-x.

[21] *Racing Calendar*, Vol.2, 1774, pp.xi-xxiv.

[22] *Racing Calendar*, Vol.3, 1775, pp.ix-xxiv.

[23] *Racing Calendar*, Vol.4, 1776, pp.vii-xxiv.

[24] *Racing Calendar*, Vol.5, 1777, pp.vii-xxviii.

[25] 例えば、1786 年の第 14 巻の定期購読者数は 1,027 名であった。*Racing Calendar*, Vol.14, 1786, pp.vii-xxv. また、1798 年発行の第 25 巻（「1797 年版」）の定期購読者数は 997

名であった。*Racing Calendar*, Vol.25, 1798, pp.vii-xxiv. 海外の定期購読者数に関しては、年に数人程度と少ない数ではあった。

[26] Robert Black, *op. cit.*, p.255.

[27] Mike Huggins, *op. cit.*, p.179.

[28] Robert Black, *op. cit.*, p.255. 1803 年以前にも「ジョッキー・クラブの規則と指示（Rules and Orders of the Jockey Club）」は存在していたが、体系的なものではなかった。

[29] *Racing Calendar*, Vol.63, 1836, p.557. この第 63 巻の発行自体は 1836 年であるが、その内容は 1835 年の競走結果等を掲載したものである。本論文では、年鑑という性格を考慮し、混乱を避けるため、この第 63 巻を「1835 年版」と記載しておく。『競馬年鑑』の発行は、対象となる年に間に合う場合と、翌年にずれ込む場合とがあった。そのため、「○○年版」と記載がある場合には、発行年にズレが生じていることを断っておく。

[30] *Racing Calendar*, Vol.66, 1839, p.628. この時の幹事は、チェスターフィールド伯（Earl of Chesterfield）、ボーフォート公（Duke of Beaufort）、そして、ラウス大佐（Hon. Capt. Rous、ヘンリ・ジョン・ラウス）の３名で、会員の総数は 75 名であった。

[31] Wray Vamplew, *op. cit.*, p.77.

[32] C. F. Brown, *The Turf Expositor*（London, 1829), p.131. これは、1828 年に作成された、新しい「ジョッキー・クラブの規則と指示」の第 11 項、「ジョッキー・クラブの新会員の入会に関して（Respecting the Admission of New Members for the Jockey Club）」に当たるもので、新会員の入会に関する項目は、これが唯一のものである。これに引き続き、第 12 項と第 13 項はニュー・ルームに関する項目、第 14 項から第 16 項はコーヒー・ルームに関する項目である。ジョッキー・クラブ会員のニュー・ルーム、コーヒー・ルームへの入場は何ら問題なかったが、非ジョッキー・クラブ会員がニュー・ルーム、コーヒー・ルームへ入場するためには、それぞれ別の無記名投票で当選する必要があった。ニュー・ルームへの入場に関する無記名投票に通過した人は、コーヒー・ルームへも入場できたが、コーヒー・ルームへの入場に関する無記名投票に通過しただけの人は、ニュー・ルームへは入場できなかった。この時期、ジョッキー・クラブ会員を頂点として、非クラブ会員でニュー・ルームとコーヒー・ルームに入場できる人、非クラブ会員でコーヒー・ルームにのみ入場できる人、という三層構造が存在していた。

[33] Mike Huggins, *op. cit.*, p.177.

[34] C. M. Prior, *The History of the Racing Calendar and Stud Book*（London, 1926), pp.192-193.

[35] *Racing Calendar*, Vol.64, 1837, p.579.

[36] *Racing Calendar*, Vol.74, 1846, p.480.

[37] 入会、退会が激しい年もあり、例えば、『競馬年鑑』1837 年版から 1838 年版にかけて、会員数は 66 名から 75 名に増加したが、入会 15 名、退会６名での９名増加であった。*Racing Calendar*, Vol.65, 1838, p.613; *Racing Calendar*, Vol.66, 1839, p.628.

[38] *Racing Calendar*, Vol.64, 1837.

[39] *Ibid.*, pp.vii-xxiv.

[40] *Ibid.* これは、巻頭に掲載されたものである。

[41] *Ibid.*, pp.xxxiii-xxxvi.

[42] *Racing Calendar*, Vol.74, 1846. これは、巻頭に掲載されたものである。ここにあるシート・カレンダーとは、おそらく持ち運びに便利な、紙の競馬情報媒体であると思われる。

[43] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847. これは、巻頭に掲載されたものである。

第二章　ジョッキー・クラブの初期発展期

ジョッキー・クラブは、その揺籃期に、競走後の検量や馬主の服色登録に関する指示を出すことによって、ニューマーケットで行われる競馬に対して一定の規範を求めた。これらの指示は、あくまでも本拠地にのみ適用されるものであり、彼らの影響力はいまだ限定的であった。しかし、1773 年における『競馬年鑑』の創刊によって、彼らが作成した独自の規則を含めた様々な競馬情報が、全国に発信されるようになった。このクラブの初期発展期の始まりを告げる『競馬年鑑』出版に尽力した人物が、当時のジョッキー・クラブ幹事サー・チャールズ・バンベリーである。彼は、1768 年に 28 歳でジョッキー・クラブの幹事になり、クラブの終身会長、最初の「ディクテイター・オブ・ザ・ターフ」として知られるようになった競馬改革者である[1]。本章第一節では、まずサー・バンベリーの改革を分析することで、彼の時代にジョッキー・クラブが競馬統括団体として各地に影響力を拡大させる下地を整えた点を明らかにしたい。

また、第二節では、競走の主役であるサラブレッドの創出について論じる。このサラブレッドという品種は、18 世紀末にジョッキー・クラブの『血統登録書』によって新しく規定された種である。高貴な会員を抱えるジョッキー・クラブが、混じり気のない「純血」の競走馬を生み出した意義の大きさを確認したい。

第一節　サー・チャールズ・バンベリーの改革

本節では、18 世紀後半から 19 世紀前半のジョッキー・クラブ幹事で、最初の競馬改革者として知られるサー・チャールズ・バンベリーについて分析する。彼は、ジョッキー・クラブの影響力をニューマーケット以外の競馬場に拡大させる上で、極めて重要な役割を担った人物である。『オックスフォード英国人名辞典』（*Oxford Dictionary of National Biography*）によると、サー・バンベリーはサフォーク（Suffolk）生まれの競馬管理者、政治家で、バンベリー家は数世紀にわたってチェシャー（Cheshire）の地主として名高く、彼の父はミルデンホール（Mildenhall）の教会区司祭であり、準男爵の位階を有する人物であった[2]。そのため、サー・バンベリーの出自は、貴族、ジェントリが集うジョッキー・クラブの指揮を執るに足るものであったと言える。

（図３）初期発展期のジョッキー・クラブ幹事サー・チャールズ・バンベリー

出典：John Tyrrel, *Running Racing: The Jockey Club Years Since 1750* (London, 1997), p.17.

彼が活躍した時代は、1760 年から 1820 年にかけてのジョージ３世の治世とほぼ重なり合う形となっている。ジョージ３世が即位した当時、ジョッキー・クラブは設立後約 10 年の時を経ていたが、目立った動きは、1756 年のジョッキー・クラブ・プレートにおけるヒート競走の廃止と、1758 年の後検量に関する「第一の指示」くらいしかなかった。ロバート・ブラックの指摘によれば、ジョージ３世は、後のウィリアム４世のようにジョッキー・クラブの会員でもなければ、その名義上の「パトロン」でもなく、乗馬を除いて「スポーツ・オヴ・キングス」である競馬を個人的には奨励していなかったが、彼の治世に競馬は並外れた発展を成し遂げた[3]。また、ジョージ３世の叔父であるカンバーランド公（William Augustus, Duke of Cumberland, 1721-65）、弟のヘンリ・フレデリック（Henry Frederick, Duke of Cumberland and Strathearn, 1745-1790）、そしてついには、息子２人もジョッキー・クラブのかなり著名なメンバーになった[4]。サー・チャールズ・バンベリーは、このように王室関係者がクラブ会員に存在するという状況下で、ジョッキー・クラ

ブの組織化を行うことになった。

冒頭部で、サー・バンベリーが 1768 年にクラブの幹事になったと述べたが、1771 年、それまで１名であったジョッキー・クラブの幹事を３名にする旨の指示が出された[5]。その内容は、以下のとおりであった[6]。

「３名の会員が幹事として任命されるべきで、毎年６月４日にその職務を開始する。その際、１名の新幹事が、出席しているジョッキー・クラブ会員たちの認可を条件として、毎年６月３日に退任する幹事によって任命されるべきである。現職幹事３名の最初とその次の欠員は、くじを引くことで解決される、以後、最古参の幹事が、毎年６月３日にその地位を退くべきである。」

この幹事の三人制は、以後長く存続することになるが、加えてジョッキー・クラブの幹事たちは、紛争解決における決定権など、次第に様々な権限を握っていくことになる。その幹事の権限に関する最初の決議は、同じ 1771 年における「ニューマーケットでの競走に関するすべての紛争は、今後、３名の幹事と当該の一団によって選ばれた２名の仲裁人によって解決されるべきである」という注目すべきものであった[7]。管理するニューマーケットで紛争が起こった際に、ジョッキー・クラブの代表とも言える幹事たちが裁定を下すというこの決議は、上流階級の社交クラブの中に、競馬というスポーツを統括する団体としての明確な意識が芽生えてきた証拠である。この他にも、クラブの幹事たちは、練習場と競馬場に関して、彼らが適切と判断する規則を作成する完全な権限や、コーヒー・ハウス管理者などを含めたジョッキー・クラブの運営に携わる人々の任命権、ジョッキー・クラブの資金に対する責任、発走時刻の決定権、毎年６月３日に報告書を提出する義務といった様々な権限と責務を併せ持つようになった[8]。

このように、1771 年以降、幹事の権限が強化されたが、それ以前からクラブの幹事を務めていたサー・バンベリーは初期発展期における中心的人物として名高い。それには、大きく分けて３つの理由がある。サー・バンベリー１つ目の功績は、1769 年、ニューカッスル（Newcastle）の事務弁護士であったジェイムズ・ウェザビー（James Weatherby）に対して、『競馬年鑑』を出版するよう勧誘したことである[9]。

ジョッキー・クラブが『競馬年鑑』を創刊する以前から、ジョン・チェニー、ジョン・ポンド、B・ウォーカーやウィリアム・テューティングとトマス・フォーコナーの共著と

いった競馬記録集が存在していたことは、第一章第二節で述べたとおりである。こうした記録編纂事業は、栄枯盛衰が極めて激しかった。事実、ウォーカーが市場から撤退した後、記録書管理者（keeper of the match book）としてテューティングに、ジョッキー・クラブ秘書としてフォーコナーに取って代わっていたウェザビーは、彼らの書物を奪い取る計画に取り掛かった[10]。その際、ウェザビーは、フォーコナーを見捨てるようテューティングを説得し、彼らの記録集 1,600 部が世に出る前に、差し押さえて隠匿してしまったのである[11]。『競馬年鑑』出版に伴う５年の法的論争は、競馬開催の日付を載せる権利以上のものが巻き込まれていることを示しているが、ウェザビーの『競馬年鑑』は入念な競馬規則の宝庫であり、彼の地位はジョッキー・クラブの秘書、事務弁護士、会計係、そして特に、賭け金の保管人といった様々な分野に発展した[12]。そして、以後 200 年以上もの間、ジョッキー・クラブは、彼らが代理人として雇った「公務員」のようなウェザビー商会によって、代々支えられることになる[13]。このように、『競馬年鑑』の発行を含めた様々な業務をこなすことのできるウェザビーをクラブに引き入れたサー・チャールズ・バンベリーの功績は計り知れず、これにより、ジョッキー・クラブはより一層統括団体としての機能を意識するようになったと言える。

（図４）ウェザビーズ（Weatherbys）所有のニューマーケット記録集（1718~1788）

出典：国立競馬博物館（The National Horseracing Museum）ホームページより。

http://www.nhrm.co.uk/What's_On/Some_Museum_Highlights/The_18thC_Match_Book.aspx

（2015 年 11 月 17 日閲覧）

サー・バンベリーによる功績の２つ目は、後に人気を博すことになるクラシック・レースの創設にまつわるものである。クラシック・レースとは、３歳馬のみが参戦可能な競走で、1776 年創設のセントレジャー（St. Leger）、1779 年創設のオークス、1780 年創設のダービー、1809 年創設の 2,000 ギニー（Two Thousand Guineas）、1814 年創設の 1,000 ギニー（One Thousand Guineas）の５つを指す[14]。現代でも、特に所有馬からダービーの勝ち馬を出すことは、馬主にとっての最大の名誉と言われている。その第１回ダービーは、1780 年５月４日に行われた。これは、セントレジャー、オークスの設立とともに、ジョージ３世の治世における記憶すべき出来事であったと、19 世紀末に馬のブリーダーでワイン商人でもあったウォルター・ギルビー（Walter Gilbey）が指摘しているように[15]、これらの競走は、後に権威あるナショナルな行事として成長してゆく。

そうしたダービーおよびセントレジャーの設立には、サー・チャールズ・バンベリーが多大なる影響を及ぼしたと言われているし[16]、最初の 1780 年のダービーに勝利したのは、まさに彼の所有馬ダイオメド（Diomed）であった[17]。このダービーとオークスはエプソム競馬場で、セントレジャーはドンカスター（Doncaster）競馬場で行われる競走であり、18 世紀の段階では、ジョッキー・クラブの拠点であるニューマーケットに、これらに匹敵する大きな３歳馬限定競走は存在していなかった。しかし、特にダービーとセントレジャーの創設に深くかかわったサー・バンベリーと、彼の仲間の幹事たちの主導で、２つのギニー・レースが導入された[18]。この２つのギニー・レースこそ、1809 年に設立された 2,000 ギニーと 1814 年に設立された 1,000 ギニーである[19]。ニューマーケットにおいて、３歳馬によるクラシック・レースが導入されるまでには少し時間を要したが、サー・バンベリーはクラシック・レースの生みの親とも言える存在であり、エプソムやドンカスターといった当時の有力競馬場との繋がりを通して、ジョッキー・クラブの存在価値を高めたことは、まさに彼の功績であった。

サー・チャールズ・バンベリーの３つ目の功績は、1791 年に起きたエスケープ事件（Escape Affair）に際して披露した対応力である。エスケープ事件は、1791 年 10 月 20 日と 21 日にかけて起きた、プリンス・オブ・ウェールズ（後のジョージ４世）の所有馬エスケープによる不正競走疑惑事件である[20]。まずは、この事件の概要を確認しておく。

1791 年 10 月 20 日、名血馬エスケープは４頭立ての競走に出走したが、自分より実力の劣る３頭の馬に敗北し４着という結果に終わった。大敗の翌日、エスケープは６頭立ての競走に出走することになったが、この６頭の中には、エスケープが前日に敗れた２頭に

加えて有力馬シャンティクリア（Chanticleer）も含まれていた。先の大敗を受けてエスケープの評価は下がり、そのオッズは5倍（five to one against）になっていたが、前日とは打って変わってこの競走に勝利したのである[21]。

要するに、20日の競走におけるエスケープの大敗は故意であり、それにより21日の賭けの倍率を意図的に操作したという八百長の疑いが、馬主である皇太子にかけられたのである。これに対し、当時のジョッキー・クラブ幹事サー・バンベリーが中心となって調査を開始し、エスケープの騎手であったサム・チフニー（Sam Chifney）の説明が満足できるものではないと判断したサー・バンベリーは、「もし、チフニーが皇太子の所有馬に騎乗するならば、いかなる紳士も対戦しないだろう」と警告を発した[22]。これにより、皇太子は、ニューマーケット競馬場における事実上の「出走停止処分」を受けた形となったが[23]、エスケープ事件に対するジョッキー・クラブの毅然とした対応は、このクラブがリスペクタブルな統括団体であることを世間に広く知らしめる結果となり、以後ジョッキー・クラブの権威を地方に浸透させていく契機となったのである。

サー・チャールズ・バンベリーの功績に数えられる、ジェイムズ・ウェザビーを登用しての『競馬年鑑』の創刊、クラシック・レース創設にまつわるエプソムやドンカスターといった有力な競馬場とのネットワーク、エスケープ事件における迅速な対応は、ジョッキー・クラブがその権威をニューマーケットに留まらせておくのではなく、緩やかではあるものの、全国的な競馬統括団体へ向けての意識を深化させていったことを示す事例であると言える。これらの事例から、揺籃期とは明らかに一線を画している初期発展期のクラブ像が理解されよう。

さて、この初期発展期において、ジョッキー・クラブは『競馬年鑑』に加えて、もう一つの情報媒体を手にすることになる。それが、馬主の血統意識の高まりによって成立した『血統登録書』である。次節では、この『血統登録書』の分析を通して、18 世紀末から19世紀中頃にかけての馬主の変化を検証する。

第二節　血統意識の高まり―『血統登録書』（*General Stud Book*）の成立―

競馬統括団体であるジョッキー・クラブが、元来上流階級の社交クラブであること、入会に厳格な規則を設けていたことは、これまで述べてきたとおりである。彼らは常に高貴な会員だけをクラブ内に組み入れることで、その閉鎖性を維持し続けたわけであるが、この団体の高貴さをさらに際立たせた出来事が、サラブレッドの創出であった。

競馬の世界において、最も重要視されるのは競走馬の血統に他ならない。馬主が競走馬を購入する際、一番の判断材料となるのが血統であるし、賭けを行なう際も同様である。特に、競馬の担い手であった貴族、ジェントリは、自らが尊い存在であることを他者にアピールする必要があったが、競走馬の所有はまさにうってつけであった。

ジョッキー・クラブの揺籃期から、競走馬の血統が重視されていたことが窺える当時の『ジェントルマンズ・マガジン』（*The Gentleman's Magazine*）の記事があるので、引用してみる[24]。

「もし、あなたが真のスポーツマンであり、心に競馬に対する敬意を持つならば、ホワイトノーズ（White-nose）が脚の壊疽によってドンカスターで死んだという最近の新聞記事を、最大の関心を持って見たに違いない。この種の記事は、すべてのジェントルマン・ブリーダーに落胆を起こさせたに違いないし、そのような時期に、私は、ホワイトノーズの回想の誉れを持って、弔いの競走としてニューマーケットでの現在のレースを見ずにはいられない。」

後に創出されるサラブレッドには、三大始祖と呼ばれる種牡馬が存在している。その３頭が、18 世紀初頭の種牡馬ダーレー・アラビアン（Darley Arabian）、バイアリー・ターク（Byerley Turk）、ゴドルフィン・アラビアン（Godolphin Arabian）であり、サラブレッドの直系の父系祖先を可能な限り遡った場合、いずれかに辿り着く。先のホワイトノーズは、三大始祖に数えられるゴドルフィン・アラビアンが、数多く遺した名馬の１頭であった[25]。この記事から、名血を持つホワイトノーズの死が、競馬界にとって大きな衝撃であったことを窺い知ることができる。記事は、以下のように続いている[26]。

「とりわけ、私たちは、彼の血管に流れる高貴な血に敬服すべきであるし、尊敬を持って、彼の偉大な、偉大な、偉大な、偉大な、偉大な祖父と祖母の輝かしい名前の数々を見つめるべきである。」

この記事は、ジェントルマン層が競走馬に対して、いかに高貴さを求めたかを物語っている。ジョッキー・クラブの揺籃期にあたる 18 世紀中頃にはこうした背景があったが、クラブの初期発展期である 18 世紀末、競走馬を取り巻く状況に決定的な変化が起こるこ

とになる。

1793 年、『競馬年鑑』の発行を手掛けていたジェイムズ・ウェザビーが、調査可能なところまで遡ることのできる血統を持つ約 100 頭の繁殖牝馬と、勝ち馬を輩出していた同数の種牡馬を含んだ、繁殖記録の第 1 巻を発行した[27]。これは『血統登録書』と呼ばれるもので、この中で名前を挙げられた馬たちが「サラブレッド」であり、以後、この第 1 巻に記録された繁殖牝馬と種牡馬まで祖先を辿ることのできる馬だけが、サラブレッドとして認められる権利を持った[28]。高貴さの象徴と言えるサラブレッドを規定したのは、実はジョッキー・クラブであったのである。

サラブレッドの血統は、強くかつ「純血」であるか否かが高貴な会員を抱えたジョッキー・クラブによって常に見直され、それは定期的に出版された『血統登録書』に反映されている。例えば、1840 年の『血統登録書』第 4 巻第 2 版では、「グレート・ブリテンで産まれたサラブレッド馬の正確な登録書」であることを出版者は望んでいるという旨が記されていた[29]。『血統登録書』への登録は、優れた競走成績を残した馬を高く評価し、種牡馬、繁殖牝馬として優遇することとも同義であった。また、この『血統登録書』は、高貴な血統を表象するサラブレッドが、上流階級の人々が競馬に投影していた貴族的意識やリスペクタビリティの象徴であることを示す証左である。

この『血統登録書』の発行は、クラシック・レースの登場と無関係ではなく、その初版発行はクラシック・レース創設後まもなくのことで、クラシック・レースに勝利した馬の多くは、『競馬年鑑』の巻末に設けられた種牡馬広告に、その情報が掲載されている[30]。クラシック・レース勝ち馬の良血度と『競馬年鑑』の種牡馬広告との関連性については、第三章第二節で詳述するが、『血統登録書』と『競馬年鑑』には相関関係があったと指摘できよう。

『血統登録書』が創刊された 18 世紀末とは一転して、19 世紀に入ってしばらくすると、上流階級が独占していた競馬には、多くの中産階級や労働者階級が参加し始めたため、その様相が大きく変化した。特に、中産階級の競馬界への参入について論じる際には、この時期に、彼らがどの程度馬主になったかを確認せねばならない。第一章第一節の表 1 で示した 1762 年の「第二の規則」における馬主の服色登録一覧では、19 人中 16 人が明らかな上流階級であった。「明らかな上流階級」と表現したのは、「ミスター（Mr.）」と表記されている 3 人が、エスクワイア層かそれ未満の中産階級なのか判断が付かないためである[31]。しかし、全体的な比率から見て、当時の中産階級馬主が明らかに限定的であったこと

は指摘できよう。

『血統登録書』は、『競馬年鑑』に存在した定期購読者一覧を有していない。そのため、当時の馬主数を知るためには、『競馬年鑑』に掲載された「Colours worn by the Riders of the following Noblemen and Gentlemen」の項目、すなわち馬主の服色リストを分析する必要がある。1773 年の『競馬年鑑』初版では、28 名の登録があり、その内「サー」以上の「明らかな上流階級」馬主が 14 名、「ミスター」と表記されている馬主が 14 名と、同数であった[32]。「ミスター」と呼ばれている馬主の中で、例えば、C・ブレイク氏（Mr. C. Blake）、バールトン氏（Mr. Burlton）、ブランド氏（Mr. Brand）といった名前が見受けられるが、同年の定期購読者リストには、ロンドンおよびミドルセックス（London and Middlesex）の「クリストファー・ブレイク（Christopher Blake, Esq.）」、エセックス（Essex）の「フリップ・バールトン（Philip Burlton, Esq.）」、ハートフォードシャー（Hertfordshire）の「トーマス・ブランド（Thomas Brand, Esq.）」という人物が掲載されている[33]。馬主のリストではフルネームが使用されておらず、定期購読者リストにおけるこれらの同姓人物と同一であると断定することは難しい。しかし、馬主リストには「以下の貴族、紳士」との記載があるため、ここでも中産階級の馬主が多く存在していたとは言い難い。当時の馬主登録数に関しては、下記の表 3 で示しておいた。

（表 3）1773 年から 1779 年までの『競馬年鑑』における馬主登録数の推移

年度	1773年	1774年	1775年	1776年	1777年	1778年	1779年
サー以上の「明らかな上流階級」馬主	14	17	17	17	22	21	20
サー未満の馬主（Mr.）	14	16	19	22	19	16	14
計	28	33	36	39	41	37	34

出典：*Racing Calendar*, Vol.1, 1773, p.xxix; *Racing Calendar*, Vol.2, 1774, p.xliii; *Racing Calendar*, Vol.3, 1775, p.xliii; *Racing Calendar*, Vol.4, 1776, p.xliii; *Racing Calendar*, Vol.5, 1777, p.xlvii; *Racing Calendar*, Vol.6, 1778, p.xlvii; *Racing Calendar*, Vol.7, 1779, p.xlviii より筆者作成。

1774 年の『競馬年鑑』では、「明らかな上流階級」馬主が 17 名、「ミスター」と表記されている馬主が 16 名で、計 33 名であった[34]。ここでは、新たに H・ヴァーノン氏（Mr. H. Vernon）なる人物が馬主登録されているが、彼に関して、ロバート・ブラックは、「ヴァーノン氏（Mr. (H.) Vernon）は、1774 年のジョッキー・クラブ・プレートでラトーニ（Ratoni）を出走させた」と述べている[35]。また、1774 年の『競馬年鑑』の定期購読者リストに、スタッフォードシャー（Staffordshire）の「ヘンリ・ヴァーノン（Henry Vernon, Esq.）」

という人物がいることを、合わせて指摘しておきたい[36]。このように、18 世紀末の段階において、馬主の多くが上流階級であったと指摘できるが、19 世紀に入るとこうした状況は一変する。

世紀転換期にあたる 1799 年版の『競馬年鑑』では、馬主登録者 44 名の内、「明らかな上流階級」馬主が 20 名、「ミスター」を中心としたそれ以外の馬主が 24 名であった[37]。同じく、1800 年版の『競馬年鑑』では、「明らかな上流階級」馬主が 22 名、「ミスター」を中心としたそれ以外の馬主が 25 名の計 47 名であった[38]。そして、19 世紀最初の 1801 年版『競馬年鑑』においては、「明らかな上流階級」馬主が 25 名、「ミスター」を中心としたそれ以外の馬主が 27 名の計 52 名であった[39]。『競馬年鑑』創刊当初と比べて、全体的な馬主数の微増がみられると同時に、「ミスター」を中心とした馬主層の割合が増加していることを確認できる。しかし、決定的な変化は 19 世紀初頭に起こった。それは、それまで「Colours worn by the Riders of the following Noblemen and Gentlemen」と記載されていた馬主一覧が、「Colours worn by the Riders」という名称に変わったことである[40]。「貴族、紳士」という表記が削除されたという事実は、19 世紀初頭に、貴族、ジェントリに属さない富裕な中産階級の多くが、馬主として競馬に関わるようになった証拠と言えよう。

そして、馬主登録数は、クラブの後期発展期であるジョージ・ベンティンク卿時代に激増する。1836 年版の『競馬年鑑』に掲載された馬主登録数は計 171 名で[41]、18 世紀末と比べると 4 倍近い数字となっている。さらに、1846 年の『競馬年鑑』における馬主登録数は 331 名となり、ベンティンク卿時代初期と比べて倍近くと、劇的な変化が起きていた[42]。この時期の馬主の中で、最も多くを占めていたのが「ミスター」層であり、その割合はそれぞれ約 67.8%と約 77.3%であった。世紀転換期およびクラブの後期発展期の『競馬年鑑』における馬主登録数の推移については、次ページの表 4 で示しておいた。

社会的上昇を望む中産階級にとって、高貴さの象徴とみなされていたサラブレッドを所有することは、格好の手段となったであろう。特に、ジョッキー・クラブの後期発展期における馬主登録数の増加は、それを如実に物語っている。競馬を含めたスポーツの世界は、現実世界とは切り離された特殊空間として作用する場合がある。財を成すことで馬主となった中産階級は、スポーツの世界で自らの存在をアピールし、疑似的な上流階級として脚光を浴びたいという意識があった。しかし、競馬の中心に中産階級が次第に侵入してくるという状況を、競馬の主たる担い手である上流階級が黙って見過ごすわけはなく、実際には、先に述べたクラブの厳しい入会制限など、様々な策を講じていたのである。

（表４）世紀転換期およびクラブの後期発展期の『競馬年鑑』における馬主登録数の推移

年度	1799年版	1800年版	1801年版	1813年版	1836年版	1846年
サー以上の「明らかな上流階級」馬主	20	22	25	34	55	75
サー未満の馬主（Mr.）	24	25	27	35	116	256
計	44	47	52	69	171	331

出典：*Racing Calendar*, Vol.27, 1800, pp.xxxiv-xxxv; *Racing Calendar*, Vol.28, 1801, pp.lii-liii; *Racing Calendar*, Vol.29, 1802, pp.lii-liii; *Racing Calendar*, Vol.41, 1814, pp.xlvi-xlvii; *Racing Calendar*, Vol.64, 1837, pp.l-liv; *Racing Calendar*, Vol.74, 1846, pp.lxi-lxviii より筆者作成。

1793 年における『血統登録書』の創刊以降、サラブレッドの枠組みが確立され、19 世紀に入ると、特に中産階級を中心とした馬主の増加が見られた。同時に、サラブレッドの血統がより重視されるようになったが、その好例と言えるものが、『競馬年鑑』の巻末に掲載された種牡馬広告である。これは、『血統登録書』と連動する働きを持っており、クラブの後期発展期に突入した 1836 年版『競馬年鑑』では、79 頭の種牡馬広告が掲載されていた[43]。また、1846 年の『競馬年鑑』において、その数は 67 頭であった[44]。詳細な情報が盛り込まれた種牡馬広告は、馬主として成功を収めたい支配階級や富裕な中産階級にサラブレッドに対する血統希求を芽生えさせたことであろう。この時期に激増した馬主数が、それを物語っている。

サラブレッドの血統は後世に連綿と受け継がれてゆくもので、支配階級そのものの血統意識と重なるものがあり、サラブレッド自体は、彼らの高貴さや家柄の正統性などを投影するものでもあった。事実、ジョッキー・クラブのメンバーたちは、良血のサラブレッドを求めて躍起になった。カンバーランド公は、18 世紀後半を代表するキングヘロド（King Herod）やエクリプス（Eclipse）といった名種牡馬を生産したことで知られている[45]。血統を受け継いでゆく過程の中で、不必要と判断された血統は自然に淘汰されてしまったが、一流とそうでないものに切り分けられた背景を考えると、サラブレッドは支配階級が作為的に創りあげた種と言える。また、サラブレッドの所有は、馬主になり始めた中産階級の富裕層にとって、自らの社会的上昇という大きな意味を持っていたし、競馬を見て楽しむだけであった労働者階級もまたそのスポーツに熱狂したことを鑑みれば、サラブレッドはあらゆる階級を魅了していたと言えよう。

しかし、社会的地位のない人が優秀なサラブレッドを所有しても、非難の対象となるだけであったし、あまつさえジョッキー・クラブの会員になることはできなかった。例えば、

稀代の名馬エクリプスを所有したデニス・オケリー（Denis O'Kelly）は、その好例であった[46]。また、庶民院議員であったが、肉屋、プロボクサー、パブの主人という経歴を持つジョン・ガリー（John Gully）も、名馬を所有していたにもかかわらず、ジョッキー・クラブの会員たちに認められるには、十分でなかった[47]。18 世紀末に『血統登録書』が成立したことにより、サラブレッドが規定され、多くの人々を魅了した。それでもなお、ジョッキー・クラブは設立以来の特徴である閉鎖性を維持し続けており、名馬を所有したとしても、自らの枠組みに入り得ないと判断した人物を締め出すという姿勢を徹底していたのである。

これらを受けて、次章では、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて創設されたクラシック・レースが、スポーツとしての競馬の成長を促すとともに、馬主の血統意識を変化させた点について論じる。また、ジョッキー・クラブがクラシック・レースを掌握したことにより、競馬統括団体としての成熟度を高めていった事実についても、合わせて論じる。

【註】

1 John Tyrrel, *op. cit.*, p.17.
2 H. C. G. Matthew, Brian Harrison (eds.), *Oxford Dictionary of National Biography: In Association with the British Academy*, Vol.8 (New York, 2004), p.672. サー・バンベリーは、ベリーセントエドマンズ（Bury St Edmunds）の学校、ロンドンのウェストミンスター・スクール、ケンブリッジのセントキャサリンズ・カレッジで教育を受け、文学修士となっており、1760 年から 1761 年には、グランド・ツアーでフランス、イタリアに旅行している。また、1761 年の総選挙でサフォーク選出の議員となり、1784 年から 1790 年の間中断があったものの、1812 年までその議席を保っている。
3 Robert Black, *Horse-Racing in England* (London, 1893), pp.56-57.
4 *Ibid.*, p.57. 息子２人とは、ジョージ４世とウィリアム４世を指している。
5 Wray Vamplew, 'Reduced Horse Power: The Jockey Club and the Regulation of British Horseracing', *Entertainment Law*, Vol.2, No.3, 2003, p.96.
6 *Racing Calendar*, Vol.1, 1773, p.xxii. これは、「ジョッキー・クラブの規則と指示」の「幹事の選択（Choice of Stewards）」の項目に該当する。
7 Roger Mortimer, *op. cit.*, p.32.
8 *Racing Calendar*, Vol.1, 1773, pp.xxii-xxiii. 幹事のこれらの権限、責務は、「ジョッキー・クラブの規則と指示」における「彼らの権限等（Their Power & c.）」の項目で規定されている。
9 Derek Birley, *Sport and the Making of Britain* (Manchester, 1993), p.136.
10 Nicholas Clee, *op. cit.*, p.144.
11 *Ibid.*
12 Derek Birley, *op. cit.*, p.136.
13 Christopher R. Hill, *Horse Power: The Politics of the Turf* (Manchester, 1988), p.141.
14 セントレジャーは、アンソニー・セントレジャー大佐（Anthony St. Leger, 1731/32-86）

に由来し、ダービーとオークスは、第 12 代ダービー伯（Edward Smith-Stanley, 12th Earl of Derby, 1752-1834）にまつわる競走である。オークスとは、第 12 代ダービー伯がエプソム近郊に所有していた屋敷の名前である。また、ダービー設立に関しては、レースの名前を決める際に、第 12 代ダービー伯とサー・チャールズ・バンベリーがコイントスを行い、ダービー伯が勝ったため、レース名がダービーになったという逸話があるが、真偽のほどは定かでない。

[15] Walter Gilbey, *Horses Past and Present* (London, 1900), p.54.

[16] John Tyrrel, *op. cit.*, p.25.

[17] Robert Black, *The Jockey Club and Its Founders: In Three Periods*, p.74. 馬名のカタカナ表記は、すでに固有名詞として定着しているものが多い。そのため、以後発音とは異なる場合であっても、混乱を避けるという理由から、すでに一般的に定着しているものを採用する。

[18] John Tyrrel, *op. cit.*, p.25.

[19] Robert Black, *Horse-Racing in England*, p.60.

[20] Roger Mortimer, *op. cit.*, pp.35-37.

[21] *Ibid.*, pp.35-36. エスケープは名馬ハイフライヤー（Highflyer）の産駒であり、元々評価の高い馬であった。

[22] *Ibid.*, p.37.

[23] Robert Black, *The Jockey Club and Its Founders: In Three Periods*, p.181.

[24] *The Gentleman's Magazine*, Vol.25, 1755, p.153.

[25] T・クック（千葉隆章訳）『イギリス競馬史』、原田俊治編『馬の文化叢書　第十巻　競馬―揺籃期のイギリス競馬』財団法人馬事文化財団、1995 年、204–205 頁。

[26] *The Gentleman's Magazine*, Vol.25, 1755, p.153.

[27] Federico Tesio, *Breeding the Racehorse* (London, 1958), p.4. 『血統登録書』の第 1 巻が出版される 2 年前の 1791 年に、ウェザビーは『血統登録書』の序巻を発表している。

[28] *Ibid.*

[29] *General Stub Book*, Vol.4, 2nd (ed.), 1840, p.iii.

[30] 例えば、18 世紀末では以下が挙げられる。*Racing Calendar*, Vol.14, 1786, p.299.

[31] その 3 名とは、ヴァーノン氏（Mr. Vernon）、グレンヴィル氏（Mr. Grenvile）、シャフト氏（Mr. Shafto）である。Roger Mortimer, *op. cit.*, p.31.

[32] *Racing Calendar*, Vol.1, 1773, p.xxix.

[33] *Ibid.*, pp.i-x. 定期購読者リストでは、上流階級であるエスクワイア層とそれ未満の「ミスター」層すなわち中産階級が、明確に区別されている。

[34] *Racing Calendar*, Vol.2, 1774, p.xliii.

[35] Robert Black, *The Jockey Club and Its Founders: In Three Periods*, p.227. 先の「第二の規則」において、ヴァーノン氏という名前があったが、1774 年の馬主リストでも服色が同じ白色で登録されている（H・ヴァーノン氏とは別人である）。

[36] *Racing Calendar*, Vol.2, 1774, p.xxii.

[37] *Racing Calendar*, Vol.27, 1800, pp.xxxiv-xxxv. ここでは、「Hon.」や「少佐（Major）」という敬称がみられるが、「Hon.」は「明らかな上流階級」馬主に、「少佐」は「ミスター」を中心としたそれ以外の馬主に分類した。

[38] *Racing Calendar*, Vol.28, 1801, pp.lii-liii.

[39] *Racing Calendar*, Vol.29, 1802, pp.lii-liii.

[40] これは、少なくとも 1813 年版の『競馬年鑑』において確認できる。同版では、馬主登録者 69 名の内、「明らかな上流階級」馬主が 34 名、「ミスター」を中心としたそれ以外の馬主が 35 名であった。*Racing Calendar*, Vol.41, 1814, pp.xlvi-xlvii.

[41] *Racing Calendar*, Vol.64, 1837, pp.l-liv.

[42] *Racing Calendar*, Vol.74, 1846, pp.lxi-lxviii.

[43] *Racing Calendar*, Vol.64, 1837, pp.562-576.
[44] *Racing Calendar*, Vol.74, 1846, pp.464-477.
[45] Robert Black, *Horse-Racing in England*, p.22. キングヘロドは、カンバーランド公が所有した。
[46] Robert Black, *The Jockey Club and Its Founders: In Three Periods*, p.238. 彼はアイルランド貧農の出であり、詐欺師とみなされていた。
[47] *Ibid.*, pp.360-361. 彼は、ポンテフラクト（Pontefract）選出の庶民院議員であった。彼の競馬生活などについては、以下を参照のこと。William Pitt Lennox, *Celebrities I Have Known with Episodes, Political, Social, Sporting, and Theatrical*, Vol.2 (London, 1876), pp.245-251.

第三章　18 世紀末から 19 世紀前半にかけての競馬の変化

イギリスを代表するスポーツである競馬は、上流階級の社交クラブであるジョッキー・クラブの 18 世紀半ばの設立をもって、従来からの上流階級の娯楽としての性格に加えて、「貴族的」かつ「近代的」スポーツとしての特徴を示し始めた。19 世紀に入ると、支配階級が独占していた競馬には、中産階級や一般民衆が参加し始めたため、その様相が大きく変化し、競馬はある種の一般に開かれた性格を持つに至った。しかし、その一方で、ジョッキー・クラブは設立当初からの特徴である排他性を維持し続け、時にはそれを強化し、彼ら独自の社交空間を破壊することなく、競馬の担い手があくまでも支配階級であることを再確認しえた。やがて 19 世紀中頃になると、競馬がさらに洗練されたことによって、「貴族的」要素と「近代的」要素は完全なまでに融合し、特有の形態を生み出すこととなった。

こうした競馬の変革が促されたのは、18 世紀末から開催され始めたクラシック・レースを通してである。19 世紀前半になると、クラシック・レースが人気を博し、競馬は上流階級が運営する一大スペクテイター・スポーツとして、競馬場を訪れる多くの観客に興奮と感動を味わわせた。本章では、ジョッキー・クラブが 18 世紀末からその勢力を拡大し、19 世紀前半を通して、全国的な統括団体として権力を掌握したプロセスを、クラシック・レースの成立と発展を中心に分析することで、ジョッキー・クラブの初期発展期から後期発展期にかけて、すなわち近代競馬形成期の具体化を目的とする。

第一節　競走形態の変化とクラシック・レースの成立

本節では、クラシック・レースに焦点を当て、近代競馬形成期における競走形態の変化との関連性およびジョッキー･クラブのクラシック･レースとの関わりについて検証する。先に述べたように、クラシック・レースとは、３歳馬のみを競わせるレースで、ドンカスター競馬場で行われるセントレジャー（1776 年創設）、エプソム競馬場で行われるオークス（1779 年創設、牝馬限定戦）とダービー（1780 年創設）、ニューマーケット競馬場で行われる 2,000 ギニー（1809 年創設）と 1,000 ギニー（1814 年創設、牝馬限定戦）の５つを指す。

従来の競馬は、歳を重ねた古馬によるヒート競走が主流であり、３歳馬しか出走する権利を持たないクラシック・レースの創設は、競馬の有り様を一変させた。ヒート競走とは、特に 18 世紀前半に主流であった、長距離かつ少頭数で行われる、上流階級の娯楽要素の

強い競走のことである。18 世紀後半に入り、競馬が近代競馬へと変化してゆく過程の中で、時代にそぐわないものになったが、1756 年にジョッキー・クラブがこの競走を真っ先に廃止している[1]。それ以降、競馬は、「長時間、長距離、少頭数」の競走形態から「短時間、短距離、多頭数」の競走形態へと変化してゆくが、このきっかけを作ったのがジョッキー・クラブであり、拍車をかけたのが、クラシック・レースの成立であった。

クラシック・レースの特徴として、まず年齢を制限したことが挙げられるであろう。３歳馬のみしか出走できないということは、経験よりも純粋に若駒の身体能力が問われる競走であった。競走に適した３歳馬の身体能力を最大限に発揮させ、「魅せる」スポーツとして観客に興奮を味わわせるためには、競走における詳細な条件設定が必要不可欠であり、様々な改定により競馬の近代スポーツ化が進み、公平さを求める変革が生まれていった。また、クラシック・レースは個々の馬が一生で一度しか挑戦することの出来ない競走であり、これらの競走に勝利するという栄冠は、ごく一部の競走馬に限られ、これらのレースの勝利馬は、引退後の種牡馬、繁殖牝馬としての価値が一気に高まり、その血統を後世に遺す権利を得ることになった。このことは、馬主側の意識転換をもたらした。馬主にとって、クラシック・レースの重要度は高くなり、特に、所有馬からダービーの勝ち馬を出すことは最大の名誉とされるようになった。多くの馬主が、極めて困難なダービー・オーナーへの道のりに挑んだが[2]、その名誉は希少性のためにさらに価値を増していった。クラシック・レースが、近代競馬形成期に誕生したことは、競馬が近代スポーツとして成長してゆく過程で生じた大きな変革であったことを示している。

では、当初からクラシック・レースの中で特に人気のあったダービーについて検証してゆく。第二章第一節で述べたように、第１回ダービーは 1780 年５月４日に行われたが、これは、同時期に創設されたセントレジャー、オークスと並んで、ジョージ３世の治世における記念すべき出来事であり、これらの競走は、後に権威ある国家的行事として成長してゆくことになる。そのダービーの開催初年度の登録馬は、36 頭を数えた[3]。登録馬すべてがレースに出走したわけではないが、多数の有力馬が一斉に競い合うレースの登場は、人気を博した[4]。第１回ダービーの詳細は、1779 年の『競馬年鑑』における開催予定情報に記載されており、そこには 1780 年のエプソム競馬春開催２日目に、登録料 50 ギニーのダービーステークスが３歳牡馬斤量８ストーン（約 50.8kg）、３歳牝馬斤量７ストーン 11 ポンド（約 49.4kg）、距離１マイルの条件のもとで行われ、1781 年も続けて開催される旨が記されていた[5]。性別の違いによって生じる不利益を解消するために、それぞれに細かい

斤量が設定されていること、一度限りではなく翌年以降も継続して行われる旨が記載されていることが注目される。

この記念すべき第１回ダービーを制した馬がダイオメドで、その馬主が、ジョッキー・クラブ幹事で、のちに最初の「ディクテイター・オブ・ザ・ターフ」として知られるようになったサー・チャールズ・バンベリーであった。彼は、クラシック・レースの生みの親とも言える存在であり、ダービーおよびセントレジャーの設立にあたってかなりの影響を及ぼし、ジョッキー・クラブの本拠地ニューマーケットにおける 2,000 ギニーと 1,000 ギニーも、彼と彼の仲間の幹事たちによって導入されたことは、先に指摘したとおりである。

（図５）フランシス・サルトリウス（Francis Sartorius）作「ダイオメド」（1780）

出典：David Oldrey, *The Jockey Club Rooms: A Catalogue and History of the Collection* (London, 2006), p.127.

ところで、ニューマーケットで、クラシック・レースが設立されたのは 19 世紀初頭のことで、エプソム、ドンカスターの後塵を拝していたかのように見える。このことが、ハギンズによるジョッキー・クラブの受動性や消極性に関する主張に繋がっている[6]。しかし、ヴァンプリューが指摘するように、ジョッキー・クラブの幹事サー・バンベリーが、ダー

ビーの創設に関わり、彼の所有馬が勝利を収めたことは、むしろ本拠地ではないエプソム競馬場に対して、ジョッキー・クラブが影響力を行使し、支配し始めたことを示すものでもある[7]。19 世紀初頭に創設されるニューマーケットにおける２つのクラシック・レースは、影響力拡大の結果として登場してくるものであるが、この点は後に論証する。

さて、ダービーとオークスが行われるエプソムの競馬はいつ始まったのか。1825 年にエプソムのある住人が記したこの町の歴史に関する著作によると、初めて定期的に開催されるようになった時期は定かではないが、1730 年以降は、毎年５月か６月に開かれていたとしている[8]。また、その後、エプソム競馬は長い間、毎年春と秋の２回開催されることになるが、その当時は、通例正午前の 11 時に競走が始まり、最初もしくは２番目のヒート競走の後、一団はたいてい午餐のために町へ戻り、彼らが午後に再び競馬場に集まった際、その日の競馬が終えられたと伝えられている[9]。

では、ジョッキー・クラブは、エプソム競馬をどのように伝えているだろうか。『競馬年鑑』の 1773 年の初版から、エプソム競馬の開催予定は掲載されていたが、そこには、1774 年の５月開催初日に、ハミルトン卿（Lord Spencer Hamilton）の３歳鹿毛牝馬スティラー（Stiller、父馬スター Star）とオケリー氏（Mr. O'Kelly）の３歳黒鹿毛牡馬（父馬オムニウム Omnium）のマッチ・レースが、それぞれ８ストーンと８ストーン７ポンド（約 54kg）の斤量、４マイルの距離で 100 ギニーを賭けて行われると記されている[10]。

初版の 1773 年『競馬年鑑』には、ジョッキー・クラブの本拠地であるニューマーケットの詳細な情報が掲載されていたものの、他の競馬場における開催情報は少なく、当時、ニューマーケットを含めても計 15 競馬場しか掲載されていなかった[11]。マッチ・レース１レースのみの記載とはいえ、初版から『競馬年鑑』に掲載された事実、およびハミルトン卿が著名な馬主で、かつ彼のおじであるハミルトン公（Duke of Hamilton）がジョッキー・クラブメンバーであった点を考慮すれば[12]、それだけエプソム競馬場がニューマーケットと同様に古い競馬の歴史を持ち、ジョッキー・クラブの揺籃期および初期発展期を通じて深い繋がりがあったと指摘できる。

また、版を重ねるごとに『競馬年鑑』におけるエプソム競馬の掲載情報は詳細なものになり、開催予定が掲載された競馬場の数も世紀転換期には 40 あまりになった[13]。そして、1840 年代には 50 を優に超えている[14]。これは、ジョッキー・クラブの勢力拡大を物語るが、有力クラシック・レースを抱えるエプソムの扱いは破格なもので、わずかな例外を除いて、常にニューマーケットに次ぐ二番目に掲載された[15]。

第二節　規則の改定と馬主の血統意識の変化

前節では、クラシック・レースの成立を通して、ジョッキー・クラブと２つのクラシック・レースが行われるエプソム競馬場との繋がりを述べた。ここでは、エプソムのクラシック・レースの規則改定が頻繁に行われたことに着目し、度重なる改定が競馬の近代スポーツへの移行を希求するものであったこと、また、それに伴う馬主の血統意識の変化について考える。

ダービーとオークスは、度々改定が加えられている。ダービーに関してみてみると、1782年の第３回ダービーにおいて、すでに改定がみられる。その内容は、「２着馬の馬主が賭け金から 100 ギニーを受け取る」というものであった[16]。多頭数の中での１着が重視されるとともに、２着馬の馬主にも配分を与えることで、分配による公平さが求められるようになったのである。1784 年の第５回ダービーでは、競走内容に関わる改定もなされている。それは、第１回から第４回までに適用されていた３歳牡馬斤量８ストーン、３歳牝馬斤量７ストーン 11 ポンド、距離１マイルの条件から、それぞれ８ストーン３ポンド（約 52.2kg）、８ストーン、１マイル半への変更である[17]。牡馬、牝馬ともに斤量が増え、距離が 1.5 倍に延長されており、スポーツとしての競走をより厳しいものにして、観客にアピールしようとしている。一方のオークスは、1779 年開催の第１回オークスにおいて、登録料 50 ギニー、３歳牝馬斤量８ストーン４ポンド（約 52.6kg）、距離１マイル半の条件であったが、1785 年に、競走における斤量が８ストーン４ポンドから８ストーンに減少されている[18]。これは、牝馬の身体条件を考慮した結果であろう。

ダービーとオークスは、創設後まもない時期だけでなく、その後も数年ごとに改定が加えられている。1795 年開催予定のダービー、オークス[19]、1796 年に開催予定のダービー、オークスにも[20]、『競馬年鑑』の中で改定が示唆されているが、創設初期のように、近代スポーツに不可欠な公正さを希求して、斤量の公平性、距離の適正具合、賞金額の見直しなどの変更が常に行われている。こうした中で、注目されるのは、1797 年のダービーに関してである。そこには、「賭け金は、ジョッキー・クラブの規則によってニューマーケットで設けられている不履行に対する同様の処罰の下で、オクセンデン（Oxenden）通り７番のウェザビー氏に、発走前もしくはオークスの際用意されるべきである」という記載がある[21]。同年のオークスにおいても、ダービーと同じ条件である旨が明記されている[22]。賭け金の不履行を許さないという、ジョッキー・クラブ主導での競馬の公正さを順守させる態度を確認できる。また、代理人としてウェザビー氏の名前がみられることも、特筆できる。先

に述べたように、『競馬年鑑』および『血統登録書』は、ウェザビーの商会によって発行されていた。競馬を行う際に極めて重要な賭けに関わる資金が、ジョッキー・クラブの代理人によって管理されていたという事実は、18 世紀末において、エプソム競馬場が、クラシック・レースの開催にあたって、規則面でもジョッキー・クラブの影響力を受けていたことを示している。

さらに 19 世紀に入ってからも、ダービー、オークスにおける改定は頻繁に行われた。創設初期にも増して、近代スポーツに不可欠な公正さを希求しているが、これは、グットマンが指摘する 7 つの特徴の中で、特に「平等性」と「合理化」がより徹底的に求められたと言える。また、同時に「貴族性」を見せるための努力もなされ、エプソムでは、1829 年に、身分の高い観客しか入場できない 5,000 人収容のグランド・スタンドが竣工された[23]。

1800 年代に、ダービーでは三度、オークスでは二度の斤量改定が行われ、1810 年代に、2,000 ギニーで二度、1820 年代と 1830 年代に、セントレジャーでそれぞれ一度、斤量の改定が行われた[24]。当時の競馬には、牝馬に限定された競走や、年齢の違いによって斤量にある一定の差が設けられた競走など、様々な形の競走があったが、ダービーのように牡馬も牝馬も 3 歳馬という条件の下で出走できる競走ならば、性別の違いによって生じる体格差等の有利不利を解消するために斤量差を設け、常にそれが適切かどうか微調整する必要性があった。競走における微調整が行われた後は、競馬の担い手である上流階級の「貴族性」を示す、観客のための改革が行われた。特に、ジョッキー・クラブの幹事であったジョージ・ベンティンク卿の 19 世紀中頃における一連の改革、すなわち、発走遅延に対する罰金制度、着順掲示板の導入、所定の場所での装鞍やスタンド前で馬を歩かせる行為などは、それを意識したものであった[25]。

ところで、クラシック・レースは、サラブレッドを所有する馬主たちの血統意識をより明確にする役割を担った。1780 年のダービーから 15 回の開催を経た 1794 年版の『競馬年鑑』の種牡馬広告を見てみると、72 頭が掲載され、ダービー馬は 6 頭を数えている[26]。当時、まだ種牡馬入りしていないダービー馬がいたことを考慮すると、その割合は極めて高い。その 6 頭とは、ダイオメド、ヤングエクリプス（Young Eclipse、第 2 回）、サルトラム（Saltram、第 4 回）、ノーブル（Noble、第 7 回）、サーピーターティーズル（Sir Peter Teazle、第 8 回）、スカイスクレーパー（Skyscraper、第 10 回）で、それぞれ種付け料は 10 ギニー、30 ギニー、10 ギニー、5 ギニー、10 ギニー、5 ギニーであった[27]。当時、2 ギニーや 3 ギニーが平均的な種付け料であったことを考慮すると[28]、ダービー馬の種付け

料が、かなり高価だったことが分かる。中でも、もともと良血であったヤングエクリプスの 30 ギニーは種牡馬広告中最高額であった。

19 世紀に入ると、クラシック・レース勝ち馬を種牡馬として重宝する傾向がさらに強まった。例えば、19 世紀前半の 1827 年版『競馬年鑑』の種牡馬広告では、モーセ（Moses、1822 年の第 43 回ダービー馬）やミドルトン（Middleton、1825 年の第 46 回ダービー馬）といったダービー・ホースの名前がみられ、種付け料も高額であった[29]。19 世紀中頃になると、さらにその傾向は強まり、特に、『競馬年鑑』が *Races to Come*（競走予定版）と *Races Past*（競走結果版）に分冊された年である 1847 年の『競馬年鑑（競走予定版）』の種牡馬広告では、1834 年の第 59 回セントレジャーを制したタッチストン（Touchstone）の種付け料が、以下のように、最高額の 30 ソヴリンになっている[30]。

「タッチストン、1 ソヴリンの馬丁の手数料を含めて一牝馬（a mare）あたり 30 ソヴリン。牝馬の総数は 40 に限定されるだろう。干し草、牧草は週に 9 シリング。穀類は市場価格。全ての費用は、牝馬が連れ去られる前に支払われるべきである。」

（図６）タッチストンの四代血統表

父 Camel	父父 Whalebone	父父父 Waxy	父父父父 Pot8o's
			父父父母 Maria
		父父母 Penelope	父父母父 Trumpator
			父父母母 Prunella
	父母 Selim Mare	父母父 Selim	父母父父 Buzzard
			父母父母 Alexander Mare
		父母母 Maiden	父母母父 Sir Peter
			父母母母 Phoenomenon Mare
母 Banter	母父 Master Henry	母父父 Orville	母父父父 Beningbrough
			母父父母 Evelina
		母父母 Miss Sophia	母父母父 Stamford
			母父母母 Sophia
	母母 Boadicea	母母父 Alexander	母母父父 Eclipse
			母母父母 Grecian Princess
		母母母 Brunette	母母母父 Amaranthus
			母母母母 Mayfly

出典：日本軽種馬協会運営の JBIS サーチ http://www.jbis.or.jp/horse/0000338684/より筆者作成（2013 年 1 月 9 日参照）。

図註：例えば、母母という表記は母方の祖母（二代前）を、母母父という表記は母方の曽祖父（三代前）を指している。

ここで、タッチストンの血統を『血統登録書』から紐解いてみると、ウェストミンスター卿（Ld Westminster）に交配された 1831 年生まれの黒鹿毛の牡馬で、父馬はカメル（Camel）、母馬は 1826 年にグロヴナー卿（Lord Grosvenor）が交配したバンター（Banter）であった[31]。『血統登録書』では、ある繁殖牝馬が、誰に、いつ、どの種牡馬と交配され、何という競走馬が誕生したかという情報が掲載されており、ここに掲載されている馬がサラブレッドである。

前掲の図 6 は、タッチストンの四代血統表である。タッチストンの牝系を辿ると、母バンターの父マスターヘンリー（Master Henry）、母の母ボアディセア（Boadicea）、母母父アレクサンダー（Alexander）、母母母ブルネッテ（Brunette）、母母母父アマランサス（Amaranthus）、母母母母メイフライ（Mayfly）と続いているが、さらに一代さかのぼると、メイフライの父マッチェム（Matchem）、母はアンカスタースターリング（Ancaster Starling）で、18 世紀後半の大種牡馬マッチェムの名があることを強調しておきたい[32]。一方、タッチストンの牝系を辿ってみると、父カメルは、エグレモント卿（Ld Egremont）によって交配された 1822 年生まれの黒鹿毛馬で、その父はホエールボーン（Whalebone）、母はセリムメア（Selim Mare）であった[33]。

タッチストンの父の父にあたるホエールボーンは、1810 年の第 31 回ダービー馬である。グラフトン公（Duke of Grafton）に交配され 1807 年に生まれた黒鹿毛馬で、父は 1793 年の第 14 回ダービー馬ワキシー（Waxy）、母はペネロピ（Penelope）であった[34]。1780 年に生まれた鹿毛馬のワキシーは、サー・F・プール（Sir F. Poole）によって交配されたが、その父は 18 世紀後半を代表する名種牡馬ポテイトーズ（Pot8o's）、母はマリア（Maria）で[35]、これらの事実から、タッチストンがいかに名血であったかがわかる。さらに付け加えて言うならば、ポテイトーズの父は今日のサラブレッドに多大な影響を残している大種牡馬エクリプスであり[36]、タッチストンの血統をさらに強く際立たせていると言えよう。

このタッチストンの血は、子孫へと広く受け継がれた。同じ 1847 年の『競馬年鑑（競走予定版）』には、彼の産駒で 1844 年の第 65 回ダービー馬オーランド（Orlando）の種牡馬広告が、「ニューマーケットのバロー（Barrow）氏の繁殖場で、オーランド（1844 年のダービー勝ち馬）、父タッチストン、母ヴァルチャー（Vulture）、それぞれ 10 ソヴリンで限られた数の牝馬に交配されるだろう、馬丁には 10 シリング」と掲載されていた[37]。この記事から、タッチストンの良血を受け継ぎ、ダービーに勝利したオーランドの種牡馬としての情報を得ることが出来るが、ここで重要な点は、「限られた数の牝馬」にしか交配

されない、という点である。先に述べたタッチストンの種牡馬広告においても、その数は40に限定されていたが、当時の良血種牡馬の中には種付け数に制限が設けられている場合が多かった[38]。制限の主たる目的は不明であるが、おそらく良血の枠組みを守るためであったと思われる。

（図７）J・F・ヘリング（J. F. Herring）作「タッチストン」（1834）

出典：David Oldrey, *The Jockey Club Rooms: A Catalogue and History of the Collection* (London, 2006), p.124.

当時の『競馬年鑑』の広告をみると、掲載された種牡馬の多くは、サラブレッドと雑種（half-bred、半血馬と訳されることもある『血統登録書』に掲載されていない牝馬を祖先に持つ馬）の繁殖牝馬両方に掛け合わせることが可能であり、それぞれに明確な相違のある種付け料が設定されていた[39]。雑種の繁殖牝馬でも、ある一定の種付け料を支払えば、多くのサラブレッド種牡馬と交配可能であったが、タッチストンや、その子オーランドのように、長きにわたりクラシック・レース勝ち馬を輩出している良血サラブレッド種牡馬の場合、その交配相手には、サラブレッドの繁殖牝馬のみが選ばれ、その良血を後世に受け継ぐことが企図された[40]。クラシック・レースは、その競走馬の血を歴史に遺すかどうかを左右する極めて重要な競走であった。

第三節　エプソム競馬場の掌握とニューマーケットの「聖地化」

これまで、ジョッキー・クラブがエプソムのクラシック・レース創設に関わり、登録に際しても一定の影響力を持っていたことを指摘した。本節では、まずジョッキー・クラブによるエプソム競馬場の完全な掌握について述べてゆくが、その際、幹事職にどれほどジョッキー・クラブメンバーが就任していたかが重視される。ハギンズは、1830 年代までに、ジョッキー・クラブの幹事たちが、エプソムにおいて幹事としての役目を務めるようになったと指摘しているが[41]、1825 年時点でのエプソム競馬場の幹事の一人が、ダービーとオークスの創設者である第 12 代ダービー伯エドワード・スミス・スタンリーで、もう一人がエスクワイア層の庶民院議員ウィリアム・ノーゼイ（William Northey）であったことは分かっている[42]。第 12 代ダービー伯の父は、ジョッキー・クラブの初期メンバーの一人であったし、彼自身、1776 年に祖父から伯爵位を継いだときには、すでにクラブ会員であったと言われている[43]。一方のウィリアム・ノーゼイも、エスクワイア層で幹事に就任している点に注目できるが、ジョッキー・クラブのメンバーであったとされており[44]、当時２名いたエプソム幹事職にジョッキー・クラブの会員が就任していたことになる。

この段階で、エプソムをかなりの程度に掌握していたと言えるが、19 世紀中頃になると、その傾向はさらに強まり、ジョッキー・クラブの現職の幹事がエプソムの幹事職を兼務している。例えば、1847 年には、アンソン大佐（Col. Anson）、ジョージ・ベンティンク卿、イグリントン伯（Earl of Eglinton）の現職３名と、別のジョッキー・クラブメンバー１名とが、エプソム競馬場の４名の幹事職すべてを掌握している[45]。また、この年のエプソム競馬開催にあたって、「エプソムでのすべての競走における馬のスタート条件や、競走中に生じるすべての論争に関する質問は、さしあたり競走の幹事によって、もしくは指名されたジョッキー・クラブのメンバーによって裁定され、その裁定は絶対的である」という一文も明記されている[46]。これらの事実から、クラシック・レースを含めたエプソム競馬場で行われるすべての競走が、この時期すでにジョッキー・クラブによってほぼ完全に掌握されていたと言える。

ここで注目すべきは、こうした幹事職に就いた人々の中で、指導力を発揮したのが、ジェントルマン層であったことである。例えば、アンソン大佐は長らくグレートヤーマス（Great Yarmouth）選出の議員であったが[47]、その議席は、兄の T・W・アンソンが父であるアンソン子爵の爵位を継いだために、譲り受けたものであった[48]。そして、中でも、ジョージ・ベンティンク卿は、偉大な名声、富、高貴な繋がりを提供しうるというあらゆ

る利点を保証されていた第４代ポートランド公爵の三男であった[49]。ともに貴族の家に生まれながら、長男でなかったために爵位を継ぐことができなかった人々であったが、「貴族らしさ」をアピールすることのできる競馬界で活躍した。

ところで、ジョッキー・クラブによるエプソムの掌握は、ダービーとオークスの登録自体にも及んでいた。表５で示したように、創設以来、登録頭数が非常に多く、確実にその数を増やしていき、1847 年には、ダービー189 頭、オークス 153 頭が登録されている[50]。登録馬がすべて出走できたわけではないが、おびただしい数の馬が、ダービー、オークスを目指していたことが理解される[51]。

（表５）ダービーとオークスにおける登録頭数の推移

年度	1779年	1780年	1795年	1800年	1814年	1828年	1837年	1847年
ダービー	—	36	45	33	51	89	133	189
オークス	17	17	42	24	44	78	93	153

出典 : *Racing Calendar*, Vol.6, 1778, p.244; *Racing Calendar*, Vol.7, 1779, pp.238-240; *Racing Calendar*, Vol.22, 1795, pp.228-232; *Racing Calendar*, Vol.27, 1800, pp.199-202; *Racing Calendar*, Vol.41, 1814, pp.238-242; *Racing Calendar*, Vol.55, 1828, pp.288-293; *Racing Calendar*, Vol.64, 1837, pp.296-304; *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, pp.57-62, 64-68 より筆者作成。

19 世紀中頃、例えば 1847 年のダービーを取り上げると、189 頭の登録馬のうち、明らかな上流階級馬主による登録馬は 73 頭で全体の約 38.6%を占めており、この競走に登録した馬主 103 名のうち、明らかな上流階級の馬主は 26 名で全体の約 25.2%であった[52]。そのうち、ジョッキー・クラブの会員は約 84.6%で、上流階級の一人の馬主が複数の馬を登録していたこともわかる[53]。実際に出走した馬は 32 頭で、ペドレイ氏（Mr. Pedley）のコサック（Cossack）が勝った[54]。このレースには、リッチモンド公（Duke of Richmond）やグラスゴー卿（Lord Glasgow）、アンソン大佐などが競走馬を出走させていた[55]。

第二章第二節で述べたように、この時期、富裕化した多くの中産階級が馬主として競馬に参加するようになっていたため、馬主の数の上では、上流階級の馬主は中産階級の馬主に圧倒される形となっていた。しかし、1847 年のダービー登録馬 189 頭のうち、ジョッキー・クラブ会員の登録馬は 68 頭で、約 36%を占めており、かなりの割合を占めていることがわかる[56]。

さて、ここで注目すべきは、上流階級の馬主のうちで、先述のように幹事職を担ってい

たジェントルマン層の比率はどうであったかである。ジョッキー・クラブの会員の中でも、特に、ジョージ・ベンティンク卿やアンソン大佐のような、爵位はないが、高貴なジェントルマンとして幹事職を担い、自らも馬主として競馬の社交空間で活躍した人々を分析する必要がある。エプソム競馬場に関して、当時の『絵入りロンドン・ニュース』（*The Illustrated London News*）では、「何千もの美しい女性たちと立派な男性たちで、相変わらずきらきら輝いていた」と表現されているが[57]、1847 年におけるベンティンク卿とアンソン大佐のダービー登録馬は 24 頭で、全体の約 12.7%を占めていた[58]。彼らが、ジョッキー・クラブの幹事職を担い、競馬改革に勤しんでいたことの意味は大きい。

19 世紀中頃までに、人気のダービーとオークスをジョッキー・クラブがほぼ掌握し、詳細な条件が付与された競走を管理する競馬統括団体としての成熟度を高めたことを示してきたが、この時期、ジョッキー・クラブが置かれたニューマーケットの二つのクラシック・レースはどうであっただろうか。

スポーツ史家のデニス・ブレイルスフォード（Dennis Brailsford）が、「ニューマーケットでは、確実に徒歩の観客がその吹きさらしの開けた荒野から積極的に閉め出されていた」と指摘しているように[59]、ニューマーケットの競馬は、エプソムに比べて上流階級が主体であった。事実、19 世紀に入ってから創設された 2,000 ギニーと 1,000 ギニー、この２つのクラシック・レースでさえ、19 世紀半ばの段階で、その登録者は大半がジョッキー・クラブ会員と思われる上流階級の人々であった[60]。ここでも、「ミスター」の敬称が用いられている馬主が中産階級であるか否かの切り分けは難しいが、クラブ会員のための競馬場という色彩が濃い。

（表６）1847 年の 2,000 ギニー、1,000 ギニーにおける登録内訳

	JC上流階級馬主	上流階級馬主	中産階級馬主	計
2,000ギニー	11	1	6	18
1,000ギニー	13	0	9	22

出典：*Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, pp.7-9 より筆者作成。

例えば、表６に見られるように、1847 年の 2,000 ギニーでの登録者は 18 名で、そのうちジョッキー・クラブ会員とみられる上流階級馬主は 11 名、1,000 ギニーでの登録者は 22 名で、そのうちジョッキー・クラブ会員とみられる上流階級馬主は 13 名である。彼ら

が、登録者全体の半数程度を占めている。19 世紀中頃においても、ニューマーケットでは、競馬本来の「貴族的」スポーツとしての側面が色濃いことが分かる。ヴィクトリア朝時代において、この時代を代表する小説家アンソニー・トロロープ（Anthony Trollope）が、「ニューマーケットは、マホメットの信奉者たちが、メッカのミナレットの方向に目を向ける際に表すのと同様に、すべての真の競馬愛好者が、忠誠を持って誓いを立てる聖地である」と記しているほどである[61]。

クラシック・レース以外でも、ニューマーケットの「貴族性」がエプソムに比べて際立つことは、マッチ・レースが残っていた点である。1847 年 4 月 5 日（月）のニューマーケット競馬の開催予定を見てみると、その日は全 7 レースが行われたが、第 6 レースと最終第 7 レースは、それぞれガリー氏（Mr. Gully）のピュロスザファースト（Pyrrhus the First）対オブライエン氏（Mr. O'Brien）のザトラバーサー（The Traverser）、グレヴィル氏（Mr. Greville）のアラーム（Alarm）対ベドフォード公（Duke of Bedford）のパラゴーン（Paragone）のマッチ・レースであった[62]。ちなみに、ピュロスザファーストは 1846 年のダービー馬である。

先にも述べたが、エプソム競馬場の例のように、18 世紀後半においては、ニューマーケット以外の競馬場でもマッチ・レースが比較的盛んに行われていたが、19 世紀中頃になると、ほとんどの競馬場で消滅していた[63]。それに対し、ニューマーケットにおいてのみ、主流とは言えないまでも、重要なレースとして 19 世紀中頃までマッチ・レースが存在していた。競馬の中の「貴族的」要素が、依然として重視されていたと指摘できる。特に、ダービー馬をマッチ・レースで競わせる意味は大きい。スポーツ史家エリック・ダニング（Eric Dunning）は、12 世紀から 16 世紀にかけて、騎士の馬上試合が文明化の過程を経験し、「実際の」暴力よりもむしろ「模擬的な」暴力を伴うページェントに変容したことを指摘しているが[64]、マッチ・レースの 1 対 1 で自らが所有する馬を競わせることは、そうした騎士道精神を時代に合う形で残したものであったと言えよう。

その一方で、1847 年 4 月 5 日（月）の第 1 レースに適用された馬齢ごとの詳細な斤量設定や、第 2 レースから第 5 レースに見られる性別による斤量差および種牡馬、繁殖牝馬の活躍状況に応じて減量を加えるといった様々な特殊条件のように[65]、競走に微調整を加えることで、競走を公平に行い、精緻な「近代的」スポーツとして競馬を高いレベルに押し上げていたニューマーケット像がある。

「貴族的」な部分と「近代的」な部分は一見すると相容れないもののように見えるが、

19 世紀中頃のクラシック・レースでは、それらが融合する形で競走が行われていた。特に、ニューマーケットでは、そうした傾向が顕著であった。ダービーというクラシック・レースを抱えたエプソム競馬場が、公開性を増したのに対して、ニューマーケットは、競馬の本来の「貴族的」な部分と「近代的」な部分が融合した競走を行い、ジョッキー・クラブの権威の高揚とともに、ますます「聖地化」したのである。

【註】

---

1 この改革は、ジョッキー・クラブ・プレートと呼ばれるクラブメンバーの所有馬によって行われる競走において行われた。Wray Vamplew, *op. cit.*, p.79.

2 1830 年代から 1840 年代にジョッキー・クラブ幹事として活躍したジョージ・ベンティンク卿や、彼のいとこでジョッキー・クラブ会員のチャールズ・グレヴィル（Charles Cavendish Fulke Greville, 1794-1865）も、ダービー・オーナーにはなれなかった。彼らの落胆を示すものとして、以下が挙げられる。Benjamin Disraeli, *op. cit.*, p.539; Christopher Hibbert (ed.), *Greville's England: Selections from the Diaries of Charles Greville, 1818-1860* (London, 1981), p.108.

3 *Racing Calendar*, Vol.7, 1779, pp.238-239.

4 例えば、1795 年の第 16 回ダービーに出走したのは、登録された 45 頭のうち 11 頭であった。*Racing Calendar*, Vol.23, 1796, pp.29-30.

5 *Racing Calendar*, Vol.7, 1779, p.238.

6 Mike Huggins, *op. cit.*, pp.174-203.

7 Wray Vamplew, *op. cit.*, p.81.

8 An Inhabitant, *Some Particulars Relating to the History of Epsom, Compiled from the Best Authorities; Containing a Succinct and Interesting Description of the Origin of Horse Racing, and of Epsom Races, with an Account of the Mineral Waters Match, and the Two Celebrated Places of Durdans and Nonsuch, &c. &c.* (Epsom, 1825), p.106.

9 *Ibid.*

10 *Racing Calendar*, Vol.1, 1773, p.326.

11 *Ibid.*, pp.247-332.

12 Robert Black, *The Jockey Club and Its Founders: In Three Periods*, pp.31-32.

13 *Racing Calendar*, Vol.28, 1801, pp.191-286.

14 1847 年の『競馬年鑑（競走予定版）』では、その年の 56 競馬場の開催予定が掲載されている。*Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, pp.1-339.

15 1786 年の『競馬年鑑』ではニューマーケット、ヨークに次いでエプソムは三番目に掲載されている。*Racing Calendar*, Vol.14, 1786, pp.203-233.

16 Louis Henry Curzon, *The Blue Ribbon of the Turf: A Chronicle of the Race for the Derby* (Philadelphia, 1890), p.233.

17 *Ibid.*, p.236.

18 *Racing Calendar*, Vol.7, 1779, p.239. オークスでは、創設当初から、「競走時期に先立つその年のジョッキー・クラブ開催において指名された 3 歳牝馬」という文言があり、ジョッキー・クラブの関与が強かったことがわかる。斤量の変更については、以下を参照のこと。Michael Church, *Dams of Classic Winners, 1777-1993* (London, 1994),

p.17.

[19] *Racing Calendar*, Vol.22, 1795, pp.228-232.

[20] *Racing Calendar*, Vol.23, 1796, pp.214-218.

[21] *Racing Calendar*, Vol.24, 1797, p.218.

[22] *Ibid.*, p.220.

[23] George Measom, *The Official Illustrated Guide to the Brighton and South Coast Railways and All Their Branches, Including a Description of the Crystal Palace at Sydenham and a Topographical Account of the Isle of Wight* (London, 1853), p.19.

[24] Michael Church, *op. cit.*, pp.16-17.

[25] John Kent, *op. cit.*, pp.296-297.

[26] *Racing Calendar*, Vol.22, 1795, pp.329-355.

[27] *Ibid.*, pp.334, 343, 347, 351, 355.

[28] *Ibid.*, pp.329-355.

[29] *Racing Calendar*, Vol.55, 1828, p.520.

[30] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, p.409.

[31] *General Stub Book*, Vol.4, 2nd (ed.), 1840, p.31.

[32] *Ibid.*

[33] *General Stub Book*, Vol.3, 3rd (ed.), 1855, p.231.

[34] *Ibid.*, p.193.

[35] *General Stub Book*, Vol.1, 4th (ed.), 1858, p.332.

[36] *Ibid.*, pp.387-388.

[37] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, p.404.

[38] 1847 年の『競馬年鑑（競走予定版）』では、タッチストンの子で 1843 年の第 35 回 2,000 ギニーと第 64 回ダービーに勝ったコザーストン（Cotherstone）40 頭、1823 年の第 44 回ダービー馬エミリウス（Emilius）25 頭、タッチストンの全弟（父も母も同じ場合、全兄、全姉、全弟、全妹と表現する、母のみ同じ場合は、半兄、半姉、半弟、半妹である）で、1840 年の第 65 回セントレジャー馬ランスロット（Launcelot）35 頭と、良血のクラシック・レース勝ち馬の種牡馬広告に、限られた数のサラブレッド繁殖牝馬にしか種付けを行わない旨が記されていた。*Ibid.*, pp.397, 398, 401.

[39] 雑種の繁殖牝馬に交配する場合、サラブレッドの繁殖牝馬に対する種付け料よりも安く、およそその半値以下に設定されていた。*Ibid.*, p.394.

[40] 種牡馬入りしてすぐの 1847 年のオーランドの種付け料は、10 ソヴリンと平均的であったが、活躍馬を輩出し始めた 1851 年の『競馬年鑑（競走予定版）』では、15 ソヴリンに引き上げられた。*Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.79, 1851, p.409. この年、オーランドの産駒テディントン（Teddington）が、第 72 回ダービーを制した。

[41] Mike Huggins, *op. cit.*, p.180.

[42] An Inhabitant, *op. cit.*, p.109.

[43] David Oldrey, *The Jockey Club Rooms: A Catalogue and History of the Collection* (London, 2006), p.109.

[44] Robert Black, *The Jockey Club and Its Founders: In Three Periods*, p.179.

[45] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, pp.56-68, 418.

[46] *Ibid.*, p.56.

[47] Michael Stenton, *Who's Who of British Members of Parliament, Vol.1, 1832-1885* (Hassocks, 1976), p.9.

[48] John Henry Druery, *Historical and Topographical Notices of Great Yarmouth in Norfolk and its Environs, Including the Parishes and Hamlets of the Half Hundred of Lothingland in Suffolk* (London, 1826), p.356.

[49] Chester Kirby, *The English Country Gentleman: A Study of Nineteenth Century Types* (London, 1937), p.16.

[50] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, pp.57-62, 64-68

[51] 例えば、1846 年の第 67 回ダービーに出走したのは、登録馬 193 頭のうち 27 頭であった。*Racing Calendar*, Vol.74, 1846, pp.66-67.
[52] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, pp.57-62, 418.
[53] *Ibid.* 同年のオークスにも同様の傾向があり、153 頭の登録馬中、明らかな上流階級馬主によるものは 58 頭で全体の約 37.9%、馬主 98 名のうち明らかな上流階級馬主が 30 名で全体の約 30.6%であった。この年のオークスに登録していたジョッキー・クラブ会員は、25 名であった。*Ibid.*, pp.64-68, 418.
[54] Louis Henry Curzon, *op. cit.*, p.318.
[55] *Ibid.*
[56] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, pp.57-62, 418.
[57] *The Illustrated London News*, Vol.1, No.3, 1843, p.40.
[58] ベンティンク卿は、1847 年のダービーで、一人の馬主としては最多の 18 頭を登録していた。*Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, pp.57-58.
[59] Dennis Brailsford, op. cit., p.43.
[60] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, pp.7-9.
[61] Anthony Trollope, *British Sports and Pastimes, 1868* (London, 1868), p.64.
[62] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, p.2.
[63] 1847 年の『競馬年鑑（競走予定版）』におけるニューマーケット以外の競馬場でのマッチ・レースは、ノーサンプトン・パイチリー・ハント（Northampton and Pytchley Hunt）とウィンチェスター（Winchester）のそれぞれ 1 レースのみである。*Ibid.*, pp.1-339.
[64] エリック・ダニング（大平章訳）『問題としてのスポーツ―サッカー・暴力・文明化』法政大学出版局、2004 年、89–90 頁。
[65] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, pp.1-2.

第二部

競馬によるネットワークの進展

第四章　ジョッキー・クラブの後期発展期

19 世紀に入り、競馬に上流階級以外の人々が参加するようになると、ジョッキー・クラブは、本来の「貴族的」な要素をさらに強化するとともに、統括団体としては一般を対象としたスポーツ化を推進した。そして 19 世紀中頃には、競馬は「貴族的」かつ「近代的」なスポーツへと昇華する段階を迎えた。この時期の競馬場は、上流階級の華やかな社交空間として機能し、同時に、他の階級に合理的娯楽を与えるための様々な改革がなされた。

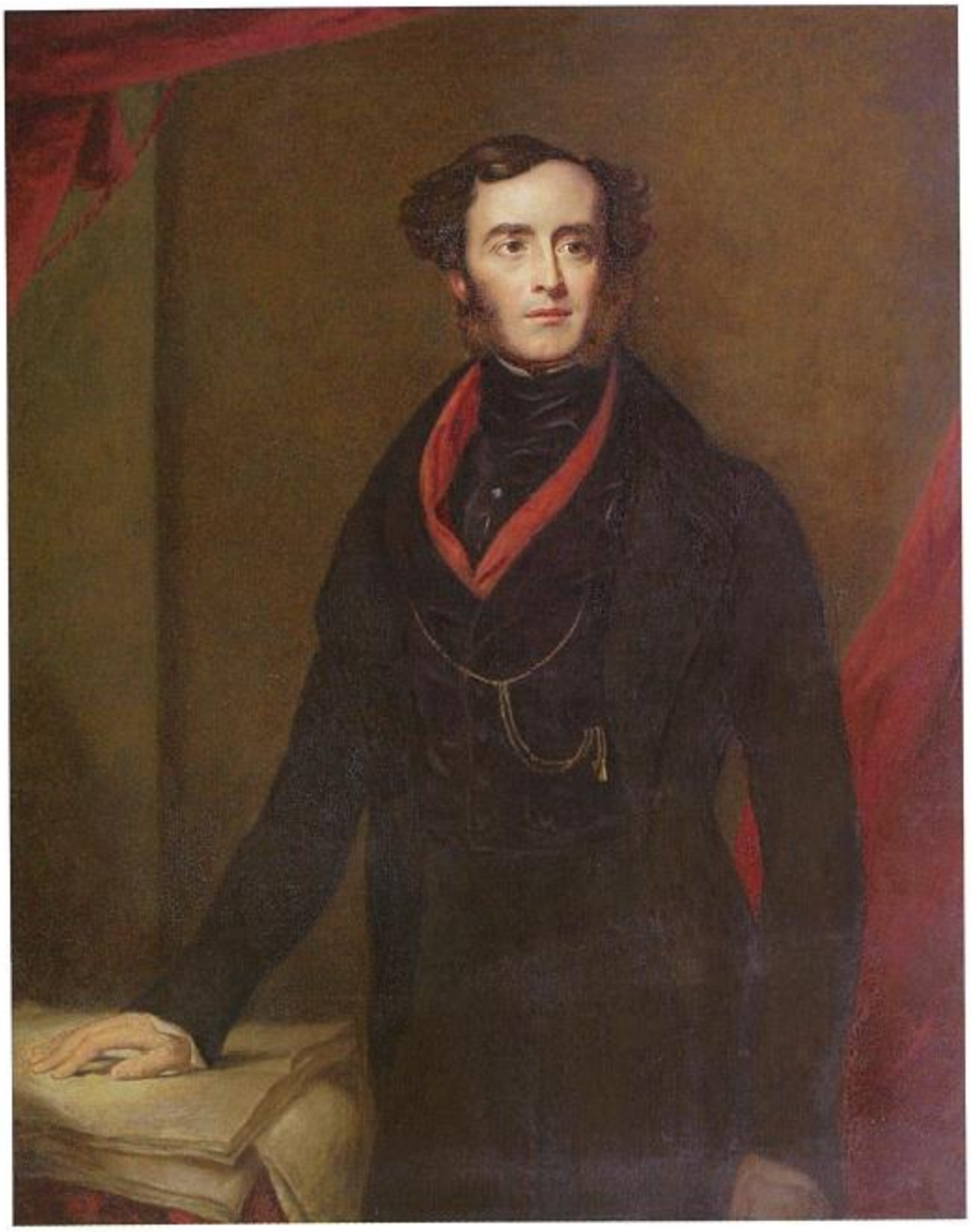
こうしたジョッキー・クラブの改革の試みは、本拠地ニューマーケットや、ジョッキー・クラブが掌握したエプソムのような他の中央の競馬場のみならず、その影響力をイギリス全土の地方競馬場へ及ぼそうとするものであった。中央の競馬場で創設されたクラシック・レースと類似する競走が、地方でも開催されるようになったこと、時代に適合させる競馬改革を示す合理的な競馬施行規則の拡大、これらによって広大なネットワークが構築されていった。前章で論じたように、ニューマーケットは、こうした改革の指導的役割を担う存在として、ますます聖地的な要素を見せるようになった。

本章では、ニューマーケットと地方競馬場の関係を検証するが、そのために、地方競馬場でありながら、ニューマーケットの近代化の実験的競馬場として機能し、地方への影響力拡大のモデルケースと言える存在であったグッドウッド競馬場を中心に考察する。また、それは 19 世紀中頃を代表するジョッキー・クラブ幹事、ジョージ・ベンティンク卿主導による改革を考察することでもある。なぜなら、彼は公平性やエンターテイメント性を重視した、競馬を観客に「見せる」と同時に「魅せる」ための競馬改革を、まずグッドウッド競馬場で行っているからである。

第一節　グッドウッド競馬場の開設と進展に見る地方への競馬ネットワークの拡大

グッドウッド競馬場は、チチェスター（Chichester）の北、サセックス・ダウンズ（Sussex Downs）にあり、ここでの最初の公式の競馬は、揺籃期からジョッキー・クラブのメンバーであった第３代リッチモンド公（3rd Duke of Richmond）の私有地で 1802 年に開催された。そして、ジョージ・ベンティンク卿とともに 19 世紀中頃における諸改革を実施したのが、彼の又甥で、ジョッキー・クラブのメンバーであった第５代リッチモンド公チャールズ・ゴードン・レノックス（Charles Gordon-Lennox, 5th Duke of Richmond, 1791-1860）である[1]。

（図８）サミュエル・レーン（Samuel Lane）作「ジョージ・ベンティンク卿」



出典：David Oldrey, *The Jockey Club Rooms: A Catalogue and History of the Collection* (London, 2006), p.149.

1801 年版の『競馬年鑑』には、グッドウッド競馬の開催予定が掲載されている。この『競馬年鑑』には、グッドウッドを含めて、42 の競馬場の開催予定が掲載されていた[2]。また、この版における『競馬年鑑』の定期購読者は、1,058 名であり、その内グッドウッド競馬

場の地元サセックスでは 19 名であった[3]。同じ年、例えばロンドンでは 163 名、ニューマーケットがあるサフォークは 23 名、エプソムがあるサリー（Surrey）は 41 名で、地方の代表的なヨーク競馬場があるヨークシャーでは、62 名の購読者を数えていた[4]。中央のニューマーケットを擁するサフォークが 23 名という点を考慮すれば、19 名は決して少ない数ではない[5]。この数が、ベンティンク卿時代末の 1846 年には、定期購読者数 1,308 名となり、先のそれぞれの内訳は、サセックス 34 名、ロンドン 261 名、サフォーク 37 名、サリー43 名、そしてヨークシャーが 99 名であった[6]。サセックスの定期購読者数は増加し、サフォークやサリーに匹敵しようかという成長を見せたことが理解できよう。下記の表 7 では、ジョージ・ベンティンク卿時代における『競馬年鑑』の定期購読者層の分類を試みた。

（表 7）1836 年版および 1846 年の『競馬年鑑』における定期購読者層の分類

年度	1836年版	1846年
敬称あり	167	142
エスクワイア（Esq.）層	497	449
士官など	46	47
ミスター（Mr.）層	588	561
団体	32	54
海外購読者	35	55
計	1,365	1,308

出典：*Racing Calendar*, Vol.64, 1837, pp.vii-xxiv; *Racing Calendar*, Vol.74, 1846, pp.vii-xxiv より筆者作成。

さて、グッドウッド競馬は、リッチモンド公家の土地で開催されたものであるため、当然ながらその影響下にあったが、彼らの貴族的ネットワークと、地元の有力者との密接な繋がりのもとで開催されたことに特色がある。ここで、再び『競馬年鑑』を紐解いてみよう。最初の 1801 年版の『競馬年鑑』には、「グッドウッド競馬、1802 年 4 月 26 日月曜日開催予定」とあり、2 名の幹事の名前とともに、8 つの競走予定が記されている[7]。その最初のレースが重視されるが、このレースに登録したのは 7 名で、注目すべきは、リッチモンド公やエグレモント卿（Ld Egremont）の名前とともに、プリンス・オブ・ウェールズの名前が記されていることである[8]。彼は後のジョージ 4 世で、先に述べたように、ジョッキー・クラブのメンバーであったといわれている。記念すべき最初のレースに、王族や貴

族が登録していることから、グッドウッドが王族や貴族の競馬場で、ジョッキー・クラブの手による競馬場であったことが、まずは理解される。

また、この競走には、「ミスター」としか称されない４名が登録している。そのうち、シェイクスピア氏（Mr. Shakespear）とバインドロス氏（Mr. Byndloss）は、1801 年版『競馬年鑑』の定期購読者一覧に、サセックスの購読者として同姓の人物がいることから、グッドウッド競馬場がある地元の有力者であろう[9]。地方の競馬場では、有力者の庇護によって競馬が開催されることが通例であり、競馬史家ヴァンプリューも、グッドウッド競馬場を引合いに出している[10]。王族や貴族に支えられ、なおかつ地域の有力者にも強力に支持されていたグッドウッドの様子は、その開催幹事を地元の名士であったリッチモンド公家のレノックス少将（Major-General Lenox）が務めていたことからも理解されよう[11]。やがて、グッドウッドは、「壮麗な（glorious）」グッドウッドと呼ばれるイギリス社会における主要競馬場へと成長し、地方競馬のモデルとなっていくが、単なる一地方競馬場ではなく、貴族的ネットワークと地元のカントリー・ジェントルマンとの融和を図る理想的な競馬場として、ジョッキー・クラブが位置づけていたことがわかる。

次に、1801 年版の『競馬年鑑』に掲載された開催予定競走についてだが、重要なことは、近代性を示すステークス競走が重視されていること、また貴族性を色濃く残すマッチ・レースも行われている点である。先の最初のレースは、登録料 10 ギニー、距離３マイルのスウィープステークスであった[12]。これは、勝ち馬の馬主が、全出走馬の馬主から集まった登録料を総取りする競走のことである。従来、競馬は「長時間、長距離、少頭数」で行われるのが基本であったが、18 世紀後半に入り、ジョッキー・クラブが先頭に立って近代競馬を確立していくにあたって、「短時間、短距離、多頭数」の競走形態が目立つようになった。その際、重宝されたのがこのステークス競走で、18 世紀末から創設され始める３歳馬のみによるクラシック・レースもこのステークス競走の一種である。

この他、初年度のグッドウッド競馬では、他のスウィープステークスが１レース、優勝馬にプレートが贈られるプレート競走が６レース、『競馬年鑑』上で開催予定競走として掲載されていた[13]。地域色を示すものとして、これらのプレート競走のうち、２つにシティ・オブ・チチェスター（the City of Chichester）の名前がみられることが特筆される[14]。地域の協賛のもとで競馬が開催されていたことが分かり、地域密着型の競馬であったことの証左である。

また、『競馬年鑑』には掲載されていなかったが、1802 年のグッドウッド競馬では、マ

ッチ・レースが6レース行われていたことが分かっている[15]。マッチ・レースが、1対1で行われる馬主の威信を示すと同時に所有馬の「高貴さ」をも示す、極めて貴族的な競走形態であることは、すでに指摘した。ジョッキー・クラブの本拠地ニューマーケットでは、19世紀前半を通じてこの種の競走が重視されていたが、最初期のグッドウッド競馬は、ニューマーケットのように従来の貴族的要素を多分に遺していたといえる。

（表8）1847年7月27日（火）グッドウッド競馬初日の競走予定表

	競走名	距離	登録料	出走条件	設定斤量	特殊条件	出走登録頭数
1	Craven Stakes	1.25マイル（約2000 m）	10 sov.	全馬齢の牡馬，牝馬	3歳馬7ストーン（約44.45 kg） 4歳馬8ストーン4ポンド（約52.6 kg） 5歳馬8ストーン10ポンド（約55.3 kg） 6歳馬以上8ストーン12ポンド（約56.2 kg）	なし	競走前日午後7時まで受付
2	Lavant Stakes	0.5マイル（約800 m）	50 sov.	2歳牡馬，牝馬	2歳牡馬8ストーン7ポンド（約54 kg） 2歳牝馬8ストーン3ポンド（約52.2 kg）	ニューマーケットのJuly Stakes, Chesterfield Stakesの勝ち馬，アスコットの2歳ステークスの勝ち馬は，追加斤量5ポンド（約2.27 kg）	14頭
3	Sweepstakes	キングス・プレートコース約3マイル5ハロン（約5800 m）	300 sov.	4歳牡馬，牝馬	4歳牡馬8ストーン7ポンド（約54 kg） 4歳牝馬8ストーン2ポンド（約51.7 kg）	なし	17頭
4	Gratwicke Stakes	1.5マイル（約2400 m）	100 sov.	1843年に交配された繁殖牝馬の生産馬（3歳牡馬，牝馬）	牡馬8ストーン10ポンド（約55.3 kg） 牝馬8ストーン5ポンド（約53.1 kg）	100ポンドの勝ち馬を出していない種牡馬，繁殖牝馬による生産馬は減量3ポンド（約1.36 kg），両親ともなら減量6ポンド（約2.72 kg）	50頭（うち5頭死亡）
5	Ham Stakes	2歳コース	100 sov.	1844年に交配された繁殖牝馬の生産馬（2歳牡馬，牝馬）	牡馬8ストーン10ポンド（約55.3 kg） 牝馬8ストーン7ポンド（約54 kg）	100ポンドの勝ち馬を出していない種牡馬，繁殖牝馬による生産馬は減量3ポンド（約1.36 kg），両親ともなら減量6ポンド（約2.72 kg）	43頭（うち4頭死亡）
6	Drawing Room Stakes	Drawing Room Stakes コース一周	25 sov.	3歳馬	牡馬8ストーン7ポンド（約54 kg） 牝馬8ストーン2ポンド（約51.7 kg）	ダービー，オークスの勝ち馬は追加斤量8ポンド（約3.63 kg），2着馬は追加斤量4ポンド（約1.81 kg）	30頭
7	Goodwood Club Stakes	Craven Stakes コース	10 sov.	3歳馬以上	最低9ストーン（約57.2 kg）	グッドウッド・クラブのメンバー騎乗によるレース	1847年グッドウッド競馬開催の前週の月曜日までに，ロンドンのウェザビー氏の事務所に名前を送るジョージ・ベンティンク卿，リッチモンド公爵の二人が登録済
8	Welter Stakes	Craven Stakes コース	20 sov.	全馬齢の牡馬，牝馬	3歳馬10ストーン12ポンド（約68.95 kg） 4歳馬12ストーン4ポンド（約78 kg） 5歳馬12ストーン12ポンド（約81.65 kg） 6歳馬以上13ストーン（約82.56 kg）	Anglesey ステークスの規約によるジェントルマン騎手騎乗	1847年グッドウッド競馬開催の前週の月曜日までに，ロンドンのウェザビー氏の事務所に名前を送る

出典：*Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, pp.108-115より筆者作成。

表8は、1847年の競走についてまとめたものである。この表の詳細は後述するが、ここでは1847年になっても貴族的要素が重視されていることを指摘しておきたい。特に、強調しておきたいレースは、第7レースのグッドウッド・クラブ・ステークス（Goodwood Club Stakes）で、クラブのメンバーしか騎乗することのできない特殊な競走の存在は、従来の貴族らしい競馬がこの時代にも重宝されていた事実を物語る。また、第8レースのウェルター・ステークス（Welter Stakes）もジェントルマン騎乗によるレースで、同様の

指摘ができるであろう。

さて、グッドウッド競馬場の知名度を大きく押し上げるきっかけとなった出来事に、メインレースであるグッドウッド・カップ（the Goodwood Cup）の創設とその後の発展がある。これは、３歳馬以上が参加する競走で、３歳馬に限定されたクラシック・レースとはその質を異にするものであるが、競馬に求められる興奮、感動といった諸要素や開催要領としては、クラシック・レースに準ずる性格を持つものであった。この競走は、1812年に創設された。当初の名前はゴールド・カップ（Gold Cup）であったが[16]、1837 年から正式にグッドウッドの名を冠するようになった[17]。この時期は、後述するベンティンク卿時代とまさに合致している。1814 年からは、より良い天候の下で競馬を楽しむために、グッドウッド競馬の開催自体が、第４代リッチモンド公のイングランドへの帰国に伴い、当初の４月ないし５月から７月下旬に移されたが[18]、エンターテイメント性が盛り込まれたグッドウッド競馬の名声は高まっていった。

では、1814 年のゴールド・カップ（以後グッドウッド・カップと記す）について、同年発行の『競馬年鑑』誌上に掲載されたその競走形態を確認してみる。この競走は、登録料 10 ギニー、賞金 100 ギニーで、競走距離３マイル（4,800m）、加えて 10 名の登録がなければ不成立との記載があった[19]。『競馬年鑑』発行時、この競走に登録していたのは、エグレモント伯、ワイト氏（Mr. Whyte）、サー・ジョン・コープ（Sir John Cope）、ジョリフ氏（Mr. Jolliffe）、ロー氏（Mr. Law）の５名であった[20]。このままであれば、競走は不成立になっていたところであったが、実際には、12 名の登録があり、ブレイク氏（Mr. Blake）のバンクォー（Banquo）が勝利を収めた[21]。規定以上の参加者を集めたということは、この競走が当初から馬主たちに注目されていたことを示している。

ゴールド・カップという名称の競走は、グッドウッド競馬場以外でも行われていたが、1807 年に創設されたアスコット競馬場のものが、特に著名である。ここで再び 1814 年に焦点を当てると、同年発行の『競馬年鑑』に掲載された 55 競馬場のうち、ゴールド・カップが行なわれていたのは、グッドウッドを含めて 28 競馬場で、全体の半数以上を占めていたことがわかる[22]。この年のグッドウッド・カップとダービーやオークスといったクラシック・レースが開催されていたエプソム競馬場での同年開催予定のゴールド・カップとを比較すれば、エプソムのゴールド・カップの競走距離が２マイル（約 3,200m）と、グッドウッド・カップが１マイル長い。競走距離を除く他の競走基準は全く同じであり[23]、これを考慮すれば、グッドウッド・カップは極めて中央的基準で創設されたことも理解さ

れる。

その後、1847 年になると、同年の『競馬年鑑』に掲載された 56 競馬場のうち、明確にゴールド・カップの名が付いた競走が行なわれた競馬場は 15 競馬場で、グッドウッド・カップのように、競馬場名や地域名を冠したゴールド・カップと思われる競走が行なわれた競馬場は 9 ヶ所あった[24]。1814 年に比べ、その割合は減少しているが、グッドウッド・カップのように、独自の名前を冠する競走が誕生したことは、そうした競馬場が大きな発展を経験したためであると言って差し支えないであろう。

（図 9）J・F・ヘリング作「1833 年のグッドウッド・カップ」その 1 （1833）

出典：David Oldrey, *The Jockey Club Rooms: A Catalogue and History of the Collection* (London, 2006), p.31.

（図 10）J・F・ヘリング作「1833 年のグッドウッド・カップ」その２（1833）

出典：David Oldrey, *The Jockey Club Rooms: A Catalogue and History of the Collection* (London, 2006), p.31.

ここで、グッドウッド競馬場の 1814 年以降の発展について見ておきたいが、1819 年には、グッドウッド競馬の開催は８月中旬に変更され、1825 年には、開催における賞金総額が 1,057 ポンドとなり、開催初年度以来 1,000 ポンドを超え、過去最高額を記録した[25]。それ以降、賞金総額は飛躍的上昇を遂げた。事実、1831 年には初めて 5,000 ポンドを突破し、1837 年には初めて 10,000 ポンドの大台を超えた[26]。開催における賞金が増えたということは、それだけ多くの参加者を集めたということと同義である。実際、スウィープステークスに代表されるステークス競走の賞金は、登録馬数に比例するものであり、この時期に劇的増加を見せている。

加えて、1830 年代において、グッドウッド競馬は、「著名な（celebrated）」競馬として認知されている[27]。同時に、権威のあった『スポーティング・マガジン』（*Sporting Magazine*, 1792 年創刊）内で言及されているように、グッドウッド競馬は、よく知られており、まさ

に賞賛に値する成果で、高い権威を持つとも指摘されている[28]。そのため、グッドウッド競馬がその揺籃期を脱し、新たな発展段階に入ったのは、1830 年代であると言える。また、当時のジョッキー・クラブメンバーで、ベンティンク卿のいとこであったチャールズ・グレヴィル（Charles Greville）は、上流階級の競馬生活について、「1834 年８月５日、競馬のためにグッドウッドへ。途中で一晩ペットワース（Petworth）へ行った。スタンリー（Stanley）は、グッドウッドで、競馬、ビリヤード、その他そのようなものに熱中していた」と日記の中で回顧している[29]。この記述に登場するスタンリーとは、後の第 14 代ダービー伯（Edward Geoffrey Smith-Stanley, 14th Earl of Derby, 1799-1869）のことであり、彼もジョッキー・クラブの主要メンバーであった。実際にジョッキー・クラブのメンバーが、当時のグッドウッド競馬場に頻繁に足を運んでいた事実をうかがい知ることができる。

さて、この頃になると、ジョッキー・クラブは以前にも増してスポーツ統括団体としての「近代的」側面を見せ始めていた。このことは、1828 年 10 月 29 日の、ニューマーケットのニュー・ルーム（New Room）における新しい競馬施行規則制定に如実に現れている[30]。加えて、1832 年にはジョッキー・クラブの競馬施行規則を採用しない競馬場からの紛争解決依頼を一切受け付けないと、『競馬年鑑』で発表した[31]。これは、まさに他の競馬場に対する圧力であった。

こうした圧力は、1807 年、『競馬年鑑』に、ジョッキー・クラブによってすでに解決された「判例集」の掲載が開始されたことに始まる。ヴァンプリューによれば、これは地方の競馬場開催幹事に対する手引きとして行われたようである[32]。また、1816 年には、ジョッキー・クラブの幹事たちが、「論争中の問題をジョッキー・クラブの幹事たちの判決に委ねたいと思う人は、一定の条件が守られる限り自由にそうしてよい」という通知を『競馬年鑑』に発表した[33]。一定の条件とは、論争中の問題が競馬に関するものであること、文書でその事件の申し立てを行うこと、ジョッキー・クラブの幹事たちの判決を遵守することなどであったが、この時期に初めて、ジョッキー・クラブは他の競馬場からの要求があった場合、その仲裁をすることを進んで申し出たのである[34]。

19 世紀初頭は、サー・チャールズ・バンベリー時代の末にあたるが、ジョッキー・クラブは、統括団体としての「近代的」側面を、自らが作成した競馬施行規則を通して、地方競馬場に顕示した。1816 年以降のジョッキー・クラブは、従来よりも具体的な形で、グッドウッドでの規則改革を含めて、他の競馬場に影響力を及ぼしていくことになるのである。

第二節　クラシック・レースの発展とジョージ・ベンティンク卿の改革

本節では、ジョッキー・クラブの後期発展期を代表する幹事、ジョージ・ベンティンク卿の改革を中心に論じる。1836 年から、クラブ幹事としてその手腕を発揮したジョージ・ベンティンク卿は、グッドウッド競馬場を舞台に改革を始めたが、それらは、スポーツにおける近代的要素である公平性の確保とエンターテイメント性の充実などである。具体的には、違反者の厳重な処罰、グランド・スタンドの整備、馬運車の導入、出走馬の口腔検査、公平な斤量の設定などが挙げられる。

1840 年代のグッドウッド競馬場における違反者への厳重な処罰の実施に関して述べるには、まずジョージ・ベンティンク卿と協力関係にあった第５代リッチモンド公についての言及から始めなければならない。第５代リッチモンド公は、1845 年の第２回 10 月開催の火曜日に、ニューマーケットで開かれたジョッキー・クラブの会議において、次のような称賛を受けている[35]。

「ジョッキー・クラブの満場一致の感謝が、リッチモンド公閣下の貴族院における根気強い尽力と優れた貢献に対して示された、競馬場の最大の利益に対して破壊の恐れがある多くの古臭い制定法が廃止されたので、競馬に関する現存の法が、安全かつ満足な地位にある。」

これは、幹事であったベンティンク卿のリッチモンド公への賛辞とも言えるが、一体彼らはどのような変革を競馬にもたらそうとしていたのであろうか。リッチモンド公が管理し、ベンティンク卿が改革を行ったグッドウッド競馬場に目を転じることにする。

1847 年の『競馬年鑑』は、掲載量が増え、初めて分冊化が行われた版であるが、グッドウッド競馬場の開催予定には、初めに以下の警告が記されている[36]。

「リッチモンド公閣下は、違法行為の罪を犯した人物、また、賞金、違約金や競馬で負けた賭け金の支払い不履行で悪名高い人物は、グッドウッドにおける全競馬開催の間、グランド・スタンドやその特定観覧席、サセックスでの彼の所有地に入場を許されないこと、そして、もしそのような人物が入場するならば、リッチモンド公閣下、その時の幹事、もしくは競馬場事務員に存在を指摘され、追い出されるであろうことを警告する。」

違法行為に関するこの警告に続いて、競馬場に「今年現れるなら、起訴される」とも記されている[37]。こうした債務不履行者などの違反者に対する徹底的な締め出しは、ジョージ・ベンティンク卿が着手した、競馬のスポーツ化の一つ、すなわち公平性を確保するための重要な改革であった。

さて、ジョッキー・クラブの幹事を務めたベンティンク卿は、すべての階級の観客に適切な便宜を与えることに対する商業的利点を認識した最初の幹事でもあった[38]。彼は、若い頃から競馬に興味を持っており、22 歳の時、グッドウッドで行われたコックド・ハット・ステークス（the Cocked-Hat Stakes）に自ら騎乗し、勝利を収めているが[39]、それはまさに中世の騎士さながらで、競馬の貴族的伝統をこよなく愛する人物であった。その一方で、ベンティンク卿は、リッチモンド公とともに幾多の改革を行うことで、グッドウッド競馬場を競馬の最先端にし、今日知られている競走管理の基礎を築いた[40]。例えば、それぞれの競走におけるスタートの際の時間厳守を競馬場係員に求め、発走予定時刻に遅れた場合、毎分 10 シリングの罰金を科す制度を確立したし、速報掲示板の導入や適切な騎手服の着用、定められた場所での装鞍や、競走馬のグランド・スタンド前での歩行および駆け足（「返し馬」）、スタートに伴う旗での補助などを導入した[41]。

これらはすべて、競馬をエンターテイメントとして確立していくにあたって必要不可欠な要素であった。グッドウッド競馬場において厳密な競馬開催を行うことで、その開催の公平性を示し、同時に自らをアピールする場として、競馬場を機能させたのが、ジョージ・ベンティンク卿の功績であった。後に、これらの改革がニューマーケットを含めたイギリスの中央競馬場のみならず、地方競馬場、さらには世界中で導入され、グローバル・スタンダードとなっていく。

加えて、上流階級をアピールする場となったのが、特別観覧席であるグランド・スタンドである。グッドウッド競馬場では、1842 年に新しいグランド・スタンドが完成したが、当時の『絵入りロンドン・ニュース』の中で、「グッドウッド競馬は、その週のスポーツ・アトラクションで、例年の式典であり、すばらしいイギリス紳士リッチモンド公の嗜好、進取の気性、寛容さのおかげで、今や王国の最も優れた競馬娯楽を供給している」という賛辞を贈られ、スタンドの華やかな様子が伝えられていた[42]。先のベンティンク卿の改革、すなわち、発走遅延の罰金制度や、速報掲示板、適切な騎手服、装鞍場所、「返し馬」などの導入は、グランド・スタンドの観客の楽しみおよび賭けをより促進するためのものであったので[43]、それぞれが密接に関係しあっていたと言える。

この他にも、1836 年にベンティンク卿がエリス（Elis）でセントレジャーを勝った時には、史上初めて競走馬が調教厩舎から競馬場まで運搬車で運ばれるという偉大な業績があった[44]。この功績も、グッドウッドで発案されたものである[45]。当時、競走馬の輸送手段はまだ確立されておらず、厩舎から遠く離れた他の競馬場まで移動するには、競走馬自身の脚で、時には数日をかけて移動しなければならなかった。このことを考えると、彼の馬運車の考案は、既存の概念を覆す画期的なものであり、彼が活動拠点としたグッドウッド競馬場と他の競馬場間の移動を容易にし、かつ馬の負担を軽減することを企図していたと指摘できる。この点から、ベンティンク卿は、公平性とエンターテイメント性の両方において、競馬のスポーツ化に貢献した人物であったと言える。

さて、グッドウッド競馬の 1847 年の開催にあたり、先ほどのリッチモンド公の警告の他に、以下のような警告もある[46]。

「公称の年齢が疑われる馬は、幹事によって任命された適任者による口腔の事前検査なしに出走を認められない、もし競走後まで反対されなければ、同種の検査が強く要求される。そして、馬主、調教師、馬の世話を託された他の人物によって、そうした検査に対する抵抗があった場合には、その賞金と競走は二着馬に与えられ、関係した連中は、グッドウッド競馬で永久に馬を走らせること、出席することから除外されるだろう。」

この出走馬の口腔検査は、年齢詐称が行われていないかを判断する重要な検査であったので、これもまた公平性を追求するものであるが、これに関して、「異議は、幹事の一人かウェザビー氏に書面でなされなければならない」と続いている[47]。リッチモンド公とベンティンク卿の協力関係および彼らがジョッキー・クラブのメンバーであったという事実から、ジョッキー・クラブとグッドウッド競馬場との繋がりを指摘できる。さらに、競走予定の終わりには「すべてのニューマーケットにおける規約は、グッドウッドにおいて固守される」とあり[48]、ニューマーケットと地方競馬場のモデルであったグッドウッドとの関係を『競馬年鑑』に明示したことは特筆され、他の地方競馬場への強制が際立ったことを示している。

（図 11）作者不詳「エリス」（1836 頃）

出典：David Oldrey, *The Jockey Club Rooms: A Catalogue and History of the Collection* (London, 2006), p.118.

特に、公平性とエンターテイメント性という点においては、斤量の改革がもっとも重要な改革と言えるかもしれない。競走に面白みを持たせ、さらに興奮や感動を引き起こすためには、出走する競走馬の馬齢や性別を考慮した上で、この斤量を決めねばならない。これが偏ってしまうと、出走馬に有利不利が出てしまい、競走が公平性に欠け、エンターテイメント性においてもつまらないものになってしまうからだ。

19 世紀中頃におけるグッドウッド競馬の改革の進展を見るために、先に挙げた 1802 年のシティ・オブ・チチェスター協賛のプレート競走の一つを見てみると、３歳馬以上に参加資格があったが、その斤量は３歳馬６ストーン（約 38.1kg）、４歳馬７ストーン７ポンド（約 47.6kg）、５歳馬８ストーン５ポンド（約 53.1kg）、６歳馬８ストーン 10 ポンド（約

55.3kg)、７歳馬以上８ストーン 12 ポンド（約 56.2kg）とばらつきが極めて激しく、牡馬と牝馬間に生じる性差も考慮されていないことがわかる[49]。シティ・オブ・チチェスター協賛のもう一つのプレート競走は、３歳馬と４歳馬によって行われたが、３歳馬の斤量が７ストーン５ポンド（約 46.7kg）、４歳馬の斤量が８ストーン８ポンド（約 54.4kg）と、わずか１歳の違いで約８kg もの差があり、やはり牡牝間の性差は考慮されておらず[50]、不十分さがあったといえる。

７月下旬に開催が移った 1814 年のグッドウッド競馬において、注目すべき点は、先のグッドウッド・カップとの関連性がみられる競走が存在していることである。その競走は３歳以上で行われ、斤量は３歳馬６ストーン９ポンド（約 42.2kg）、４歳馬８ストーン１ポンド（約 51.3kg）、５歳馬８ストーン 10 ポンド（約 55.3kg）、６歳上９ストーン２ポンド（約 58.1kg）、牝馬とセン馬（去勢された馬）は３ポンド（約 1.36kg）減量というものであったが、この競走には、グッドウッド・カップの勝ち馬は７ポンド（約 3.18kg）追加される旨が記されていた[51]。こうした、競走間に関連性を持たせることも、競馬開催においては重要で、公平性やエンターテイメント性の充実に繋がるものであったことは、容易に想像がつく。

そして、ベンティンク卿時代における先の表８を見てみると、各競走に細かな斤量設定がなされていることがわかる。第２レースには、ニューマーケットのジュライ・ステークス（July Stakes）、チェスタフィールド・ステークス（Chesterfield Stakes）の勝ち馬に追加斤量５ポンド（約 2.27kg）を課す２歳馬競走のラヴァント・ステークス（Lavant Stakes）が予定されていたし、第６レースには、クラシック・レースであるダービー、オークスの勝ち馬に追加斤量８ポンド（約 3.63kg）、２着馬に追加斤量４ポンド（約 1.81kg）が課されるドローイング・ルーム・ステークス（Drawing Room Stakes）が設けられていた。また、第４、５レースのように、競走馬の出自すなわち血統背景を考慮した特殊条件が設定されるなど、それまでの時代と比べてベンティンク卿時代には大きな進歩が見られた。事実、ベンティンク卿は、より効果的な騎手の検量に対する鋭敏も持ち合わせていたため[52]、特に斤量の設定に大きな関心を寄せていたことは間違いなく、改革の結果、より公平な競走が行われたと言える。

ここで、表８の補足をしておこう。19 世紀半ばになると、その競走形態は多種多様なものへと変貌を遂げていた。例えば、明確に示されている距離だけでも、0.5 マイル（約 800 m）から約３マイル５ハロン（約 5,800m）と大きなばらつきが見られる上に、２歳馬競

走の他に３歳馬競走、４歳馬競走や全馬齢が出走可能な競走まで設定されている。先に指摘したように、それぞれの競走によって、斤量や必要な登録料が細かく定められ、特殊条件付きの競走も見受けられる。これは、ベンティンク卿の改革によって、競馬が公平性とエンターテイメント性を持つ「合理的娯楽」に昇華され、近代スポーツとしての性格を極めて色濃く持つようになった証拠であると指摘できる。加えて、先に指摘した第７、８レースのように、貴族的要素が重視されていることも特筆でき、ベンティンク卿時代、まさに「貴族的」かつ「近代的」な競馬が行なわれていたと言えよう。

こうしたベンティンク卿時代の競馬をさらに浮き彫りにするために、第一節で取り上げた表７「1836 年版および 1846 年の『競馬年鑑』における定期購読者層の分類」を再度分析してみる。1836 年版の『競馬年鑑』では、巻頭に掲載された敬称付きの定期購読者は、1,365 名中 167 名で全体の約 12.2%であった。そして、ベンティンク卿時代末の 1846 年においては、1,308 名中 142 名で全体の約 10.9%となっていた。1773 年の『競馬年鑑』初版における敬称付きの定期購読者の割合が、522 名のうち 95 名で約 18.2%であったことを考慮すれば[53]、クラブの後期発展期にはその割合が落ちていたと指摘できる。後期発展期において、国王の『競馬年鑑』購読がみられるものの[54]、上記の事実が示すように、競馬の主たる担い手である貴族を中心とした上流階級に位置する人々の割合が減少し、競馬参加のすそ野が広がったことを意味している。先の敬称付きの別枠掲載定期購読者に関しては、次ページに表９を設けておいた。

次に、これらの表に関連して、地域別で掲載された定期購読者に目を移すことにするが、こちらの割合はどうであろうか。中でも、ここでは、エスクワイアを除いた「ミスター」で表記された人々について取り上げる。前掲の表７のとおり、1836 年版において「ミスター」として掲載された定期購読者は 588 名で、その大半を占めていたことがわかる。そうした状況は 1846 年になっても変わらず、「ミスター」層の定期購読者は 561 名を数えている。その割合は、それぞれ全体の約 43.1%と約 42.9%であった。1773 年の『競馬年鑑』で、「ミスター」として記載された人々は 209 名で、約 40%であった[55]。以上の点から、「ミスター」としか称されない定期購読者の割合が増加したことを指摘できる。ここでも、こうした人々が「単なるジェントルマン」であるのか中産階級であるのか、すべてを断定することはできない。しかし、19 世紀半ばという時代背景を考慮した場合、十分な資金力を付けた中産階級の一部が、全盛期と比べてより多く競馬に参加し始めたと言及することに問題はないであろう。

（表９）1836 年版および 1846 年の『競馬年鑑』における敬称付きの別枠掲載定期購読者

年度	1836年版	1846年版
His(Her) Majesty	1	1
His Royal Highness	0	2
His Grace	8	7
The Most Noble	9	7
Right Honourable	72	60
(The) Honourable	31	28
Baronets (Sir)	46	37
計	167	142

出典：*Racing Calendar*, Vol.64, 1837, pp.vii-xi（本来の該当箇所は７から９ページであり、本史料では、本来の９ページが 11 ページと表記されたミスがあるが、原文ママにしておく）;*Racing Calendar*, Vol.74, 1846, pp.vii-ix より筆者作成。

さて、ベンティンク卿時代末、『競馬年鑑』における敬称付きの別枠掲載定期購読者の数が、その初期と比べて減少したことをすでに述べた。しかし、両時期において、敬称付きで購読者リストの先頭に掲載されているクラブ会員の割合は、むしろ増加傾向を見せている。1836 年版と 1846 年の『競馬年鑑』定期購読者リストにおいて、敬称付きで掲載されているジョッキー・クラブメンバーの割合は、1836 年版では 71 名中 37 名の約 52.1%であったのに対し[56]、1846 年には 78 名中 47 名の約 60.3%になっている[57]。この事実は、競馬が他の階級にも開放されていく一方で、ジョッキー・クラブ自体は、その閉鎖性を保ち、時には強化していたことを意味している。その証拠に、ジョッキー・クラブは、各ルームへの入場に関して、それぞれに厳しい無記名投票を課していた。この点を考慮すれば、上流階級に属するクラブの人々にとって、彼らの社交空間は制限されることなく、むしろ拡大されるという一面があった。ジョッキー・クラブは、閉鎖性を保つための規則を設けることで、常に自らと同じ階級に属する人々だけをクラブ内に組み入れ、ベンティンク卿時代には、同時期に形成された「貴族的」かつ「近代的」な競馬を満喫していたのである。

【註】

1 David Oldrey, *op. cit.*, p.107.
2 *Racing Calendar*, Vol.29, 1802, pp.201-303.
3 *Ibid.*, pp.vii-xxv.
4 *Ibid.*, pp.xvi-xix, xxi-xxiv.

[5] 定期購読の他にも、ヨーク、ニューカッスル・アポン・タイン、マンチェスター、リヴァプール、バース、そしてニューマーケットにおいて、10 シリング 6 ペンスで一般販売されていたことが、1801 年版の『競馬年鑑』巻頭広告欄からわかる。一般販売の正式な数を把握することは出来ないが、少なくとも、定期購読者の多くの人々の目に新しく登場したグッドウッド競馬場の開催予定が留まったことであろう。

[6] *Racing Calendar*, Vol.74, 1846, pp.vii-xxiv.

[7] *Racing Calendar*, Vol.29, 1802, pp.262-264.

[8] *Ibid.*, p.262.

[9] *Ibid.*, pp.xxii, 262. 彼らは、共にエスクワイアであった。

[10] Wray Vamplew, *op. cit.*, pp.25-26.

[11] *Racing Calendar*, Vol.29, 1802, p.262. 1801 年版『競馬年鑑』の段階で、開催幹事は２名おり、もう一人はゲイジ氏（Hon. J. Gage）であった。ゲイジ氏には、「Honourable」という敬称が付されていた。第一章第一節で指摘したように、『競馬年鑑』の定期購読者一覧の最初には、王族や貴族といった身分の高い人々が、「His Royal Highness」、「His Grace」、「Right Honourable」、「Honourable」といった敬称付きで掲載されていた。そして、彼らの後に、アルファベット順で地域別に、身分的に下の人々が掲載されるという形が採られていた。それだけ、敬称の付く人々が、高貴な存在として特別な扱いを受けていたのである。ゲイジ氏の名前は定期購読者一覧にはないが、同じ『競馬年鑑』上で「Honourable」として扱われているということは、特別な人物であったと言える。こうした敬称の一般的区分に関しては、以下を参照のこと。Peter Laslett, *The World We Have Lost* (New York, 1965).

[12] *Racing Calendar*, Vol.29, 1802, p.262. この競走では、エグレモント伯所有の栗毛馬ボブテイル（Bobtail）が勝ち馬となり、70 ギニーを総取りした。William H. Mason, *Goodwood: Its House Park and Grounds with a Catalogue Raisonne of the Pictures* (London, 1839), p.185.

[13] *Racing Calendar*, Vol.29, 1802, pp.263-264.

[14] *Ibid.* ２つのシティ・オブ・チチェスターのプレート競走に勝利したのは、ブロック氏（Mr. Bullock）所有の鹿毛馬ジャイルズ（Giles）とラドブローク氏（Mr. Ladbroke）所有の栗毛馬ミステリー（Mystery）であった。William H. Mason, *op. cit.*, p.185.

[15] *Ibid.*, pp.185-186.

[16] Robert Black, *Horse-Racing in England*, p.118.

[17] *Racing Calendar*, Vol.64, 1837, pp.104, 425-426.

[18] Rosemary Baird, *op. cit.*, p.185.

[19] *Racing Calendar*, Vol.41, 1814, p.282.

[20] *Ibid.*

[21] William H. Mason, *op. cit.*, p.191.

[22] *Racing Calendar*, Vol.41, 1814, pp.206-369.

[23] *Ibid.*, p.240.

[24] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, pp.1-339. この年、アスコットでは、「ゴールド・ベース（the gold Vase）」競走が行なわれたが、これを「ゴールド・カップ」とみなして計算に入れた。

[25] William H. Mason, *op. cit.*, pp.185-198.

[26] *Ibid.*, pp.185-213.

[27] J. D. Parry, *An Historical and Descriptive Account of the Coast of Sussex* (London, 1833), p.421.

[28] *Ibid.*

[29] Christopher Hibbert (ed.), *op. cit.*, p.119. チャールズ・グレヴィルは、著名な日記作家としても知られている人物である。

[30] C. F. Brown, *op. cit.*, p.127.

[31] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, p.xvii.
[32] Wray Vamplew, op. cit., p.96.
[33] C. M. Prior, *op. cit.*, p.184.
[34] *Ibid.*
[35] *Racing Calendar*, Vol.74, 1846, p.lii.
[36] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, p.108.
[37] *Ibid.*
[38] Neil Wigglesworth, *The Evolution of English Sport* (London, 1996), p.35.
[39] John Kent, *op. cit.*, p.53.
[40] Rosemary Baird, *op. cit.*, p.187.
[41] John Kent, *op. cit.*, pp.296-297. 「返し馬」とは、出走馬が競走前に行う準備運動のことである。
[42] *The Illustrated London News*, Vol.1, No.12, 1843, p.184.
[43] Mike Huggins, op. cit., p.438.
[44] Charles J. Archard, *The Portland Peerage Romance* (London, 1907), p.36.
[45] John Kent, *op. cit.*, pp.60-61.
[46] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, p.108.
[47] *Ibid.*
[48] *Ibid.*, p.124.
[49] *Racing Calendar*, Vol.29, 1802, p.263.
[50] *Ibid.*
[51] *Racing Calendar*, Vol.41, 1814, p.282. 加えて、この競走は、距離１マイル半（2,400m）で、５名の登録がなければ不成立というものであった。『競馬年鑑』発行の段階では、グッドウッド・カップにも登録していたジョン・コープ、エグレモント伯、ウィリアム・ロー、ウィリアム・ジョリフとチャールズ・ミットフォード（Charles Mitford）が登録していた。実際には８名の登録があり、エグレモント伯の鹿毛の牡馬ファン（Fun）が勝利を収めた。William H. Mason, *op. cit.*, p.191.
[52] Mike Huggins, op. cit., p.438.
[53] *Racing Calendar*, Vol.1, 1773, pp.i-x.
[54] 1846 年の『競馬年鑑』では、ヴィクトリア女王が「HER MAJESTY」の敬称で定期購読者リストの先頭に記載されている。*Racing Calendar*, Vol.74, 1846.
[55] *Racing Calendar*, Vol.1, 1773, pp.i-x.
[56] *Racing Calendar*, Vol.64, 1837, pp.vii-xxiv, 579.
[57] *Racing Calendar*, Vol.74, 1846, pp.vii-xxiv, 480.

第五章　ジョッキー・クラブの確立期

本章では、ジョッキー・クラブの確立期について論じるが、この時期にクラブの舵取りを担った人物が、ヘンリ・ジョン・ラウスであった。彼は、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけてのサー・チャールズ・バンベリー、1830 年代半ばから 1840 年代半ばのジョージ・ベンティンク卿と並んで、「ディクテイター・オヴ・ザ・ターフ」と称される競馬改革者である。ラウスの時代、ジョッキー・クラブは、彼らが作成した規則を全国的に伝播させることで、イギリス競馬の真の統括団体となった。それと同時に、競馬は筆者が主張する競馬のスポーツ化の第三段階、すなわち最終段階に突入し、全階級的なスポーツへと変貌を遂げるのである。

第一節　ヘンリ・ジョン・ラウスの改革

ここでは、19 世紀後半を代表するジョッキー・クラブ幹事で競馬改革者のヘンリ・ジョン・ラウスを中心に論じる。まず、彼の出自に関してだが、ラウスもベンティンク卿同様、競馬に情熱を注ぐ高貴な家柄に生まれた。ラウスの父、初代ストラドブローク伯（1st Earl of Stradbroke, 1750-1827）は、1801 年のセントレジャー優勝馬クイズ（Quiz）を購入し、ヘンハム（Henham）にある彼の繁殖場で繋養することになったが、そのクイズが、2,000 ギニーの優勝馬ティグリス（Tigris）を筆頭に、多くの優れた勝ち馬を輩出した[1]。初代ストラドブローク伯は長年ジョッキー・クラブ会員であったが、彼の最も偉大な貢献は、約 65 年間会員であった第２代ストラドブローク伯、そして、特にヘンリ・ジョン・ラウスの父であったことであると、現代のジョッキー・クラブ会員デヴィッド・オールドレイ（David Oldrey）は述べている[2]。こうした高貴な血筋とラウス家のクラブに対する長年のサポートは、ヘンリ・ジョン・ラウスが競馬改革を行っていく上で、有効的に作用したことであろう。

1795 年に生を受けたラウスは、1821 年にジョッキー・クラブ会員に選出され、1836 年の海軍退役から２年後、ジョッキー・クラブの幹事となった[3]。以後、彼の人生は競馬とその管理に捧げられることになったが、ラウスは、タバコ、大規模な賭け、競馬の腐敗に対して強固な反感を持っており、あらゆる点で誠実であると、同時代人から評価を受けていた[4]。そのラウスは、1821 年にクラブの会員となり、1838 年には幹事を務めたということだが、これはまさにベンティンク卿時代と重なり合っている。しかし、19 世紀前半の段

階では、ラウスは継続的にクラブの幹事職を担っていたわけではなく[5]、ジョージ・ベンティンク卿が 1846 年に競馬界を引退するまでは、彼を引き立てる脇役を演じた[6]。

（図 12）ヘンリ・ウェイゴール（Henry Weigall）作、「アドミラル・ヘンリ・ラウス」（1866）

出典：David Oldrey, *The Jockey Club Rooms: A Catalogue and History of the Collection*（London, 2006), p.148.

1840 年、ラウスは友人であったベドフォード公の勧めで、アマチュアの厩舎責任者となり、同時にベドフォード公の大繁殖場の業務管理を一手に負うことになった[7]。この第 7 代ベドフォード公はジョッキー・クラブ会員であり、1839 年に爵位を継ぐまで、タヴィストック侯（Marquis of Tavistock）として競馬に参加していた[8]。例えば、彼は 1835 年におけるクラブのメンバーリスト初出の段階で、タヴィストック侯の名でラウスとともに記載があったが[9]、彼がラウスに厩舎や繁殖場の管理を任せた背景には、信頼関係はもちろんのこと、高貴な者同士の社交ネットワークがあったと指摘できる。第 7 代ベドフォード公は 1861 年に亡くなったが、彼の交配したハベナ（Habena）が 1855 年の 1,000 ギニーに勝利したし、ラウスが選出した著名なアステロイド（Asteroid）を交配したことでも知られている[10]。

ラウスは、特にマッチ・レースの勝利で、ベドフォード公が所有するウォバーン・アビー（Woburn Abbey）の競走馬とともに大成功を収め、公と公の調教師であったウィリアム・バトラー（William Butler）を満足させた[11]。マッチ・レースが一対一で行われる貴族的な競走であること、特にニューマーケットでは、19 世紀中頃においても盛んに行われていたことは、これまで指摘したとおりである。しかし、実はこのマッチ・レースを組むこと、すなわち「マッチメイク」を行うことは、極めて困難な作業である。

例えば、ダービーのようなクラシック・レースであれば、先に述べたように、長い歴史の中で度々改定が行われたため、19 世紀中頃にはすでに競走の枠組みが確立されていた。その証拠に、距離が定まっている上、出走権は 3 歳馬にしか存在しておらず、牡牝の性差は斤量差によって配慮されていたため、毎年ハイレベルな競走が可能であった。その一方で、マッチ・レースを行うためには、その都度、各競走馬の馬齢や性差はもちろんのこと、距離適性を含めた競走馬が持つ能力指数を的確に推し量らねばならない。もし、競走馬の能力を見誤れば、お互いが最後まで競り合い、興奮や感動を呼び起こす競走は不可能であった。こうした極めて難易度の高いマッチメイクを行う役目を担ったのが、ハンディキャッパー（handicapper）である。

ラウスは、このハンディキャッパーとしての優れた能力を持っており、ベドフォード公および自身の所有馬のマッチメイクで、年平均 1,500 ポンドの利益を生み出していたと言われている[12]。ラウスは、決して多くの馬を所有していたわけではなかったが、所有馬をもっぱらマッチ・レースに出走させていた[13]。彼が、1855 年に公式のハンディキャッパーとして招聘された際、上記の事情が役立ったという[14]。このように、後年長期間にわたっ

てジョッキー・クラブの幹事を務めることになる人物が、競走を公正かつ高水準で行うための眼力を持っていたことは、特筆すべきであろう。ラウスのハンディキャッパーとしての特徴は、ジョージ・ベンティンク卿にはなかったものであるが、クラブの幹事として、競馬と常に向き合い、各時代に合う形で競馬を改良した点は共通している。

（図 13）ラウスの勝負服

出典：David Oldrey, *The Jockey Club Rooms: A Catalogue and History of the Collection* (London, 2006), p.157.

さて、ヴァンプリューによれば、ベンティンク卿の引退からラウスが支配的地位を得る1850 年代半ばまでの約 10 年間、ベンティンク卿による優れた功績が蝕まれ、真の指導者の不在が、ジョッキー・クラブの権威を次第に衰えさせることになり、競馬が再び腐敗することになったという[15]。ヴァンプリューは、当時の競馬の腐敗理由を、小規模な競馬場の多くで不正が横行していたこと、1855 年にクラブ幹事の一人であったフランシス・ヴィ

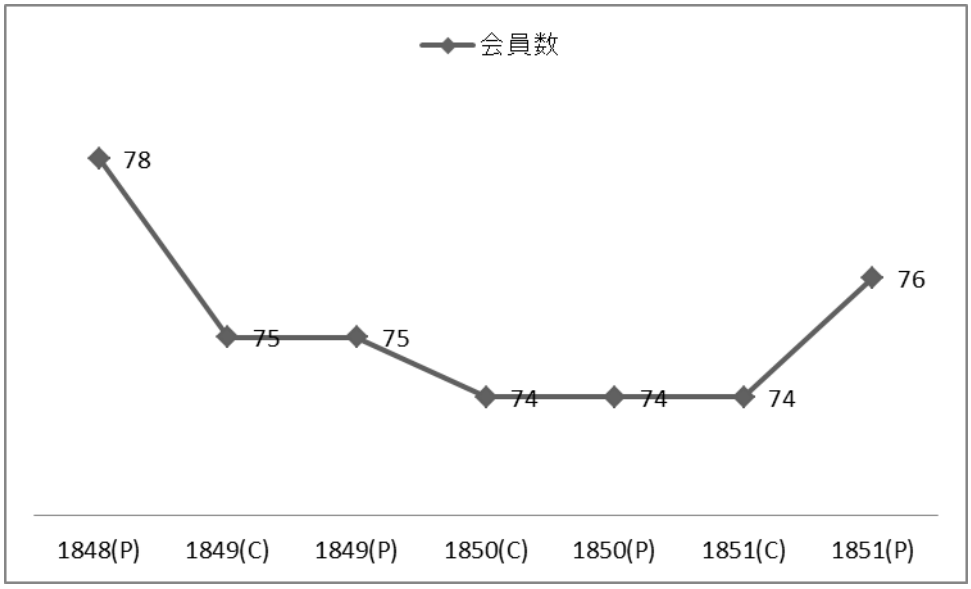
リヤーズ（Hon. Francis Villiers）が、100,000 ポンドの債務不履行で国外逃亡したことに求めている[16]。

一方でハギンズは、19 世紀中頃におけるジョッキー・クラブの財政危機を指摘しているが、こうした財政危機は、北部の競走馬が権威ある競走を支配したためで、結果として、ニューマーケットでは最高の調教師の数が減少し、空き地も増え、多くのクラブ会員を含めた富裕な馬主が、所有馬を他の場所で調教するようになったという[17]。加えてハギンズは、そうしたニューマーケット競馬の失敗が、同時期におけるクラブの脆弱性の部分的説明に繋がっており、1855 年までにほとんどの観客がニューマーケットを訪れなくなったので、ニューマーケット競馬は赤字であったと主張する[18]。ハギンズは、ここで具体的な赤字額を明示していないが、ヴァンプリューによると、1855 年におけるクラブの赤字は約 5,000 ポンドであった[19]。

19 世紀中頃におけるクラブの赤字化には、先行研究で特に指摘されている、ベンティンク卿時代とラウス時代の間の空白それ自体を筆頭に、様々な原因があるであろうが、ハギンズによる「ほとんどの観客がニューマーケットを訪れなくなった」という主張は乱暴であろう。そこで、当時のニューマーケット競馬に対する関心度を、『競馬年鑑』から測ってみたい。例えば、ベンティンク卿が亡くなった翌年の 1849 年の『競馬年鑑（競走予定版）』を分析してみると、従来通り年 7 回の開催で、クラシック・レースである 2,000 ギニーの登録馬は 35 頭であった[20]。以後、2,000 ギニーの登録馬は、1851 年の『競馬年鑑（競走予定版）』で 31 頭[21]、1852 年の『競馬年鑑（競走予定版）』でも同様に 31 頭と[22]、1849 年と比べて数の微減があったものの、1854 年の『競馬年鑑（競走予定版）』では 49 頭に増加している[23]。第三章第三節の表 6 で指摘したように、1847 年の『競馬年鑑（競走予定版）』における 2,000 ギニーの登録馬は 18 頭であり、ベンティンク卿が存命だった時期と比べて、登録馬が増加傾向を見せていたことは明らかである。

同時に、この時期のクラブ会員の推移を分析しておくことも生産的であろう。ここでも、ベンティンク卿の死後からを対象とするが、1848 年の『競馬年鑑（競走結果版）』では、会員数は 78 名であった[24]。翌年 1849 年の『競馬年鑑（競走予定版）』における会員数は 75 名[25]、同年の『競馬年鑑（競走結果版）』における会員数も同数の 75 名であった[26]。以下、1850 年および 1851 年の『競馬年鑑（競走予定版）』、『競馬年鑑（競走結果版）』それぞれの会員数は、74 名、74 名、74 名、76 名と大差なかった[27]。ここまでのデータを、次ページで表 10 として示しておく。

（表 10）ベンティンク卿の死去から 1851 年までのジョッキー・クラブ会員数の推移

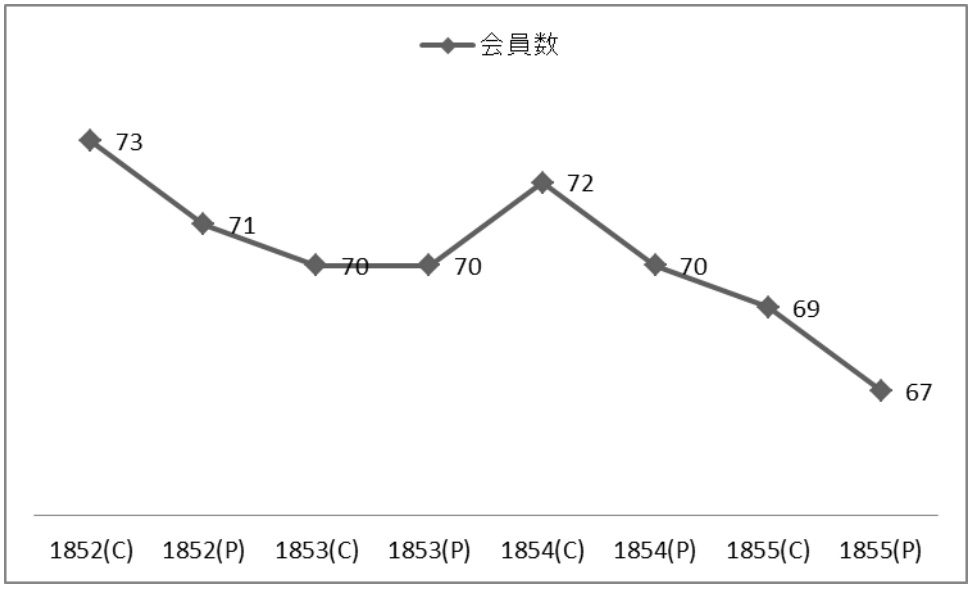


出典：*Racing Calendar (Races Past)*, Vol.76, 1848, p.461; *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.77, 1849, p.395; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.77, 1849, p.460; *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.78, 1850, p.408; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.78, 1850, p.427; *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.79, 1851, p.425; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.79, 1851, p.440 より筆者作成。

表 10 のとおり、ベンティンク卿時代とラウス時代に挟まれた空白期間の前半におけるジョッキー・クラブ会員数に、大きな変化は見受けられない。この数値は、ベンティンク卿時代の会員数をグラフ化した第一章第二節の表 1 と比べても見劣りするものではない。この時期における会員数の安定は、ベンティンク卿時代と比べて、クラブの運営や、その本質である閉鎖的性格がさほど変容していなかった証拠であろう。

では、空白期間の後半におけるクラブの会員数はどうであろうか。例えば、1852 年の『競馬年鑑（競走予定版）』における会員数は 73 名であった[28]。同年の『競馬年鑑（競走結果版）』では、会員数は 71 名であった[29]。翌年 1853 年の『競馬年鑑（競走予定版）』における会員数は 70 名[30]、同年の『競馬年鑑（競走結果版）』における会員数も同数の 70 名であった[31]。1854 年および 1855 年の『競馬年鑑（競走予定版）』、『競馬年鑑（競走結果版）』それぞれの会員数は、72 名、70 名、69 名、67 名で、若干の減少が見られた[32]。これらのデータを、次ページで表 11 として示しておく。

（表 11）1852 年から 1855 年までのジョッキー・クラブ会員数の推移



出典：*Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.80, 1852, p.441; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.80, 1852, p.465; *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.81, 1853, p.457; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.81, 1853, p.510; *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.82, 1854, p.465; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.82, 1854, p.539; *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.83, 1855, p.434; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.83, 1855, p.517 より筆者作成。

表 11 で示したように、ベンティンク卿時代とラウス時代の間、すなわち空白期間の後半におけるジョッキー・クラブ会員数は、若干の減少を経験している。この変化が、先行研究で指摘されているジョッキー・クラブの権威の衰退に伴う求心力低下に起因しているのか、断定するのは困難である。しかし、少なくとも、クラブの運営に直接かかわる会員数が減少したこと自体は、事実のようだ。

1856 年、ラウスはクラブの財政を管理するよう要請された[33]。彼が、財政担当というクラブの直接的運営を任された事実は、すなわち本格的にラウス時代が始まったと定義してよかろう。その後、ジョッキー・クラブ研究者のロバート・ブラックが、クラブの歴史における注目すべき年と位置付ける 1859 年に、ラウスはある種の終身会長（Perpetual President）の職に就き、ニューマーケットの権威によって、クラブの年間収入を 18,000 ポンドにまで引き上げたという[34]。こうした財政の黒字化は、ラウス時代を代表する改革の一つと言えよう。では、ラウスによる競馬自体の改革には、具体的にどのようなものが挙げられるだろうか。

ラウスによる代表的な競馬改革が、彼の幹事在任中に行われた、発走時に問題を起こした騎手を騎乗停止にする規則の制定である[35]。ヴァンプリューによれば、この規則が 1863 年までには一般に受容されるようになり、その後 19 世紀最後の四半世紀には、ジョッキー・クラブの発走係とその代理人が、ニューマーケット以外の競馬場で引く手数多になったという[36]。特に、囲い込み競馬においては、観客をひきつける策として定時発走が奨励されたため、多くの地方競馬場におけるお粗末な発走は許容できなくなり、ジョッキー・クラブの認可印を持つ公認発走係の需要が増大することになった[37]。これはまさに、スタートを公平に行うことで、競馬を魅力あるスポーツとしてさらに引き立てようとするラウスの試みがもたらした成果である。同時に、ここでのひきつけるべき観客とは、19 世紀後半以降という時代背景を鑑みれば、上流階級、中産階級、労働者階級を含む全階級であったと言えよう。

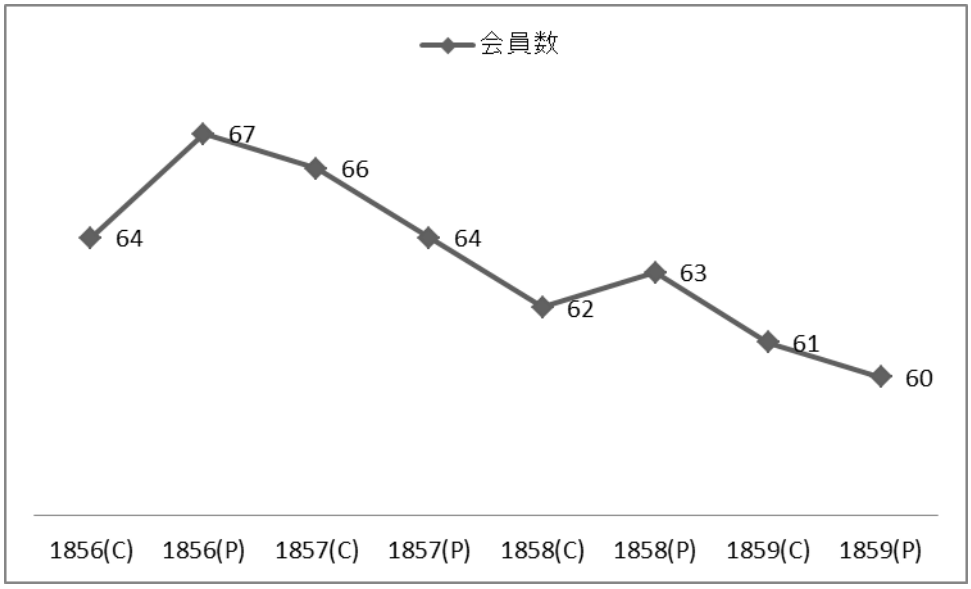
ラウスの時代、彼が認識していたように、競馬はまさに公共の利益であり、あらゆる階級に等しい割合で友好的感情を呼び起こす稀有なスポーツに変貌を遂げたが、その一方で、ジョッキー・クラブの会員の枠組みはどのように変化したのであろうか。次節では、クラブ会員の変化および諸外国への競馬ネットワークの拡大について論じる。

第二節　クラブ会員の変化と諸外国への競馬ネットワークの拡大

本節では、19 世紀後半、特に 1856 年以降のラウス時代におけるジョッキー・クラブ会員と競馬ネットワークの変容を主題とする。そのためには、まず当時の『競馬年鑑』を分析することから始めなければならない。

ラウスがクラブの財政担当になった、1856 年の『競馬年鑑（競走予定版）』におけるクラブの会員数は 64 名であり[38]、前年と比べてさらにその数を落としていた。同年の『競馬年鑑（競走結果版）』では、会員数は 67 名で[39]、わずかな回復が見られた。翌年の 1857 年の『競馬年鑑（競走予定版）』における会員数は 66 名[40]、同年の『競馬年鑑（競走結果版）』における会員数は 64 名であり[41]、再度減少している。続く 1858 年および 1859 年の『競馬年鑑（競走予定版）』、『競馬年鑑（競走結果版）』それぞれの会員数は、62 名、63 名、61 名、60 名と、ついに 60 名を割ろうかという数値になっている[42]。これらのデータは、表 12 として次ページで示しておいた。

（表 12）ラウス時代の 1856 年から 1859 年までのジョッキー・クラブ会員数の推移



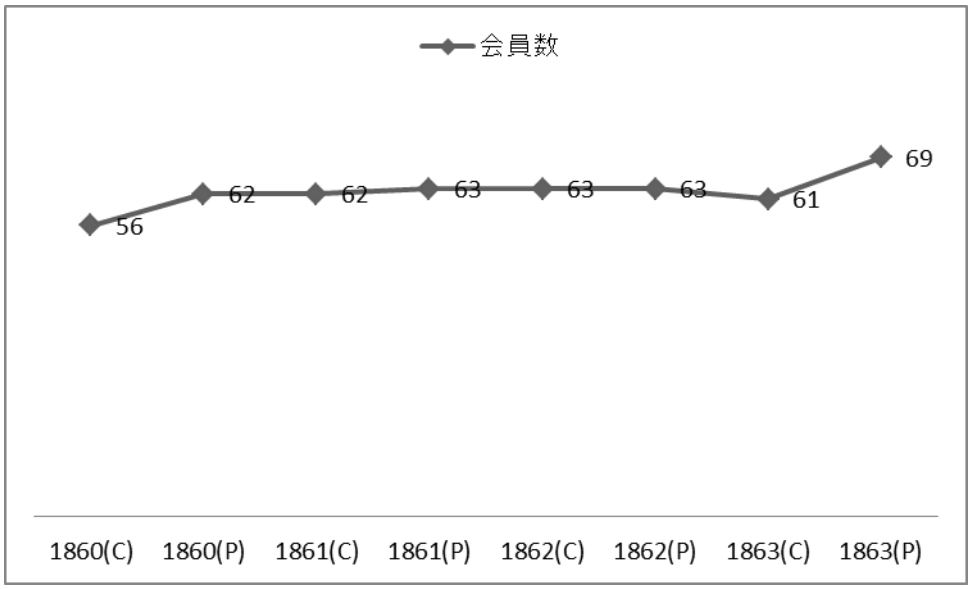
出典：*Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.84, 1856, p.424; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.84, 1856, p.543; *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.85, 1857, p.404; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.85, 1857, p.550; *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.86, 1858, p.403; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.86, 1858, p.554; *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.87, 1859, p.428; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.87, 1859, p.579 より筆者作成。

表 12 からわかるように、毎年会員数が変化しているが、これは入会ないし退会が常に起こっていたということである。19 世紀後半におけるラウス時代に入っても、クラブ会員は上流階級で占められていたが、それと同時に流動性の高いクラブ像が浮き彫りになる。では、1860 年以降のクラブ会員はどのように変化しているだろうか。引き続き、分析してみる。

1860 年の『競馬年鑑（競走予定版）』において、クラブの会員数はついに 60 名を割ることになったが、その数は 56 名であった[43]。同年の『競馬年鑑（競走結果版）』における会員数は 62 名であり[44]、やや回復を見せた。同版における大きな変化は、今まで巻末付近に掲載されていた会員リストが、巻頭付近に移動したことであろう。これは、会員を広く世間にアピールしようとする、クラブの意図の表れであるかもしれない。続く 1861 年の『競馬年鑑（競走予定版）』における会員数は 62 名[45]、同年の『競馬年鑑（競走結果版）』における会員数は 63 名であった[46]。そして、1862 年および 1863 年の『競馬年鑑（競走予定版）』、『競馬年鑑（競走結果版）』それぞれの会員数は、63 名、63 名、61 名、69 名と、

1863 年の『競馬年鑑（競走結果版）』では、会員数の回復が見られた[47]。これらのデータは、表 13 として下記でまとめておいた。

（表 13）ラウス時代の 1860 年から 1863 年までのジョッキー・クラブ会員数の推移



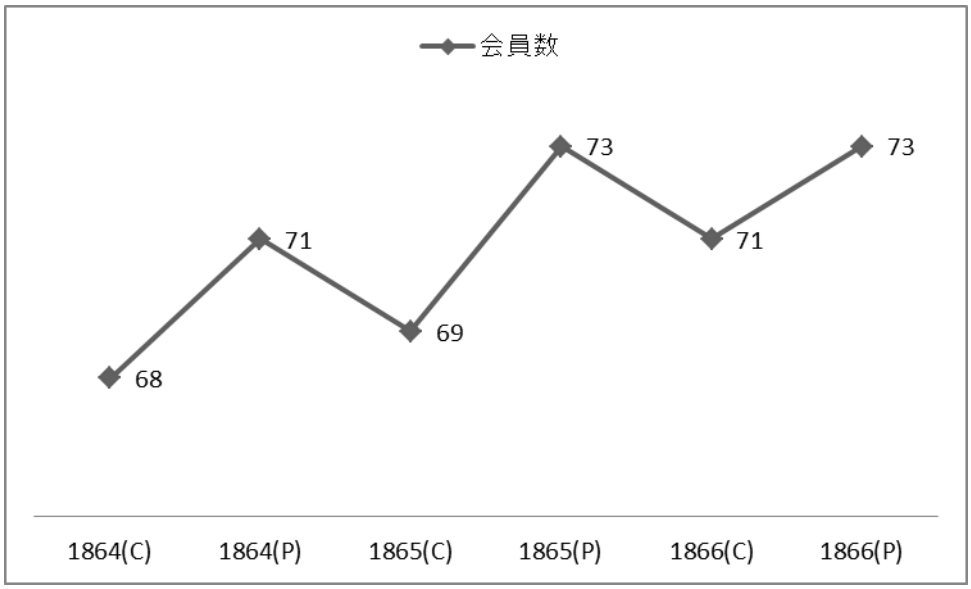
出典：*Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.88, 1860, p.425; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.88, 1860, p.lxxvii; *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.89, 1861, p.xxxv; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.89, 1861, p.lii; *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.90, 1862, p.xxxv; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.90, 1862, p.lvi; *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.91, 1863, p.xxxv; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.91, 1863, p.liv より筆者作成。

表 13 で示したように、わずか 3 年あまりで会員数が 13 名も増加し、ラウス時代において最大人数になったことがわかる。また、1863 年の『競馬年鑑（競走結果版）』では、従来のオランダ国王ウィレム 3 世（His Majesty the King of HOLLAND）に加えて、彼の息子であったオラニエ公（His Royal Highness the Prince of ORANGE）が、幹事を除く会員リストの最上位に掲載されるようになった[48]。ウィレム 3 世に関しては、彼が 1849 年にオランダ国王になる以前から、「オラニエ公」として会員リストに名前が掲載されていたが、この時初めて敬称付きの別枠掲載者が 2 名となった[49]。同版における会員数の激増との因果関係は不明であるが、少なくともジョッキー・クラブが新たに高貴な血統をクラブ内に迎え入れたことは指摘できよう。

ジョッキー・クラブは、その後も新会員の入会に関して攻勢を続けた。1864 年の『競馬

年鑑（競走予定版）』では、会員数 68 名と微減があったが[50]、同年の『競馬年鑑（競走結果版）』における会員数は 71 名となり[51]、ラウス時代において初めて 70 名台に乗った。加えて、同版では、ウィレム３世の上にプリンス・オブ・ウェールズ（His Royal Highness the Prince of WALES）の名前が掲載されており[52]、敬称付きの別枠掲載者が３名に増えた。続く 1865 年の『競馬年鑑（競走予定版）』における会員数は 69 名[53]、同年の『競馬年鑑（競走結果版）』における会員数は 73 名であった[54]。1865 年の『競馬年鑑（競走結果版）』では、新たにベルギーのブラバン公（His Royal Highness the Duke of BRABANT）が入会し、オラニエ公の下に掲載された[55]。そして、1866 年の『競馬年鑑（競走予定版）』、『競馬年鑑（競走結果版）』それぞれの会員数は、71 名と 73 名であった[56]。これらのデータは、表 14 として以下に示しておいた。

（表 14）ラウス時代の 1864 年から 1866 年までのジョッキー・クラブ会員数の推移



出典：*Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.92, 1864, p.lxv; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.92, 1864, p.lxxxiii; *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.93, 1865, p.ix; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.93, 1865, p.liv; *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.94, 1866, p.xxxvii; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.94, 1866, pp.lv-lvi より筆者作成。

1866 年の『競馬年鑑（競走予定版）』では、ブラバン公の即位に伴い、ベルギー王レオポルド２世（His Majesty the King of BELGIANS）がオラニエ公の上に掲載されるようになった[57]。そして、同年の『競馬年鑑（競走結果版）』において、大きな変化が見られた。

その変化とは、フランス・ジョッキー・クラブ（the French Jockey Club）の３名の会員が、ジョッキー・クラブ会員になったことである[58]。その３名とは、ラグランジュ伯（Count F. de Lagrange）、ルパン氏（M. Lupin）、キャプテン・セイモア（Captain H. Seymour）で、ジョッキー・クラブ会員と同格に扱われていた[59]。競馬史家のマイク・ハギンズは、「1860 年代において、クラブは依然としてニューマーケットの外では無力であり、その影響力は会員の態度と行動のために減少した」と述べているが[60]、当時の彼らのメンバーシップに見られる高貴かつグローバルなネットワークを考慮すれば、ハギンズの指摘は誤りであると言えよう。

そして、1870 年になると、ラウスの尽力により、イギリスにおけるいかなる平地競馬も、その開催がジョッキー・クラブの規則に従うと公表されない限り、『競馬年鑑』上に開催予定および結果を掲載されないことになった[61]。言い換えれば、1870 年代に入って、ジョッキー・クラブは、『競馬年鑑』を巧みに利用し、他の競馬場へ圧力をかけることで、自らの規則に従わない競馬場を切り分けたのである。

1870 年代になると、ジョッキー・クラブのネットワークはさらに拡大されていた。例えば、1872 年の『競馬年鑑（競走結果版）』には、後のコノート公であるアーサー王子（His Royal Highness Prince ARTHUR）とケンブリッジ公（His Royal Highness the Duke of CAMBRIDGE）が新たに会員になっている[62]。加入の経緯に関しては、同版に、「６月 14 日金曜日、アスコットのプライベートスタンドで、ジョッキー・クラブの一般会合が開かれた、アーサー王子殿下とケンブリッジ公殿下が満場一致でクラブメンバーに選ばれた」とあり[63]、こうした王室との深い繋がりから、クラブの貴族ネットワークの広大さを指摘できる。また、翌年 1873 年の『競馬年鑑（競走結果版）』には、ニューヨークのアメリカ・ジョッキー・クラブ会長、キャプテン・バルキリー（Capt. Bulkeley）なる人物が掲載されており[64]、1860 年代と比べてクラブのネットワークがさらに広範囲になっている様子がうかがえる。

こうした、クラブの高貴かつ広大なネットワークと、先のラウスによる『競馬年鑑』掲載を巡る地道な努力によって、1877 年、ついにジョッキー・クラブが作成した競馬施行規則が、イギリスの競馬施行規則へと変貌を遂げるのである[65]。この競馬施行規則の全国的伝播という具体的な形で、クラブの権威は確立され、同時に全階級にとっての「近代的」スポーツとして、競馬もまた確立されたのである。

（図 14）1876 年におけるジョッキー・クラブ会員

出典：David Oldrey, *The Jockey Club Rooms: A Catalogue and History of the Collection* (London, 2006), p.128.

【註】

[1] David Oldrey, *op. cit.*, p.108. ティグリスは、1815 年の 2,000 ギニー優勝馬である。これについては、例えば、以下を参照のこと。James Christie Whyte, *History of the British Turf: From the Earliest Period to the Present Day, Vol.II* (London, 1840), p.645.
[2] David Oldrey, *op. cit.*, p.108.
[3] Wray Vamplew, Joyce Kay (eds.), *op. cit.*, pp.97-98.
[4] *Ibid.*, p.98.
[5] 19 世紀前半で、ラウスが幹事の欄に掲載されているのは、1840 年版『競馬年鑑』が最後であり、1841 年版『競馬年鑑』から 1850 年の『競馬年鑑（競走結果版）』まで、幹事としての記載は一度もない。1840 年版『競馬年鑑』における幹事は、ラウス（Hon. Capt. Rous）、アンソン大佐（Hon. Col. Anson）、ベドフォード公（Duke of Bedford）の３名で、会員数は 80 名であった。*Racing Calendar*, Vol.68, 1841, p.669.
[6] David Oldrey, *op. cit.*, p.148. ベンティンク卿の政治的活動については、第四章でも特に触れなかったが、彼は庶民院議員であり、穀物法廃止に反対したプロテクショニストだった。サー・ロバート・ピール（Sir Robert Peel, 1788-1850）が自由貿易への転換を発表した際、良識と誠実さを兼ね備え、庶民院において多くのカントリー・ジェントルマンからの尊敬を得ていたベンティンク卿は、彼の副官ベンジャミン・ディズレーリ（Benjamin Disraeli, 1804-1881）とともに、新たに組織された保護貿易派のリーダーに決められたという。これに関しては、以下を参照のこと。Roger Mortimer, *op. cit.*, p.30. これに際し、ベンティンク卿は馬主としての活動には終止符を打ったが、ジョッキー・クラブの幹事職は退いておらず、1848 年の『競馬年鑑（競走予定版）』にも幹事として記載がある。これについては、以下を参照のこと。*Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.76, 1848, p.421. しかし、ベンティンク卿は、1848 年９月 21 日に心臓発作を起こし、46 歳の若さでこの世を去った。ベンティンク卿の死については、以下を参照のこと。*The Gentleman's Magazine*, Vol.30, 1848, pp.539-542.
[7] James Rice, *History of the British Turf: From the Earliest Period to the Present Day, Vol.II* (London, 1879), p.260.
[8] Robert Black, *The Jockey Club and Its Founders: In Three Periods*, p.281.
[9] *Racing Calendar*, Vol.63, 1836, p.557.
[10] Robert Black, *The Jockey Club and Its Founders: In Three Periods*, p.281. ハベナの父は、名種牡馬バードキャッチャー（Birdcatcher）である。また、バードキャッチャーの父の父は、第三章第二節で取り上げた、1810 年の第 31 回ダービー馬ホエールボーンであり、その名血ぶりがうかがえる。また、アステロイドの父は、2,000 ギニー、セントレジャーの勝ち馬で、こちらも大種牡馬として名高いストックウェル（Stockwell）である。
[11] James Rice, *op. cit.*, p.260.
[12] David Oldrey, *op. cit.*, p.157.
[13] James Rice, *op. cit.*, p.260. 彼の馬主としての勝負服は、ハーレクインであった。これに関しては、例えば以下を参照のこと。*Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, p.xlix.
[14] Wray Vamplew, *op. cit.*, p.93.
[15] *Ibid.*, p.94.
[16] *Ibid.*, pp.94, 105.
[17] Mike Huggins, *op. cit.*, p.177.
[18] *Ibid.*
[19] Wray Vamplew, *op. cit.*, p.93.
[20] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.77, 1849, pp.1-35. その７回の開催とは、クレ

イヴァン開催（Craven Meeting）、第１回春開催（First Spring Meeting）、第２回春開催（Second Spring Meeting）、7 月開催（July Meeting）、第１回 10 月開催（First October Meeting）、第２回 10 月開催（Second October Meeting）、ホートン開催（Houghton Meeting）である。同一競馬場での年７回開催は、イギリス競馬で最多である。2,000 ギニーと 1,000 ギニーは、ともに第１回春開催で行われた。

[21] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.79, 1851, pp.6-7.

[22] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.80, 1852, pp.5-6.

[23] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.82, 1854, pp.7-8.

[24] *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.76, 1848, p.461.

[25] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.77, 1849, p.395.

[26] *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.77, 1849, p.460.

[27] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.78, 1850, p.408; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.78, 1850, p.427; *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.79, 1851, p.425; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.79, 1851, p.440.

[28] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.80, 1852, p.441.

[29] *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.80, 1852, p.465.

[30] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.81, 1853, p.457.

[31] *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.81, 1853, p.510.

[32] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.82, 1854, p.465; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.82, 1854, p.539; *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.83, 1855, p.434; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.83, 1855, p.517.

[33] Wray Vamplew, *op. cit.*, p.93.

[34] Robert Black, *The Jockey Club and Its Founders: In Three Periods*, p.326. ラウスと同様に、長きにわたって幹事を務めたサー・チャールズ・バンベリーも、終身会長としての役割を果たしたと言われている。

[35] Wray Vamplew, *op. cit.*, p.116.

[36] *Ibid.*, pp.116-117.

[37] *Ibid.*, p.117.

[38] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.84, 1856, p.424.

[39] *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.84, 1856, p.543.

[40] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.85, 1857, p.404.

[41] *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.85, 1857, p.550.

[42] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.86, 1858, p.403; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.86, 1858, p.554; *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.87, 1859, p.428; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.87, 1859, p.579.

[43] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.88, 1860, p.425.

[44] *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.88, 1860, p.lxxvii.

[45] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.89, 1861, p.xxxv. この版では、1860 年の『競馬年鑑（競走結果版）』と比較して、会員の入退会が全くなかった。

[46] *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.89, 1861, p.lii.

[47] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.90, 1862, p.xxxv; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.90, 1862, p.lvi; *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.91, 1863, p.xxxv; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.91, 1863, p.liv.

[48] *Ibid.*

[49] 彼らは、名誉会員（Honorary Members）として位置付けられていたため、これまでの一般会員数には含めていない。名誉会員に関する記載については、例えば以下を参照のこと。*Racing Calendar (Races Past)*, Vol.94, 1866, pp.lv-lvi.

[50] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.92, 1864, p.lxv.

[51] *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.92, 1864, p.lxxxiii.

[52] *Ibid.*

[53] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.93, 1865, p.ix. この版では、会員リストがほぼ先頭に掲載されている。
[54] *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.93, 1865, p.liv.
[55] *Ibid.*
[56] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.94, 1866, p.xxxvii; *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.94, 1866, pp.lv-lvi.
[57] *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.94, 1866, p.xxxvii.
[58] *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.94, 1866, pp.lv-lvi.
[59] *Ibid.* フランス・ジョッキー・クラブは、イギリスのジョッキー・クラブに倣って 19 世紀前半に設立された団体であり、フランス史上初のクラシック・レースは、1836 年に創設されたジョッケクルブ賞（Prix du Jockey Club）、通称フランスダービーである。
[60] Mike Huggins, *op. cit.*, p.182.
[61] Wray Vamplew, *op. cit.*, pp.94-95.
[62] *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.100, 1872, pp.lx-lxi.
[63] *Ibid.*, p.lvii
[64] *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.101, 1873, pp.lix-lx.
[65] 新しい競馬施行規則に関しては、1876 年の『競馬年鑑（競走結果版）』に、「先のホートン開催で議論され、例の目的のために設立された委員会によって提出された新しい競馬規則を考慮するために、1876 年 12 月 18 日の月曜日にロンドンで開かれたジョッキー・クラブの特別会合で、下記の規則が 1877 年 1 月 1 日に施行されるべきこと、しかも、全ての元の規則が、その日から廃止されるということが決議された」とある。*Racing Calendar (Races Past)*, Vol.104, 1876, p.xxix.

第三部

競馬に見る階級性と賭け

第六章　競馬の「賭け」が有する意義

イギリス人が賭けを好む人種であるということは、おそらく多くの人々にとっての共通認識であろう。昨今の例を挙げるならば、ウィリアム王子とキャサリン妃の第二子の性別がどちらであるのか、またどのような名前が付けられるのかに関して、平然と賭けが行われていたという実情がある。他国の人々にとっては、王族が賭けの対象となるなど、到底承服できない由々しきことかもしれない。しかし、イギリスにおける賭けの歴史を研究したジョン・アシュトンが、「おそらく賭け（gamble）には普遍性があり、それは人間性に本来備わっているようである」と指摘したように[1]、こうした賭けは、まさにイギリス人の気質そのものであると言える。

しかし、一言で賭けといっても、明確な階級社会を有するイギリスにとって、それは各階級で大きく意味合いが異なるものであった。本章で扱うが、潤沢な資金を持つ上流階級の賭けと、わずかな資金しか持たない労働者階級の賭けには、大きな差異があった。当然、賭け金の額やその意味合いも違えば、賭けを行う場所も明確に区別されていたのである。

賭けにはこうした諸相があり、イギリスを代表するスポーツである競馬が、特に賭けと密接な関係を持っていた点に留意しながら、論を進めていく。

第一節　上流階級の「賭け（betting）」―社交空間としてのクラブ―

本節では、上流階級の賭けがどこで行われていたのか、また特に競馬における賭けが、彼らにとってどのような意味を持っていたのかについて考察していきたい。

先に触れたように、上流階級の人々と賭けの間には密接な関係があった。特に、彼らがその主たる庇護者となっていた、競馬、闘鶏、拳闘といった「パトロン・スポーツ」には、賭けという要素が必要不可欠であった。ジョッキー・クラブ研究者である 19 世紀末のロバート・ブラックが批判的に指摘するように、当時、カドガン卿（Lord Cadogan）、ポートランド公、ウェストミンスター公は、賭けのグループ（the betting persuasion）に参加しない人物として知られていたが、競馬場改革者のダーラム卿（Lord Durham）を含めた大多数は、競馬と賭け（betting）が不可分であると信じていた[2]。

イギリスの 19 世紀末において、賭けが深刻な社会問題になっているというブラックの批判は、次のようにジョッキー・クラブ自体にも向けられている[3]。

「彼らが賭け（betting）の問題において、最初から罪人であったことは否定されえず、賭けはいつも競馬の災いである。彼らが、賭けと結びつかない競馬についての認識を持たなかった先祖の慣習にならっただけ、というのは事実であるが、組織されたリング（Ring）がなかった頃でも、ジョッキー・クラブのメンバーは、比較的異議のない賭け方（mode of wagering）で、大部分が一対一（one against another）で賭けた。」

この一対一での賭けは、18 世紀中頃の近代競馬初期に主流であったマッチ・レースの際によく行われたが、これは極めて上流階級らしい賭けである。先にも指摘したが、この形式はある種の中世騎士の決闘を彷彿とさせるもので、競馬の賭けによって上流階級自らの威信をぶつけ合う擬似的決闘という意味合いを持っていたといえる。

ここでブラックが指摘するリングとは、競馬場内に設けられたベッティング・リング（Betting Ring）のことで、上流階級の人々が賭けを行った主要な場所の一つである。例えば、1844 年の『絵入りロンドン・ニュース』に掲載されたダービーの日のイラストでは、トップハットと燕尾服を身にまとった多くの上流階級の人々が、ベッティング・ポスト（Betting Post）という柱を中心にして囲われたベッティング・リングに集まる様子が描かれていた[4]。このダービーの日の新聞記事は、「ベッティング・リングの光景は、ダービーの日にエプソムを訪れたことのあるすべての人々に、刺激的な場所として忠実な描写である」と述べているが[5]、多くの観客を集めるクラシック・レースにおいて、上流階級が集まるベッティング・リングは注目の的であり、その華やかさが人々の目に映ったことであろう。

19 世紀中頃、ダービーはすでに名声を獲得し、10 万人の観客を集めるほどの一大イベントに成長していたが、そこでの上流階級の賭けは実に華やかかつ豪快であった。19 世紀中頃のジョッキー・クラブ幹事として知られるジョージ・ベンティンク卿のいとこで、著名な日記の執筆で知られるチャールズ・グレヴィルは、ベンティンク卿の 1843 年のダービーでの賭けの様子を以下のように記している[6]。

「私は、この偉大な投資に少しばかり関係していたが、いまだかつて聞いたことがない巨額が賭けられた（have been wagered）。ジョージ・ベンティンクは、約 12 万ポンド勝つために、彼がゲイパー（Gaper）と名付けた馬に賭けた。」

12 万ポンドもの巨額を得るためには、それだけ多くの金額を賭けねばならず、こうした賭け方は、潤沢な資金を持つ上流階級ならではの賭け方であった。ベンティンク卿にとって、自らが名付けた馬に巨額の賭け金を託すことは、自らの威信を賭けることであった。

上流階級の人々は、騎乗したままベッティング・リングで自らが予想する馬に賭け、そのままコースに赴き、時には競走馬と並走することもあった。現金は使用されず、すべての取引は私的な賭け台帳（private betting books）に記録された後、公式の決算日である月曜日に清算されるというのが通例であった[7]。賭けを行う際に現金を必要としなかった事実は、お互いの信頼のもとに賭けが行なわれていたことの証明である。しかし、19 世紀中頃になると、賭けの負債を支払わない者、すなわち債務不履行者の問題が顕著になり、同時代の競馬改革者であるジョージ・ベンティンク卿が、彼らを徹底的に競馬界から締め出した[8]。上流階級として守るべきルールを守らず、競馬の公平性を乱す債務不履行者の追放は、ベンティンク卿が着手した競馬のスポーツ化の一つであり、重要な改革であった。

ベッティング・リングは競馬場内に設けられた区画であったが、上流階級が賭けを行う場所は、競馬場内にとどまらない。競馬場外での事例としては、ジョッキー・クラブのクラブハウスに存在したベッティング・ルーム（Betting Room）を挙げることができる。こうした特別な部屋で、信頼できる相手と賭けを行うことは、まさに上流階級の人々の特権であった。1844 年の『絵入りロンドン・ニュース』には、ニューマーケットのベッティング・ルームのイラストが掲載されており、ここでもやはり身なりの良い上流階級の人々が大勢集まっていた[9]。このイラストは、ニューマーケット第 1 回春競馬のものであり、クラシック・レースの初戦かつダービーの試金石である 2,000 ギニーの賭けが行われていた[10]。ダービーに出走予定の競走馬にとって、2,000 ギニーでの競走成績は自らの実力の証明であり、それはすなわちダービーでの人気に直結するものであった。

これまで、上流階級の賭けについて、競馬場の内と外、すなわちベッティング・リングとベッティング・ルームの事例を取り上げたが、この他に、上流階級の人々に賭けの場所を提供した代表的組織として、タタソールズ（Tattersall's）を強調しておかねばならない。タタソールズは、当初競走馬のセリを行う業者であり、リチャード・タタソール（Richard Tattersall）によって 1766 年に創設された[11]。18 世紀末になると、本業に加えて、ジョッキー・クラブのためにハイド・パーク・コーナー（Hyde Park Corner）の事務所兼厩舎施設内に賭けのための特別な部屋を設けたが、ランビーによると、これにより競馬場外での賭け（off-course betting）は新たな時代に入ったという[12]。また、ヴァンプリューが指摘

するように、19 世紀中頃に労働者階級を対象とした違法なブックメーカーが横行するようになるが、この時期のタタソールズでの賭け（betting）は上流階級の会員に限定されており、彼らがお互いに賭けたことから、違法とはならなかった[13]。

またヴァンプリューによれば、タタソールズは 1840 年代に 2 ギニーの入会金を徴収したが、入会は紹介状を持つ者のみに許可され、小規模な商人などを「身を滅ぼす類の者たち」として故意に退けたことで、1844 年の会員数はわずか 350 名であったという[14]。こうしたタタソールズの排他的入会システムは、ジョッキー・クラブと酷似しているが、ジョッキー・クラブを競馬と賭けという二つの側面から支える外部組織として必要不可欠な要素であっただろう。上流階級のための信頼できる社交空間の形成には、身分的切り分けが絶対条件であり、そうすることでリスペクタブルなクラブ像を社会に広く提示できた。

ここでジョッキー・クラブに関して、彼らの持っていた社交ネットワークを確認しておきたい。ジョッキー・クラブは、イギリスの競馬統括団体としての側面が強調されがちであるが、その本質は設立当初から一貫して、上流階級の社交クラブである。その証拠に、ジョッキー・クラブが設立されたとされるパル・マルは、長い間チョコレート・ハウスやコーヒー・ハウス、タヴァーンで名高く、多くのジェントルマンが集まる場所であり、当初ジョッキー・クラブのメンバーが集まっていたスター・アンド・ガーターもそうしたタヴァーンの一つであった[15]。

こうしたタヴァーンやコーヒー・ハウスにおける彼らの社交を通して、様々なクラブが誕生することになるが、当時、上流階級の人々が、複数のクラブに所属することは決して珍しいことではなかった。例えば、初期のジョッキー・クラブを支えた幹事サー・チャールズ・バンベリーと競馬を通して親交があった、後の第 12 代ダービー伯エドワード・スタンリーは、1774 年に排他的なロンドンのクラブであるホワイツ（White's）に入会を許され、その年父のストレンジ卿（Lord Strange）と同様にジョッキー・クラブのメンバーになっている[16]。ホワイツとは、17 世紀末、セント・ジェームズ・ストリートに創設された有名クラブであり、19 世紀中頃にはその会員数を 500 名に制限し、政治的にはトーリー（Tory）党派で構成されていた[17]。また、ジョージ・ベンティンク卿も、先のチャールズ・グレヴィルも、ジョッキー・クラブのメンバーであり、ホワイツのメンバーでもあった[18]。

こうした上流階級の社交空間を考慮すると、ジョッキー・クラブの本質が理解されるが、その繋がりはホワイツだけに留まらない。例えば、1764 年、パル・マルで、後のブルック

スズ（Brookes's）となるゲーミング・クラブ（gaming club）のアルマックス（Almack's）が創設されたが、18 世紀後半におけるホイッグ党の政治家で、ジョッキー・クラブのメンバーでもあったチャールズ・ジェイムズ・フォックス（Charles James Fox, 1749-1806）は、このクラブの創設時におけるメンバーであり、ここで賭けを楽しんだ[19]。この他にも、彼は、主にカントリー・ジェントルマンが訪れたセント・ジェームズ・ストリートのブードゥルズ（Boodle's）のメンバーでもあった[20]。再度強調したいが、このように安全かつ安心なクラブで賭けを楽しむことができるのは、明確な社会的出自を持つ上流階級の人々の特権である。そして、賭けと極めて密接な関係を持っていた競馬の統括団体であるジョッキー・クラブが、上流階級の一流社交場である有名クラブに所属するメンバーを抱えていた事実は、このクラブがリスペクタブルな団体像を設立当初から有していたことを浮き彫りにしてくれる。

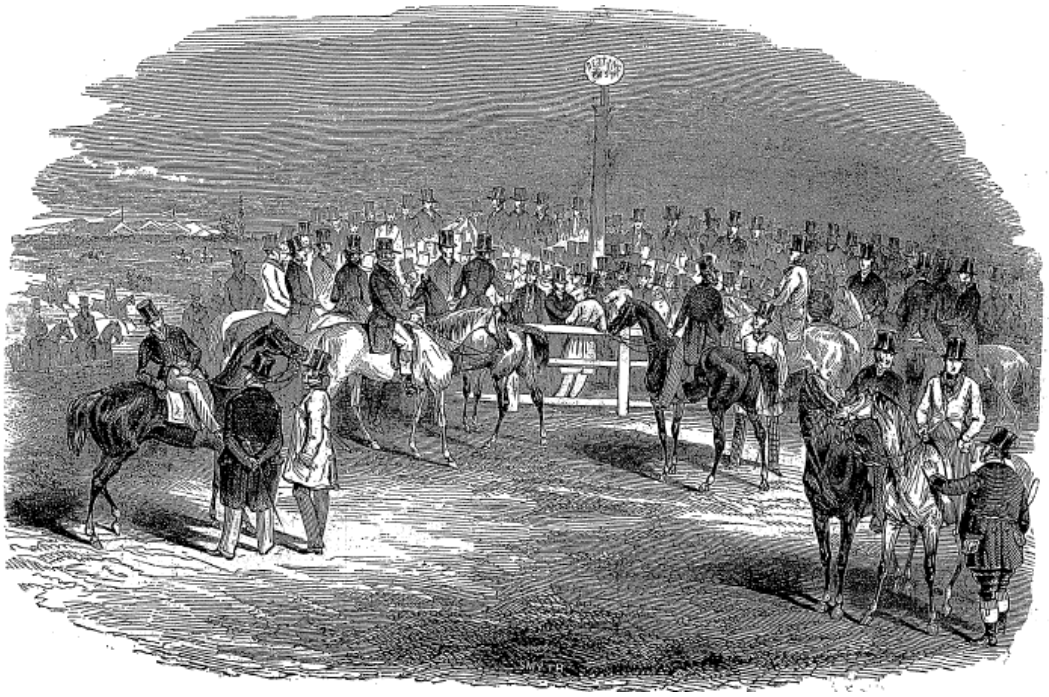
1836 年、ジョッキー・クラブは、『タイムズ』において、これらのロンドンの有名クラブ会員との繋がりを明文化したが、それは以下の内容であった[21]。

「クレイヴァン（Craven）開催において、ニューマーケットのニュールームズで開かれたジョッキー・クラブの会員たちの会議で決議された―

ホワイツ、ブルックスズ、ブードゥルズの会員は、いかなる競馬開催の間も、各半年分の会費の支払いのみでニュールームズとコーヒールームに入場を認められる。そうした人が、同年中の他の競馬開催に参加する場合、ニュールームズの会員として認められ、すべて通例の料金に服するべきである。」

ジョッキー・クラブとこれらの有名クラブとの密な繋がりが、社交を通じた上流階級の更なる賭けを促したことは想像に難くない。彼らの賭けは競馬に限らず、クラプソンが指摘するように、「社会的威信を持つ富裕層は、民衆を締め出す高い入場料を要するクラブやサロンで、ルーレット、赤と黒、バカラ、シェマンドフェールやその他のカードゲームを行っていた」のである[22]。このように、上流階級の人々は、競馬場内に存在したベッティング・リングや、競馬場外に設けられた特別な部屋、さらには各人が所属するクラブなどで、競馬を含めた様々な賭けを行っていたのである。

（図 15）19 世紀中頃のベッティング・リング



出典：*The Illustrated London News*, 25 May, 1844, p.337.

第二節　労働者階級の「賭け（gambling）」と社会問題―ブックメーカーの登場と発展―

労働者階級の賭けは、工業化以前の時代から、日々の労働の対価として彼らに大変重宝されてきた。19 世紀中頃になると、特に多くの労働者階級が観客として競馬場を訪れるようになった。ヴァンプリューは、労働者階級の競馬参加に関して、中産階級と余暇に対する嫌悪感を共有していた「リスペクタブル」な労働者は競馬に行かなかったが、その他の多くの労働者は競馬に行ったとし、伝統的に多くの競馬が地方の休日と関係し続けていたと述べている[23]。では、労働者階級は具体的にどのような賭けを行っていたのだろうか。

労働者階級の賭けの主流であったのは、ブックメーカーを通しての賭けである。ブックメーカー事業は、18 世紀末にニューマーケットでハリー・オグデン（Harry Ogden）という人物が開始したと言われている[24]。イツコウィッツが指摘するに、初期のプロのブックメーカーは、時には貴族の賭け手たち（aristocratic bettors）と結合し、時には食いものにして、極めて限定的かつ特殊化された世界で運営を行っていた[25]。この指摘と、ブックメーカー事業の発祥がジョッキー・クラブの本拠地ニューマーケットであった点を考慮すると、ブックメーカーはもともと上流階級による競馬の賭けを対象にした事業であったと言える。

さて、イツコウィッツは、1840 年代に、ウィリアム・ターピン（William Turpin）が競馬場外において来る者すべてと賭けを行うと申し出た新種のブックメーカーの先駆けとなったこと、ウィリアム・デーヴィス（William Davies）、別名「リヴァイアサン」・デーヴィス（“Leviathan” Davies）が、賭けの一覧表（list）を用いたブックメーカーとして著名になったことを挙げている[26]。ヴァンプリューによれば、競馬場が入場料を取るようになった時期は 1840 年以降であり[27]、この点と 1840 年代にターピンやデーヴィスのような新しい形態のブックメーカーが登場したことを照らし合わせて考えるならば、これは明らかに労働者階級の賭け市場への更なる参入を見込んでいたと言える。なぜなら、競馬場外での賭けの申し込みは、労働者階級にとって入場料を支払うことなく賭けに参加できるというメリットがあり、賭けの一覧表は彼らの馬券の購買意欲をより一層煽ったと言えるからだ。そのため、ブックメーカー事業のすそ野が広がったのは、19 世紀中頃、特に 1840 年代以降のことであると指摘できる。

ブックメーカーには、大きく分けて競馬場内で営業をするものと、競馬場外で賭けを請け負うものという二つの種類があり、特に競馬場内のブックメーカーには、潜在的な顧客の注意を引くために、できるだけ目立つことができるという利点があった[28]。一方の競馬場外のブックメーカー、とりわけ街路のブックメーカーは、一定の金銭的自立を達成した労働者階級の人々にとって地元の賞賛の的であり、事業の継続は、街路ブックメーカーが地元の信頼に足る存在であることと同義であった[29]。

先に、ブックメーカー事業が拡大したのは、1840 年代以降であると述べたが、1844 年の賭けに関する上院特別委員会（House of Lords Select Committee on Gaming）では、賭け「地獄」（gambling ‘hells’）に対するより強い警察の介入が勧告された[30]。ここでは、「gaming」と「gambling」が併用されているが、対象となったのが労働者階級の賭けであることは疑いようがなく、早くも 1840 年代に彼らの賭けに対する規制が検討され始めたと言える。

こうした労働者階級の賭けに対する規制は、その後も継続して行われた。例えば、ハギンズが指摘するように、1845 年の賭けに関する法（the Gaming Act）は、法律によって賭け（gambling）（ここでハギンズは、すなわち「betting」とあえて補足している）の負債を無効にしたが、建前としては、賭け（betting）に伴う危険性から賭け（betting）を制限する試みであり、金銭がより合理的かつ道徳的観念を持った方法で使用されることを望んだものであった[31]。

しかし、法の期待とは裏腹に、ブックメーカーが顧客から現金を要求するようになり、店舗型のブックメーカーといえるベッティング・ハウス（betting houses）が急成長する結果となった[32]。ここでのブックメーカーによる現金の要求とは、現金賭けの促進を指している。そのため、1845 年の賭けに関する法がブックメーカー事業全体に与えた影響は大きく、結果としてベッティング・ハウスが急激にその数を増やし、労働者階級が賭けを行う主要な場所の一つとなった。以下で、19 世紀中頃における労働者階級のベッティング・ハウスでの賭けに関する一例を提示しておきたい[33]。

「ミドルセックス治安判事裁判所―ウィザム氏は、なぜその囚人（エドワード・フレデリック・タワーゼイ、19 歳）が短期間で多額の金（100 ポンド）を使い切ることができたのかを問うた。検察官は、囚人が近隣のベッティング・ハウス（the betting-houses）で賭けをした（gambled）ことを突き止めたと答えた。ウィザム氏は、これらのベッティング・ハウスが今や社会の厄介者になっており、議会がそれらを一掃する正当性をすぐに認識することを望むと述べた。非常に多くの徒弟の少年たちが、それらによって競馬の賭け（betting on horse racing）ですぐに富を築くことができると信じ込まされ、彼らの親方から金品を奪うよう仕向けられた。彼（ウィザム氏）は、彼（タワーゼイ）に禁固 12 カ月と重労働の判決を下した。」

労働者階級の 19 歳の若者が 100 ポンドもの大金を賭けに使うということは、まさに身の丈に合わない行為であり、賭けを請け負うベッティング・ハウスは、多くの徒弟の少年たちに悪影響を与えたことであろう。加えて、競馬の賭けで富を得るために、親方から金品を奪うという蛮行は、伝統的なイギリス社会に根付く親方と徒弟の関係を崩壊させる危機となった。この労働者階級によるベッティング・ハウスでの賭けは、閉鎖的な空間で行われたが、こうしたある種の特権的な賭けを上流階級が黙認するはずはなかった。事実、1853 年のベッティング・ハウス法（Betting Houses Act）で、ベッティング・ハウスは違法とされた[34]。ベッティング・ハウスの運営はもちろんのこと、賭けの一覧表（lists）を公開し、賭けを引き受ける（to take bets）旨を広告したブックメーカーは、100 ポンドの罰金と 6 カ月の禁固刑に処せられた[35]。

ハギンズが指摘するように、この法は労働者階級の賭け（gambling）に対する入念な取り締まりであったし、加えてこの法が、書簡による信用賭け（betting on credit by

correspondence）やクラブのメンバー間での賭け（betting）に当てはまらないよう形成されたため、タタソールズや他の場所、競馬場内で行われた上流階級の信用賭け（credit bets）を守った[36]。しかし、ヴァンプリューは、労働者階級が賭けを諦めず、彼らの賭け（betting）の場所が街路へ移動したこと、加えてブックメーカーも街路をより安全と感じ、営業の場所を変えたと述べている[37]。また彼は、同法がイングランド以外に適用されなかったことから、ブックメーカーのスコットランドへの移転を促したことを指摘している[38]。こうした点から、ブックメーカーが法による規制を巧みにかいくぐり、様々な方法で継続的に事業を行っていたことがわかる。また、労働者階級の賭けの伸長とブックメーカーの発展は、まさに表裏一体であった。

上流階級の賭けが特権的な庇護を受ける一方で、労働者階級の賭けに対しては様々な法規制が試みられたが、同時代の労働者階級にとって、競馬での賭けは依然として魅力的な娯楽であった。その一例を、以下で紹介したい[39]。

「私はある紳士の使用人です。タウンセンド師と共に、ニューポート・パグネルの 3 マイル右手のチックレーで暮らしており、おじによって遺された 300 ポンドを持っていました。私は血管を患ったのが原因で職を離れ、ロンドンにやってきました。私がしばらく無職だった頃、競馬の賭けの世界（a system of betting upon horse racing）に足を踏み入れました。私はお金を使ってしまい、結局クイーン・アン・ストリート 23 番のドゥフォー氏の使用人になりましたが、そこでも私は賭けを続けました。」

これだけで一般化はできないが、遺産を無計画な形で賭けに使ってしまうほど、労働者階級にとって競馬の賭けは、あわよくば富を築くことができると思える魅力的なものであったと言える。さて、これまで見てきたように、労働者階級の対極にある上流階級は、競馬場内と競馬場外の特権的な場所で賭けを行っていたが、この競馬場内と競馬場外での賭けは、特に 19 世紀後半になると、労働者階級内をも切り分ける主要因の一つとなった。なぜなら、今度は街路での賭けが規制の対象となっていくからである。

この具体的な動きは 1874 年に見られ、街路での賭け（street betting）を防止する法律が制定された[40]。しかし、クラプソンによれば、同法の影響を避けて、多くのブックメーカーがスポーツ紙に広告を掲載しつつヨーロッパ本土に事務所を設立したことで、現金による賭け金（cash stakes）が、当局からの干渉を恐れることなく送金されたという[41]。同

時代において、信用賭け（to bet on credit）という手法を選択できない労働者階級には、合法的な選択肢として、この現金賭け（money bets）を外国に送金するか、もしくは競馬場内で現金賭けを行うかの二者択一が迫られた[42]。ここで強調すべきは、現金賭けの外国送金が、ブックメーカーによる苦肉の策であったことである。この方法は、ブックメーカーが法の抜け道を模索した結果導き出されたものであり、確かに違法ではなかったが、合法であったとも言い難く、潜在的な危険性を秘めていた。その反面、労働者階級の競馬場内での賭けは、誰が見ても明らかに合法であり、様々な法律の制定によって、彼らの賭けが競馬場内に集約されていったと指摘できる。

これらの点と、先に挙げた 19 世紀後半のジョッキー・クラブ幹事ヘンリ・ジョン・ラウスの「競馬は公共の利益であり、嗜好の類似を生みだす気晴らしは、等しい割合で友好的感情を呼び起こす」という競馬を全階級的な娯楽として捉える発言を合わせて考えてみたい。結論から言えば、これはまさに競馬場内における空間を指している。確かに、競馬場内には上流階級のためのベッティング・リングや、特別観覧席であるグランド・スタンドなどが設けられており、労働者階級との間には明確な身分的切り分けがあった。しかし、一定の規律ある競馬場という空間内では、そうした切り分けが行われると同時に、ラウスが言うように競馬はあらゆる階級にとって健全な合理的娯楽だった。このことは、競馬場内で行われる上流階級および労働者階級の賭けが、その本質は異なれども合法的とみなされた事実からも明らかであろう。19 世紀中頃から、労働者階級の賭けは様々な形で規制されたが、1874 年法の成立により、競馬場外での賭けが規制され、競馬場内における賭けが更なる後ろ盾を得たことで、競馬場の内と外の切り分けもまた行われたのである。

【註】

---

1 John Ashton, *op. cit.*, p.2.
2 Robert Black, *op. cit.*, p.306.
3 *Ibid.*, p.344.
4 *The Illustrated London News*, 25 May, 1844, p.337.
5 *Ibid.*, p.338.
6 Christopher Hibbert (ed.), *op. cit.*, p.194.
7 James Lambie, *The Story of Your Life: A History of the Sporting Life Newspaper (1859-1998)* (Leicester, 2010), p.32.
8 特に、ベンティンク卿が競馬改革を行ったグッドウッド競馬場では、債務不履行者は同競馬場に入場できず、入場した場合は起訴されるという警告が発せられていた。これに

ついては、以下を参照のこと。*Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, p.108.

[9] *The Illustrated London News*, 27 April, 1844, p.269.

[10] *Ibid.*

[11] タタソールズの現在の活動および歴史に関しては、タタソールズのホームページを参照のこと。http://www.tattersalls.com/（2015 年 1 月 5 日参照）

[12] James Lambie, *op. cit.*, p.32.

[13] Wray Vamplew, *op. cit.*, pp.203-204.

[14] *Ibid.*, p.205.

[15] John Timbs, *Clubs and Club Life in London: With Anecdotes of Its Famous Coffee Houses, Hostelries, and Taverns, from the Seventeenth Century to the Present Time* (London, 1872), p.445.

[16] ジョン・ジョゼフ・バグリー（海保眞夫訳）『ダービー伯爵の英国史』平凡社、1993 年、258–259 頁。

[17] John Timbs, *op. cit.*, pp.92-103.

[18] Ralph Nevill, *London Clubs: Their History and Treasures* (London, 1911), p.160.

[19] John Timbs, *op. cit.*, p.71. フォックスの政治的活動については、以下が詳しい。David Schweitzer, *Charles James Fox, 1749-1806: A Bibliography* (Westport, 1991).

[20] *Ibid.*, pp.103-104.

[21] *The Times*, 13 Apr., 1836. これは、1828 年に作成された、新しい「Rules and Orders of the Jockey Club」の第 13 項を緩和したものと思われる。

[22] Mark Clapson, *op. cit.*, p.1. クラプソンによれば、これらのゲームに対しては「gaming」という語が使用されたという。

[23] Wray Vamplew, *op. cit.*, p.134.

[24] Wray Vamplew, Joyce Kay (eds.), *op. cit.*, p.50.

[25] David C. Itzkowitz, op. cit., p.9.

[26] Ibid., pp.11-12.

[27] Wray Vamplew, *op. cit.*, p.18.

[28] David C. Itzkowitz, op. cit., p.14.

[29] Ibid., pp. 14-15.

[30] Jim Orford, Kerry Sproston, Bob Erens, Clarissa White, Laura Mitchell, *Gambling and Problem Gambling in Britain* (Hove, 2003), p.3. この箇所は、特に 19 世紀と 20 世紀のイギリスにおける賭けに関する法律（gambling legislation）に詳しい。

[31] Mike Huggins, *op. cit.*, p.195.

[32] Jim Orford, Kerry Sproston, Bob Erens, Clarissa White, Laura Mitchell, *op. cit.*, p.3.

[33] *The Times*, 01 Jun., 1852.

[34] Jim Orford, Kerry Sproston, Bob Erens, Clarissa White, Laura Mitchell, *op. cit.*, p.3.

[35] Wray Vamplew, *op. cit.*, p.204.

[36] Mike Huggins, *op. cit.*, p.195.

[37] Wray Vamplew, *op. cit.*, p.205.

[38] *Ibid.*, pp.205-208.

[39] *The Times*, 28 Feb., 1852.

[40] Mark Clapson, *op. cit.*, p.24.

[41] *Ibid.*

[42] Wray Vamplew, *op. cit.*, p.207.

第七章　近代イギリスにおける「賭け」とその規制

本章では、筆者の主たる研究テーマである競馬に付随する「賭け」が、特に 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、深刻な社会問題として規制の対象となっていくプロセスについて分析する。その際、中心的な役割を担ったのが、中産階級の人々によって、1890 年に結成された全国反賭博連盟である。ここでは、人々に大きな災いをもたらすとされた不道徳な賭けが規制され、新たな社会秩序が構築されていく様子を描き出したい。特に、中産階級は、「道徳的な」自分たちと「不道徳な」労働者階級との切り分けを、その社会改良によって行なっていくが、両者の亀裂が全国反賭博連盟の活動に明確に表れている点に留意したい。

第一節　全国反賭博連盟（National Anti-Gambling League）の設立とその背景

本節で取り上げる全国反賭博連盟は、1890 年に *The Young Man* という雑誌の編集者であったフレデリック・アンソニー・アトキンスによって結成された。その全国反賭博連盟は、国教徒以外のプロテスタント教派の人々が集結したことで成立したと言われており[1]、中産階級主導による、上流階級および労働者階級の賭けに対する規制を試みた。その本部はロンドンのウェストミンスターに置かれ、組織は全国的なもので、マンチェスター、ヨークには支部が存在していた。

全国反賭博連盟の結成は、19 世紀後半から 19 世紀末にかけての、賭けの深刻な社会問題化に起因している。全国反賭博連盟の設立以前においても、公権力が、特に労働者階級の野放しの賭博を不道徳なものとみなし、その規制に乗り出していた事実がある。例えば、全国反賭博連盟結成の前年である 1889 年、『タイムズ』紙上に、ロンドンのクラブにおける賭博の取り締まりに関する以下の記事が掲載された[2]。

「最近、警察が、賭博（gambling）が体系的に続けられていた二つのロンドンのクラブへの一斉検挙を行ったこと、また、多くの（中には良い社会的地位にある）人々の逮捕に関しては、管理権を有する裁判所によって、提起された事実と法律の諸問題が裁定されるまでコメントすることはできない。しかし、いずれにしても、当局の行動は、全階級の思慮深く、公徳心に富む人々の間で成長している感情に対して無感覚でないことを示しており、様々な形式における賭博（gambling）の増大は、ほとんど国家的危機に

匹敵する大きさを呈している。」

記事にあるロンドンのクラブの名称は特定できないが、おそらく上流階級の社交クラブの類ではないと思われる。前章で、上流階級と労働者階級それぞれの「賭け」が持つ意味合いについて論じたが、お互いの「賭け」の空間は見事なまでに切り分けられており、上流階級の人々が労働者階級のコミュニティに意図的に参入することはなかったし、その逆もまた然りであった。史料に登場する「（中には良い社会的地位にある）人々」とは、おそらく中産階級の人々であろう。本章における主題は、中産階級による「賭け」の規制であるが、当然のことながら、すべての中産階級が「賭け」に参加しなかったわけではないことは、彼らの競馬界との深い関係を考慮すれば明らかである。

先の史料が掲載された翌月にも、労働者階級の賭博が大きな社会問題として『タイムズ』紙面を賑わわせていた。ここでは、ある不良集団の逮捕事例を挙げておく[3]。

「先頃から、サリー運河のほとり、オールド・ケント・ロード・ブリッジとペッカムのグレンゴール・ブリッジの間は、日曜日に賭博（gambling）の目的で集まった若者と少年の大集団で一杯であり、その不道徳なものに終止符を打つという目的を持った地方警察が、昨日の午後急にその場に現われ、25 人を逮捕した。」

こうした街中での不道徳な賭けが、社会不安を増大させたことは想像に難くない。19 世紀末のイギリスにおけるこうした状況が、全国反賭博連盟の設立に繋がったと言えよう。

ではここで、全国反賭博連盟の創設者であるアトキンスの著作、*Moral Muscle, and How to Use It: A Brotherly Chat with Young Men* に見られる賭博に対する意識を見てみよう。彼は、人生における戦いで失敗、絶望に追い込まれる例として、まず「lack of faith（信仰心の欠如）」を挙げている[4]。これは、キリスト教の観点から見て、当然のことと言えよう。二つ目は、「ill health（不健康）」である[5]。人間は、健康であって初めてその職務を全うでき、様々な困難に立ち向かっていくことができる。そして、三点目が「gambling（賭博）」であり、彼は、この著作の中で「どんなに輝かしく、前途有望な生涯も、賭博によって台無しにさせられる」と記しており[6]、全国反賭博連盟の結成者として、賭博に対する強い反発心を持っていたことが窺える。加えて、「信仰心の欠如」や「不健康」と並ぶ形で「賭博」が挙げられているという事実は、先の『タイムズ』の史料で示したように、当時のイギリ

ス社会にとって賭博が極めて重大な社会問題となっていたことを表しているといえよう。

また同連盟の著名なメンバーには、ヨークにおける貧困問題の深刻さを調査した人物として知られるベンジャミン・シーボーム・ラウントリー（Benjamin Seebohm Rowntree）がいる[7]。彼の著作、*Betting and Gambling: A National Evil* は、ヴィクトリア時代のイギリスにおける賭け（gambling）に対する人々の嫌悪を記したものであるが、メンバーのこうした積極的な著作活動も、中産階級による社会改革運動の一つと言えるだろう。特に、クラプソンが言うように、「賭博がイギリス中の風紀を乱し、イギリスの名声を傷つけることに対する解決策は、禁酒運動で部分的にモデル化された福音主義的運動の中で求められた」ので[8]、こうした反賭博の動きは、様々な社会問題と関連する側面を持っている。

さて、全国反賭博連盟の関心は、主に、労働者階級の賭け（gambling）にあり、彼らは、労働者階級の賭けが無責任かつ第二の貧困の主要因であると考えていた[9]。先のラウントリーの著作、*Betting and Gambling: A National Evil* の序文には、「がんのように、有害なもの（賭け、gambling）はその土地の全体にわたってその有毒な根を広げて、それらは、悲惨、貧困、気弱さおよび犯罪を生んだ」とあり[10]、賭けの引き起こす諸問題が指摘されている。

また全国反賭博連盟は、ジョッキー・クラブの本拠地であったニューマーケットの飲食店で行われている違法な賭けを野放しにしている彼らに対して、『タイムズ』紙上でたびたび意見交換を行っていた[11]。これは、競馬の庇護者たる上流階級中心のクラブに対する、社会改革を目指す中産階級の挑戦といえるものであった。そればかりでなく、全国反賭博連盟は、年に二回『会報』を発行するなど、メディアを最大限に利用していた。

ここで、全国反賭博連盟の『会報』から、彼らの連盟像を紐解いていきたい。まず、『会報』に掲載された全国反賭博連盟のメンバー構成に関して取り上げる。創設から８年を経た 1898 年 11 月における全国反賭博連盟のメンバー構成をみていくと、掲載されているメンバーは 31 名で、会長職はアバディーン伯（The Right Hon. Earl of Aberdeen）が務めていた[12]。副会長の数が 22 名と多いが、ミース伯（The Right Hon. The Earl of Meath）を筆頭に、「Dean」や「Bishop」といった、特に宗教関連の職に就くメンバーが数多く存在しており、例えば、副会長職に就いていたザ・ディーン・オブ・ノリッチ（The Dean of Norwich, D. D.）、ザ・ディーン・オブ・カンタベリー（The Dean of Canterbury）、ザ・ビショップ・オブ・ピーターバラ（The Bishop of Peterborough）といった人々を挙げることができる[13]。

（図 16）『会報』に掲載された 1898 年 11 月時の全国反賭博連盟のメンバー構成

THE

NATIONAL ANTI-GAMBLING LEAGUE,

13, Victoria Street, Westminster.

President:

THE RIGHT HON. EARL OF ABERDEEN.

Vice-Presidents:

THE RIGHT HON. THE EARL OF MEATH.
LORD KINNAIRD.
THE DEAN OF NORWICH, D.D.
THE DEAN OF CANTERBURY.
JOHN CORY, ESQ.
G. F. WATTS, ESQ., R.A.
F. A. ATKINS, ESQ.
THE BISHOP OF PETERBOROUGH.
THE REV. DR CLIFFORD.
LIEUT-COL. SETON CHURCHILL.
THE REV. DR. J. MONRO GIBSON.
THE REV. HUGH PRICE HUGHES, M.A.
SIR GEORGE WILLIAMS.
R. CORY, ESQ.
THE DEAN OF ROCHESTER, D.D.
THE REV. CANON BARKER, M.A.
THE REV. J. E. C. WELLDON, M.A
REV. PREB. H. W. WEBB-PEPLOE, M.A.
THE REV. J. W. HORSLEY, M.A.
REV. E. J. KENNEDY.
REV. C. BULLOCK, B.D.
W. T. STEAD, ESQ.

Committee:

REV. THAIN DAVIDSON, D.D.
REV. AND HON CANON E. LYTTELTON.
SIR DOUGLAS FOX.
R. S. CLOUGH, ESQ.
REV. HERBERT, MUIR, M.A.

Treasurer:

FRANK A. BEVAN, ESQ., 54, LOMBARD STREET, E.C.

Hon. Secretary:

JOHN HAWKE, ESQ., LAPFORD HOUSE, NEW BARNET.

Secretary:

MR. E. O. FOLD, 13, VICTORIA STREET, WESTMINSTER.

出典：*The Bulletin*, Vol.2, No.17, 1898, p.108.

次に、連盟の目的だが、会報には、「賭事（betting）」と「賭博（gambling）」のすべての形式に、精力的かつ断固とした反対を示し、すべての階級に主題についての有用な情報を普及すること[14]、とある。連盟の主な関心が、労働者階級の賭け（賭博）の根絶にあったことは間違いないが、それに加えて、全階級な賭けの根絶も意図していたことが窺える。

また、彼らの活動手段は、

① リーフレット、パンフレット、小冊子などの広範囲の配布
② 国のあらゆる地域での講義および市民集会の組織
③ 現行法の公平な適用
④ 望ましい議会における修正法案の促進

という４点であった[15]。特に、①、②のような人々の目に大々的に触れる活動から、③、④のような法律へ挑戦する意気込みも垣間見える。

最後に、「メンバー・シップ」の項目に関してだが、ここでは、「連盟のメンバーは、（中略）より健全な世論を促進するのを支援することが期待される」、また「彼らは、郵便料金前払いで、連盟の会報などの発行物を受け取るだろう」との記述があり[16]、名目的な参加ではなく、実体の伴う参加が求められているといえよう。また、連盟の発行物を受け取ることで、常に連盟の活動内容を理解し、その価値観を共有していたと思われる。

第二節　全国反賭博連盟の具体的活動と世紀転換期における全国反賭博連盟の運動の高まり

本節では、まず全国反賭博連盟の具体的活動について見ていきたい。この団体の中心的人物に関してだが、それは、名誉事務局長であったジョン・ホーク（John Hawke）という人物であった[17]。彼は、1892 年、タイムズ紙のコラム「MISSING WORD」において、くじ（ロッタリー）と題した記事を執筆し、当時行われていた大規模なくじに対する批判を展開した[18]。このくじは、競馬の賭けとは異なるが、一攫千金を狙って賭けを行うという意味で、明らかに賭博の一種であったので、全国反賭博連盟によって問題視された。

ホークは、1893 年に、*A Blot of the Queen's Reign: Betting and Gambling, Appeal to the Prince of Wales* という小冊子を出版した[19]。こうした事実からも、全国反賭博連盟の設立当初からの積極的活動が理解されよう。この小冊子は、「競馬場は、国の風紀を乱す巨大な原動力である」というビーコンズフィールド卿（Lord Beaconsfield）の指摘で始まるが[20]、そこには全国反賭博連盟の競馬の賭けに対する強い批判が表れている。

また、ホークは、1894 年のタイムズの記事で以下の 3 点を、広く世間にアピールしている[21]。それは、

① 連盟が宗教的、政治的見解によって完全に束縛を解かれていること
② ハーバート・スペンサー氏が支持者の一人であること
③ 議会法案の一つが先の保守党政府の有名議員の手中にあること

という 3 点で、特に②の内容が与えた社会的影響は極めて大きかったと推測される。当時名声を博していたスペンサーを支持者と公言することで、自らの組織がイギリス社会を改良していく上で、有意義な存在であるというアピールになったと考えられるし、同時に彼の社会哲学に影響を受けた部分もあったと思われる。

そうした中で、上流階級とのせめぎ合いが起こっていくが、全国反賭博連盟は、情報発信と法の支配への試みを続けていく。では次に、彼らのロンドンにおける大規模デモの一例を見てみたい。

このデモは、設立後まもなくの 1890 年 6 月 15 日（日）の午後、ピカデリーのセント・ジェームズ・ホールで行われたが、その抗議内容は、増加する賭事と賭博の災い（the increasing evils of betting and gambling）に対するものであった[22]。デモの統括は、連盟のメンバーであったヒュー・プライス・ヒュース師（The Rev. Hugh Price Hughes）で、デモの始まりは、連盟の名誉事務局長アトキンスによるダーラム主教（the Bishop of Durham）からの手紙の朗読であり、その内容は「賭博の災い（The evil of gambling）は、至る所で強力であるが、実に北部において痛ましく広がっている」というものであった[23]。主教から北部の実情が伝えられることで、その深刻さが浮き彫りになった。

続いて、J・W・ホースレー師（The Rev. J. W. Horsley）による演説が行われたが、演説では、「賭博（gambling）に対する人の意見は、常に他のすべての道徳的問題において確かな感情の徴候が見られる」ことが語られ、また多くの人々が、「プリンス・オブ・ウェールズはどうだ？」と呼応し[24]、彼の賭けに対して批判が加えられた。このプリンス・オブ・ウェールズは、後のエドワード 7 世で、彼は賭けと競馬に情熱を注いだ人物として知られている。ここでは、国を代表するロイヤル・ファミリーの一員が、イギリスにとって大きな社会問題となっている賭けに興じる態度が、非難の対象となっている。デモの最後では、統括者のヒュー・プライス・ヒュース師が、「新聞における賭事情報の

公表（the publication of betting intelligence）を完全に禁じる、簡潔な議会法令が通過されるべきだ」と提案し、加えて、「賭博（gambling）と賭事（betting）は窃盗に繋がる、決闘が人を死に至らせるように」と主張した[25]。賭けの不道徳さを大規模なデモでアピールすることで、彼らの価値観を一般に浸透させ、新しい社会秩序を構築していこうという明確な意思が見られた。

以後、全国反賭博連盟の活動はさらに深まっていったが、1895 年には、競馬研究者のロバート・ブラックが、「ベッティング・リング」に対する彼らの撲滅活動について、『タイムズ』紙に記事を投稿している[26]。

「その連盟（「the Anti-Gambling League」、全国反賭博連盟）の目的、即時の目的は、「ベッティング・リング」の名前で知られる、渦巻いたコイルのような有害なヘビを殺せないとしても、撲滅することです。他方で、連盟の相手は、いくぶん急激な成長をしており、競馬という我々のほとんど太古からのスポーツの繁栄に依存している「リング」の支援を、我々に断言しています。（中略）サー、実のところ、奇想と独断的見解に満ち、競馬と賭け（betting）について重要なことを知っており、ターフの明敏な友人であった故アドミラル・ラウスが、彼の競馬に関する小本の中で約 30 年前に予言した危機に、我々はついに到達したのです、その本のある箇所で、彼は「ターフの利益と賭け（betting）の利益との間には、かけ離れた差異がある」と言っているし、他では、「賭けを行う紳士たち（the betting gentlemen）の（賭けによる）利益は、まさに二次的な事柄である」、さらにもう一度、「私は、常に我々を消滅させる恐れがある敵、過大な賭け（excessive gambling）をないがしろにしないだろう」と言っています。（中略）しかし、実のところ、「ベッティング・リング」とは何なのでしょうか？（中略）事実、「ベッティング・リング」は公衆（the public）に生き続けています、年々数が増えている「ベッティング・リング」の不断の存在が証拠です。」

競馬の賭けを長く支えてきたベッティング・リングを撲滅させることは困難であったが、ここから、彼らの賭博撲滅に対する意気込みの高さが垣間見える。

その全国反賭博連盟は、賭博の恐ろしさを世に知らしめるため、彼らの『会報』を効果的に利用していた。『会報』には、「自殺と犯罪（SUICIDE AND CRIME）」という項目が設けられており、賭博によって命を絶った人や、罪を犯した人の事例を挙げている。

例えば、以下がある[27]。

「炭鉱労働者（MINER.）―ジョシュア・ウェロック、34 歳、ガーフォース（Garforth）、9 月に首つり自殺を図った。検死官：「彼は競馬をやっていたのか？」、立会人（兄弟）：「はい」、検死官：「お金をすってしまったのか？」、立会人：「はい」。

労働者階級の身の丈に合わない賭博が、人生を終わらせることになると、警鐘が鳴らされている。非常に端的ではあるが、1898 年 11 月の『会報』には、こうした事例が 48 件紹介されていた[28]。

最後に、20 世紀初頭における全国反賭博連盟の運動の高まりについて見ていく。19 世紀から 20 世紀への世紀転換期において、上流階級も労働者階級の賭博に対して認識を変化させた。1901 年に、賭博に関する上院特別委員会が設置されたことは、その一例であろう。しかし当初、全国反賭博連盟が意図した賭博の撲滅には至らず、特にジョッキー・クラブメンバーの圧力により、数々の法案が却下され、その後、上院ではいかなる制限も街路での賭けに照準を合わせるべきだという意見が主流をなしていく[29]。

松井良明氏は、1906 年に、反賭博法に賛成する自由党が勝利したこと、ロンドンのブックメーカーによる警察の買収事件など、社会の闇の部分が大きく取りざたされたことで、「街路賭博法」が議会を通過したという成果を、上流階級と中産階級の議員の多くが労働者階級の賭事を社会的かつ経済的に問題だとする見方を共有しつつあった結果だとしている[30]。筆者もこの意見に賛成で、移りゆく時代の中で、上流階級と中産階級の、労働者階級の賭博への反対という部分的な意識融合がなされたと考えているし、1906 年に「街路賭博法」という具体的な法律が完成したことで、全国反賭博連盟の活動が、この時期にある一定の成功を収めたと結論づけている。

この全国反賭博連盟は 20 世紀半ばで消滅してしまったが、20 世紀の間、イギリスの賭博（gambling）に強い影響を遺したと言うことが適正であると、先行研究で指摘されている[31]。この点を鑑みても、彼らの 19 世紀末から 20 世紀にかけての社会改良運動は、大きな意義を持っていたと言えるであろう。

【註】

[1] Mark Clapson, *op. cit.*, p.29.
[2] *The Times*, 16 May, 1889, p.9. (Issue 32700)
[3] *The Times*, 17 Jun., 1889, p.12. (Issue 32727)
[4] Frederick Anthony Atkins, *op. cit.*, p.59.
[5] *Ibid.*, p.61.
[6] *Ibid.*, p.62.
[7] Emma Casey, 'Gambling and Consumption: Working-Class Women and UK National Lottery', *Journal of Consumer Culture*, Vol.3, 2003, p.246.
[8] Mark Clapson, *op. cit.*, p.30.
[9] Emma Casey, op. cit., p.246.
[10] Benjamin Seebohm Rowntree, *Betting and Gambling: A National Evil* (London, 1905), p.vii.
[11] 例えば、以下の史料が挙げられる。*The Times*, 15 Jan., 1895, p.6. (Issue 34474)
[12] *The Bulletin*, Vol.2, No.17, 1898, p.108.
[13] *Ibid.*
[14] *Ibid.*
[15] *Ibid.*
[16] *Ibid.*
[17] Mark Clapson, *op. cit.*, p.31.
[18] *The Times*, 17 Dec., 1892, p.7. (Issue 33824)
[19] John Hawke, *A Blot of the Queen's Reign: Betting and Gambling, Appeal to the Prince of Wales* (London, 1893).
[20] *Ibid.*, p.3.
[21] *The Times*, 08 Jun., 1894, p.8. (Issue 34285)
[22] *The Times*, 16 Jun., 1890, p.6. (Issue 33039)
[23] *Ibid.*
[24] *Ibid.*
[25] *Ibid.*
[26] *The Times*, 18 Feb., 1895, p.13. (Issue　34503)
[27] *The Bulletin*, Vol.2, No.17, 1898, p.109.
[28] *Ibid.*, pp.109-112. 職業別では、肉屋の店員（BUTCHER'S ASSISTANT.）やポーター（PORTER.）が比較的多かった。
[29] 松井良明『ボクシングはなぜ合法化されたのか―英国スポーツの近代史―』平凡社、2007年、154−158 頁。
[30] 同上書、158 頁。
[31] Jim Orford, Kerry Sproston, Bob Erens, Clarissa White, Laura Mitchell, *op. cit.*, p.8.

終章

おわりに

本論文では、18 世紀中頃におけるジョッキー・クラブの成立以降、近代スポーツの祖と言われるイギリス競馬が、近代化のプロセスとともにいかなる発展を遂げてきたか、競馬の担い手である上流階級が、いかにして各時代に対応し、長い時間をかけて競馬を全階級の「合理的娯楽」、また「国民的スポーツ」へと昇華させたのかを検証してきた。

まず第一章では、ジョッキー・クラブの設立と初期の活動について述べた。ジョッキー・クラブは、上流階級の社交クラブとして成立したが、同時に由緒正しい競馬の歴史を持つニューマーケットを本拠地とした。彼らは、時代にそぐわなくなったヒート競走を真っ先に廃止し、本拠地の競馬をよりよく管理するために、競走後の後検量である「第一の指示」や馬主の服色登録に関する「第二の指示」を出した。これらの事例は、革新的とまでは言えず、その効力もニューマーケットに限定されていたが、スポーツに不可欠な公平性の萌芽が、クラブの揺籃期の段階から見られた。

加えて、第一章では、クラブの公式機関誌として機能した『競馬年鑑』の創刊についても論じた。この『競馬年鑑』の発行開始によって、ジョッキー・クラブが明確にその影響力をニューマーケット以外の地へ伸ばそうと企図していることが判明した。『競馬年鑑』には、競走予定や競走結果を中心に様々な情報が掲載されていたが、年々広範囲に購読者を抱えるようになった。同時に、ジョッキー・クラブがこの媒体を通して、彼らの競馬施行規則や購読者リスト、メンバーリストに見られるリスペクタブルな団体像などの伝達を行い、全国的な競馬統括団体としての組織化を推進したことを述べた。特に、クラブの後期発展期であるジョージ・ベンティンク卿時代においても、ジョッキー・クラブ会員は、上流階級のみで構成されており、設立から長い年月を経てもなお、厳しい閉鎖性を維持していた点を指摘した。

第二章は、まずサー・チャールズ・バンベリーの改革について取り上げたが、特に彼の三つの功績を高く評価した。それはすなわち、『競馬年鑑』と『血統登録書』の発行を担うようになったジェイムズ・ウェザビーをクラブに招聘したこと、クラシック・レースとして人気を博すことになるダービーとオークスの創設に関与したこと、プリンス・オブ・ウェールズの所有馬エスケープによる不正競走疑惑事件で毅然とした対応を取ったことである。これらは、ジョッキー・クラブがその権威を本拠地に留まらせておくの

ではなく、緩やかではあったが、全国的な競馬統括団体へ向けての意識を深化させていったことを示す事例であり、揺籃期とは大きく異なる初期発展期のクラブ像を提示した。

またここでは、『血統登録書』の発行によってサラブレッドという新種が創出されたことで、ジョッキー・クラブの高貴さが際立ったことを指摘した。19 世紀に入ってしばらくすると、競馬の様相は一変し、上流階級が独占していた競馬に多くの中産階級や労働者階級が参加し始めた。特に、富裕な中産階級が、馬主として競馬界に押し寄せてきた。ジョージ・ベンティンク卿時代を通して馬主登録数は激増し、中産階級を含む「ミスター」層が 7 割強を占めるまでになった。高貴さの象徴であるサラブレッドを所有することは、社会的上昇を切に望む中産階級にとって格好の手段となったが、ジョッキー・クラブは、そうした人々がサラブレッドを所有することを快く思っておらず、クラブの厳しい入会制限など、様々な策を講じていたことを、合わせて論じた。

さて、ジョッキー・クラブは、第三章で扱った 18 世紀末から 19 世紀中頃にかけて、イギリスの平地競馬を統括する団体として大きな飛躍を遂げた。その飛躍の過程の中で、特に、クラシック・レースとして人気を博すことになるダービーとオークスの創設にジョッキー・クラブメンバーが関与し、それ以後、代理人であるウェザビーとの繋がりや競馬に対して積極的な会員がクラシック・レースに数多く参加することで、規則とレース参加の両面で事実上エプソム競馬場を支配下に置くようになった。

また、ここでは、クラシック・レースが特に馬主の血統意識を大きく変える契機となったことを指摘した。それらの勝ち馬の血統は重宝され、後世にその名血と名声を遺す権利を得ることになったが、そうした情報を提供したのが、ジョッキー・クラブの出版物であった『競馬年鑑』における種牡馬広告と『血統登録書』であり、それらは常にサラブレッドの「純血」の枠組みを見直し、規定し続けた。

19 世紀に入ると、ジョッキー・クラブの本拠地ニューマーケットでも 2000 ギニーと 1000 ギニー、二つのクラシック・レースが創設されたが、それらは、エプソムなどのクラシック・レースを模範にすると同時に、より独自の方法で洗練された。ニューマーケットで、競馬本来の「貴族的」要素が色濃く残るマッチ・レースが行われていたことが示すように、「貴族的」な伝統が儀式化される傾向が強く、クラシック・レースでも、上流階級会員を中心に、「貴族的」かつ「近代的」な要素が、どの競馬場よりもより強く融合し、ハイレベルなスポーツとしての競馬が展開されていたことに留意せねばならない。

第四章では、イギリス地方競馬場の代表的存在として、特にジョッキー・クラブと繋

がりの深かったグッドウッド競馬場を取り上げた。ジョッキー・クラブは 19 世紀前半を通して、その影響力を着実に他の競馬場へ拡大していった。「判例集」の掲載開始や、1828 年における新競馬施行規則の制定および､それを採用しない競馬場からの紛争解決依頼の拒否などである。そして、1830 年代から 1840 年代にかけて、当時ジョッキー・クラブの幹事を務めていたジョージ・ベンティンク卿が、近代競馬に不可欠な要素を盛り込んだ様々な改革をグッドウッド競馬場で行ったこと、すなわち、彼の「貴族的」かつ「近代的」要素を融合させた競馬の形態が、ジョッキー・クラブのネットワークを通して、全国へ浸透することを指摘した。

第五章では、ヘンリ・ジョン・ラウスが、ハンディキャッパーとして培った知識を活用しながら競馬改革を行なったこと、一般的に停滞期と捉えられているベンティンク卿時代とラウス時代の間の約 10 年間においても、クラブの運営や、その本質である閉鎖的性格がさほど変容していなかったことを論じた。また、ラウス時代においては、高貴なネットワークが国外にも広がり、リスペクタブルなクラブ像をさらに発信し得たことを指摘した。こうしたクラブの地道な努力によって、1877 年に、ジョッキー・クラブの競馬施行規則が、イギリスの競馬施行規則となった。これにより、クラブの権威は完全に確立され、同時に全階級にとっての「近代的」スポーツ、競馬もまた確立されたのである。

続く第六章では、上流階級の賭けと労働者階級の賭けには、「betting」と「gambling」という大きな差異があったことを強調した。特に、競馬を中心とした「パトロン・スポーツ」の庇護者であった上流階級の人々にとって、賭けという要素は不可欠であった。彼らの賭けは、主として彼らの社会的出自の証明である会員制クラブに併設された特別な部屋や競馬場内のベッティング・リングなどで行われた。

こうした上流階級の人々の競馬場内および競馬場外での賭けを支えたのが、タタソールズであったことを忘れてはならない。なぜなら、タタソールズとジョッキー・クラブとの密な関係が、上流階級の更なる社交空間の拡大を促したからである。

その一方で、労働者階級の賭けは、19 世紀中頃におけるブックメーカーの伸長とともに、度々法規制の対象となった。彼らの度を超えた賭けが、競馬場外での賭け、すなわちベッティング・ハウスや街路での賭けを規制させる要因となった。

しかし、1874 年法は、同時に労働者階級の競馬場内での賭けが合法であることを強調することにもなった。結果として、競馬場に足を運ぶ労働者は、賭けと不可分である競

馬を堪能し、競馬場の外で賭けを行う労働者との差異化を経験した。これは、まさにラウスの描いた全階級的な競馬像の具現化であり、特に、上流階級、労働者階級双方にとって、競馬が合理的娯楽になったことの証左であった。

最後の第七章では、全国反賭博連盟の活動に焦点を当てるとともに、特に 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、「賭け」が深刻な社会問題として規制の対象となっていく過程について考察した。「賭け」の規制の過程は、他の多くの社会問題を解決していく際の事例と、極めて似通った部分があった。特に、19 世紀から 20 世紀にかけての転換期に、上流階級と中産階級による、労働者階級の賭博への反対という部分的な意識融合がなされ、1906 年に「街路賭博法」という具体的な法律が完成したことで、全国反賭博連盟の活動がある一定の成功を収めたと結論づけた。

本論文では、競馬を通しての上流階級と中産階級の身分的切り分けはある程度達成できたと考えているが、労働者階級に関しては、「gambling」という限定的な側面でしか考察できなかった。彼らが、特に 19 世紀後半以降、いかにして競馬と関わったかを明らかにすることで、より一層、全階級的な競馬像が見えてくるであろう。また、競馬研究に関しては、サラブレッドの伝播、すなわち「血の移動」から「インペリアル」、「グローバル」な世界を描き出すという難題が残されている。これは、19 世紀にイギリスが築き上げた帝国内で行われた競馬を含め、イギリスで不要と判断された血が、異国の地で長い年月をかけて新たな血統を創出していく過程を考察することでもある。これらの点は、今後の課題としたい。

【　参考文献表　】

（史料）

定期刊行物

- *Annual Register*, Vol.69, 1828
- *Bell's Life*
- *The Bulletin*, Vol.2, No.17, 1898, Vol.2, No.18, 1899
- *General Stud Book,* Vol.1, 4th (ed.), 1858, Vol.2, 2nd (ed.), 1832, Vol.3, 3rd (ed.), 1855, Vol.4, 2nd ed., 1840, Vol.6, 2nd ed., 1857
- *The Gentleman's Magazine*, Vol.20, 1750, Vol.25, 1755
- *The Gentleman's Magazine*, Vol.30 (New Series), 1848
- *The Illustrated London News*
- *Racing Calendar*, Vol.1, 1773, Vol.2, 1774, Vol.3, 1775, Vol.4, 1776, Vol.5, 1777, Vol.6, 1778, Vol.7, 1779, Vol.14, 1786, Vol.22, 1795, Vol.23, 1796, Vol.24, 1797, Vol.25, 1798, Vol.27, 1800, Vol.28, 1801, Vol.29, 1802, Vol.41, 1814, Vol.44, 1817, Vol.55, 1828, Vol.63, 1836, Vol.64, 1837, Vol.65, 1838, Vol.66, 1839, Vol.68, 1841, Vol.69, 1842, Vol.70, 1843, Vol.71, 1844, Vol.72, 1845, Vol.73, 1846, Vol.74, 1846
- *Racing Calendar (Races to Come)*, Vol.75, 1847, Vol.76, 1848, Vol.77, 1849, Vol.78, 1850, Vol.79, 1851, Vol.80, 1852, Vol.81, 1853, Vol.82, 1854, Vol.83, 1855, Vol.84, 1856, Vol.85, 1857, Vol.86, 1858, Vol.87, 1859, Vol.88, 1860, Vol.89, 1861, Vol.90, 1862, Vol.91, 1863, Vol.92, 1864, Vol.93, 1865, Vol.94, 1866, Vol.100, 1872, Vol.101, 1873
- *Racing Calendar (Races Past)*, Vol.75, 1847, Vol.76, 1848, Vol.77, 1849, Vol.78, 1850, Vol.79, 1851, Vol.80, 1852, Vol.81, 1853, Vol.82, 1854, Vol.83, 1855, Vol.84, 1856, Vol.85, 1857, Vol.86, 1858, Vol.87, 1859, Vol.88, 1860, Vol.89, 1861, Vol.90, 1862, Vol.91, 1863, Vol.92, 1864, Vol.93, 1865, Vol.94, 1866, Vol.96, 1868, Vol.97, 1869, Vol.100, 1872, Vol.101, 1873, Vol.102, 1874, Vol.103, 1875, Vol.104, 1876
- *The Times*

その他の史料

- An Inhabitant, *Some Particulars Relating to the History of Epsom, Compiled from the Best Authorities; Containing a Succinct and Interesting Description of the Origin of Horse Racing, and of Epsom Races, with an Account of the Mineral Waters Match, and the Two Celebrated Places of Durdans and Nonsuch, &c. &c.* (Epsom, 1825)
- Atkins, Frederic Anthony, *Moral Muscle, and how to Use it: A Brotherly Chat with Young Men* (New York, 1890)
- Brown, C. F., *The Turf Expositor* (London, 1829)
- Defoe, Daniel, *A Tour Through the Whole Island of Great Britain* (London, 1722-24)
- Hawke, John, *A Blot of the Queen's Reign: Betting and Gambling, Appeal to the Prince of Wales* (London, 1893)
- Hibbert, Christopher, (ed.), *Greville's England: Selections from the Diaries of Charles Greville, 1818-1860* (London, 1981)
- Pond, John, *The Sporting Kalendar: Containing A distinct Account of what Plates and Matches have been run for in 1751, An Article for making a Newmarket Match, A Description of a Post and Handy-Cap Match, A Table shewing what Weight Horses are to carry for the Give and Take Plates; and of what Matches have been Run for at Newmarket, from October the 1st, 1718, to October 1751, &c.* (London, 1751)
- Rous, Henry John, *On the Laws and Practice of Horse Racing, etc.* (London,1866)
- Rowntree, Benjamin Seebohm, *Betting and Gambling: A National Evil* (London, 1905)
- Trollope, Anthony, *British Sports and Pastimes, 1868* (London, 1868)

（欧文文献）

- Anon., *Horse-Racing: Its History and Early Records of the Principal and Other Race Meetings* (London, 1863)
- Archard, Charles J., *The Portland Peerage Romance* (London, 1907)
- Arnold, Matthew, *Culture and Anarchy: An Essay in Political and Social Criticism,*

1869 (London, 1869)

- Ashton, John, *The History of Gambling in England* (London, 1898)
- Aspinall, A., 'Statistical Accounts of the London Newspapers, 1800-36', *The English Historical Review*, Vol.65, No.255, 1950
- Aydelotte, William O., 'The Country Gentleman and the Repeal of the Corn Laws', *The English Historical Review*, Vol.82, No.322, 1967
- Bailey, Peter, *Leisure and Class in Victorian England: Rational Recreation and the Contest for Control 1830-1885* (London, 1978)
- Baird, Rosemary, *Goodwood: Art and Architecture, Sport and Family* (London, 2007)
- Beckett, John V., *The Aristocracy in England, 1660-1914* (Oxford, 1986)
- Benson, John, *The Penny Capitalists: A Study of Nineteenth-Century Working-Class Entrepreneurs* (New Brunswick, 1983)
- Birley, Derek, *Sport and the Making of Britain* (Manchester, 1993)
- Black, Robert, *The Jockey Club and Its Founders: In Three Periods* (London, 1891)
- Black, Robert, *Horse-Racing in England* (London, 1893)
- Borsay, Peter, *A History of Leisure: The British Experience since 1500* (Basingstoke, 2006)
- Bovill, E. W., *English Country Life 1780-1830* (London, 1962)
- Bowle, John, *Charles I: a biography* (Boston, 1975)
- Brailsford, Dennis, 'Sporting Days in Eighteenth Century England', *Journal of Sport History*, Vol.9, No.3, 1982
- Cannadine, David, *Class in Britain* (New Haven, 1998)
- Casey, Emma, 'Gambling and Consumption: Working-Class Women and UK National Lottery', *Journal of Consumer Culture*, Vol.3, 2003
- Cassidy, Rebecca, *The Sport of Kings: Kinship, Class and Thoroughbred Breeding in Newmarket* (Cambridge, 2002)
- Chancellor, E. Beresford, *The Pleasure Haunts of London* (London, 1925)
- Chetwynd, Sir George, *Racing Reminiscences and Experiences of the Turf Vol.II* (London, 1891)

- Church, Michael, *Dams of Classic Winners, 1777-1993* (London, 1994)
- Clapson, Mark, *A Bit of a Flutter: Popular Gambling and English Society, C. 1823-1961* (Manchester, 1992)
- Clee, Nicholas, *Eclipse* (London, 2009)
- Colly, Linda, *Britons: Forging the Nation 1707-1837*, 2nd ed. (London, 2005)
- Cunningham, Hugh, *Leisure in the Industrial Revolution* (London, 1980)
- Curzon, Louis Henry, *The Blue Ribbon of the Turf: A Chronicle of the Race for the Derby* (Philadelphia, 1890)
- Day, William, *Reminiscences of the Turf* (London, 1886)
- De Moubray, Jocelyn, *Horse-Racing and Racing Society* (London, 1985)
- Disraeli, Benjamin, *Lord George Bentinck: A Political Biography* (London, 1852)
- Druery, John Henry, *Historical and Topographical Notices of Great Yarmouth in Norfolk and its Environs, Including the Parishes and Hamlets of the Half Hundred of Lothingland in Suffolk* (London, 1826)
- Edwards, Peter, *Horse and Man in Early Modern England* (London, 2007)
- Elias, Norbert, Dunning, Eric, *Quest for Excitement: Sport and Leisure in the Civilizing Process* (Oxford, 1986)
- Escott, T. H. S., *Club Makers and Club Members* (New York, 1914)
- Gilbey, Walter, *Horses Past and Present* (London, 1900)
- Graves, Charles L., *Mr. Punch's History of Modern England*, Vol.1, 1841-1857 (London, 1921)
- Guttmann, Allen, *Games & Sports; Modern Sports and Cultural Imperiarism* (New York, 1994)
- Guttmann, Allen, 'English Sports Spectators: The Restoration to the Early Nineteenth Century', *Journal of Sport History*, Vol.12, No.2, 1985
- Hargreaves, John, *Sport, Power and Culture: A Social and Historical Analysis of Popular Sports in Britain* (Cambridge, 1986)
- Harvey, Adrian, *The Beginnings of a Commercial Sporting Culture in Britain, 1793-1850* (Burlington, 2004)
- Hill, Christopher R., *Horse Power: The Politics of the Turf* (Manchester, 1988)

- Holt, Richard, *Sports and the British: A Modern History* (Oxford, 1989)
- Huggins, Mike, *Flat Racing and British Society, 1790-1914: A Social and Economic History* (London, 2000)
- Huggins, Mike, 'Lord Bentinck, the Jockey Club and Racing Morality in Mid-Nineteenth Century England: The 'Running Rein' Derby Revisited' *The International Journal of the History of Sport*, Vol.13, No.3, 1996
- Itzkowitz, David C., 'Victorian Bookmakers and their Customers', *Victorian Studies*, Vol.32, No.1, 1988
- Kent, John, *Racing Life of Lord George Cavendish Bentinck, M. P. and Other Reminiscences* (London, 1892)
- Kirby, Chester, *The English Country Gentleman: A Study of Nineteenth Century Types* (London, 1937)
- Lambie, James, *The Story of Your Life: A History of the Sporting Life Newspaper (1859-1998)* (Leicester, 2010)
- Laslett, Peter, *The World We Have Lost* (New York, 1965)
- Lennox, William Pitt, *Celebrities I Have Known with Episodes, Political, Social, Sporting, and Theatrical*, Vol.2 (London, 1876)
- Lowerson, John, *Sports and the English Middle Classes, 1870-1914* (Manchester, 1993)
- Malcolmson, Robert W., *Popular Recreations in English Society 1700-1850* (Cambridge, 1973)
- Mangan, J. A. (ed.), *A Sport-Loving Society: Victorian and Edwardian Middle-Class England at Play* (Abingdon, 2006)
- Mason, Tony, *Sport in Britain* (London, 1988)
- Mason, William H., *Goodwood: Its House Park and Grounds with a Catalogue Raisonne of the Pictures* (London, 1839)
- Matthew, H. C. G., Harrison, Brian, (eds.), *Oxford Dictionary of National Biography: In Association with the British Academy*, Vol.8 (New York, 2004)
- McIntosh, Peter, *Sport in Society* (Toronto, 1987)
- Mckibbin, Ross, 'Working-Class Gambling in Brirtain 1880-1939', *Past and Present*,

No.82, 1979

- Measom, George, *The Official Illustrated Guide to the Brighton and South Coast Railways and All Their Branches, Including a Description of the Crystal Palace at Sydenham and a Topographical Account of the Isle of Wight* (London, 1853)
- Monypenny, William Flavelle, Buckle, George Earle, *The Life of Benjamin Disraeli, Earl of Beaconsfield*, Vol.3, 1846-1855 (New York, 1914)
- Mortimer, Roger, *The Jockey Club* (London, 1958)
- Munting, Roger, *An Economic and Social History of Gambling in Britain and the USA* (Manchester, 1996)
- Murray, Amanda, *All the Kings' Horses: A Celebration of Royal Horses from 1066 to the Present Day* (London, 2006)
- Nevill, Ralph, *London Clubs: Their History and Treasures* (London, 1911)
- Oldrey, David, *The Jockey Club Rooms: A Catalogue and History of the Collection* (London, 2006)
- Orford, Jim, Sproston, Kerry, Erens, Bob, White, Clarissa, Mitchell, Laura, *Gambling and Problem Gambling in Britain* (Hove, 2003)
- Parry, J. D., *An Historical and Descriptive Account of the Coast of Sussex* (London, 1833)
- Pinfold, John, 'Horse Racing and the Upper Classes in the Nineteenth Century', *Sport in History*, Vol.28, No.3, 2008
- Prior, C. M., *The History of the Racing Calendar and Stud Book* (London, 1926)
- Raber, Karen, Tucker, Treva J. (eds.), *The Culture of the Horse* (New York, 2005)
- Rice, James, *History of the British Turf from the Earliest Times to the Present Day, Vol.I* (London, 1879)
- Rice, James, *History of the British Turf from the Earliest Times to the Present Day, Vol.II* (London, 1879)
- Schweitzer, David, *Charles James Fox 1749-1806: A Bibliography* (London, 1991)
- Seymour, Charles, *Electoral Reform in England and Wales* (London, 1915)
- Stenton, Michael, *Who's Who of British Members of Parliament*, Vol.1, 1832-1885 (Hassocks, 1976)

- Strutt, Joseph, *The Sports and Pastimes of the People of England* (London, 1801)
- Tesio, Federico, *Breeding the Racehorse* (London, 1958)
- Timbs, John, *Clubs and Club Life in London: With Anecdotes of Its Famous Coffee Houses, Hostelries, and Taverns, from the Seventeenth Century to the Present Time* (London, 1872)
- Tranter, Neil, *Sport, Economy and Society in Britain, 1750-1914* (Cambridge, 1998)
- Trevor-Roper, H. R., *Essays in British History* (London, 1964)
- Tyrrel, John, *Running Racing: The Jockey Club Years Since 1750* (London, 1997)
- Vamplew, Wray, *The Turf: A Social and Economic History of Horse Racing* (London, 1976)
- Vamplew, Wray, 'Sports Crowd Disorder in Brirtain 1870-1914: Cause and Controls', *Journal of Sport History*, Vol.7, No.1, 1980
- Vamplew, Wray, 'Reduced Horse Power: The Jockey Club and the Regulation of British Horseracing', *Entertainment Law*, Vol.2, No.3, 2003
- Vamplew, Wray, Kay, Joyce, (eds.), *Encyclopedia of British Horseracing* (London, 2005)
- Whyte, James Christie, *History of the British Turf: From the Earliest Period to the Present Day, Vol.II* (London, 1840)
- Wigglesworth, Neil, *The Evolution of English Sport* (London, 1996)
- Woodward, E. L., *The Age of Reform 1815-1870* (Oxford, 1938)
- Young, G. M., (ed.), *Early Victorian England, 1830-1865*, Vol.2 (London, 1934)

（邦文文献）

- 池田恵子『前ヴィクトリア時代のスポーツ：ピアス・イーガンのスポーツの世界』不味堂出版、1996 年
- 池田恵子「英国スポーツ史研究の潮流―30 年の歩み―」『西洋史学』第 235 号、2009 年
- ヴァンプリュー，レイ（宗田實訳）『英国競馬の社会経済史』日本中央競馬会、1985 年
- エリアス，ノルベルト、ダニング，エリック（大平章訳）『スポーツと文明化―興奮の

探求―』法政大学出版局、1995 年
・ 川島昭夫「十九世紀イギリスの都市と「合理的娯楽」」、中村賢二郎編『都市の社会史』ミネルヴァ書房、1983 年
・ キャナダイン，デヴィッド（平田雅博、吉田正広訳）『イギリスの階級社会』日本経済評論社、2008 年
・ グットマン，アレン（谷川稔、石井昌幸、池田恵子、石井芳枝訳）『スポーツと帝国―近代スポーツと文化帝国主義』昭和堂、1997 年
・ 小林章夫『クラブ　18 世紀イギリス―政治の裏面史』駸々堂出版、1985 年
・ コリー，リンダ（川北稔監訳）『イギリス国民の誕生』名古屋大学出版会、2000 年
・ 寒川恒夫「スポーツ文化複合」『体育の科学』第 41 巻、1991 年
・ ハーグリーヴズ，ジョーン（佐伯聰夫、阿部生雄訳）『スポーツ・権力・文化―英国民衆スポーツの歴史社会学』不昧堂出版、1993 年
・ バグリー，ジョン，ジョゼフ（海保眞夫訳）『ダービー伯爵の英国史』平凡社、1993 年
・ 原田俊治編『馬の文化叢書　第十巻　競馬―揺籃期のイギリス競馬』財団法人馬事文化財団、1995 年
・ 平田雅博『イギリス帝国と世界システム』晃洋書房、2000 年
・ ブリッグズ，A（村岡健次、河村貞枝訳）『ヴィクトリア朝の人々』ミネルヴァ書房、1995 年
・ マーカムソン，ロバート，W（川島昭夫、沢辺浩一、中房敏朗、松井良明訳）『英国社会の民衆娯楽』平凡社、1993 年
・ 松井良明『ボクシングはなぜ合法化されたのか―英国スポーツの近代史』平凡社、2007 年
・ 松本佐保「「上品な」公共圏―ロンドン・ナショナル・ギャラリーにおけるイタリア・ルネサンス絵画コレクションを中心に―」、大野誠編『近代イギリスと公共圏』昭和堂、2009 年
・ 山本雅男『競馬の文化誌―イギリス近代競馬のなりたち』松柏社、2005 年